真剣で猟犬に恋しなさい!!

山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で猟犬に恋しなさい！！

【Ｎコード】
Ｎ１６５７Ｘ

【作者名】
山茶花

【あらすじ】
ある孤児院から引き取られた少年の物語。
彼の過去は沢山の裏があった。
彼の夢はただ一人の人に愛されたく、そしてある人から『現代最強の女』のバトンを受け取った『次世代最強の女』だった川神百代と戦う事である。
因みにリュウゼツランルートのフラグが全て吹っ飛びますので、嫌な方はブラウザの戻るボタンで戻って別の作者の方々の小説を目を潤す際にご覧下さい。

これは前作『史上最強≠夢』に出て来たエアマスターキャラなどが出てきます。
年齢計算とかは好奇心が有ってもしない方が皆さんの夢が壊れずにすみます。

プロローグ　「夢と現実」（前書き）

過去を洗って設定をどうにかしないとしゃれにならないので過去の描写大目でのプロローグとしました。

プロローグ　「夢と現実」

俺はA県の孤児院に居た、名前は”白い家”。
名前のように白いのかと言えばそうでもない、って言うか何歳の時に来たのかも知らない。
上の名前は知らず下の名前だけが足に漢字で書いてあったんだって。
香耶、これできょうやって読むんだってよ、おかしな名前だ。

そんな俺にも友達が居る、それは上の名前は知らないけど一子って言う泣き虫な女の子と源忠勝って言う優しい男の子。

「キョウちゃん！！」
「走るなよ、一子」

今走ってきてるのがまさに今言ってた一子だ。
そんな事を言って走ったら転んで擦り剥くぞ、そして……

「うぇえええぇん」
「ったく、ほらよ、絆創膏だ」
「有難う、タッちゃん、足見せろよ、一子」
「急がなくても良いだろうが、一子、怪我したら駄目なんだからな」
「2人とも有難う、何して遊ぶ？」
「かくれんぼやろうぜ、俺が鬼になってやるよ」
「キョウちゃんが鬼？」
「面白いじゃねえか、見つけてみろよ」

そんな他愛も無い話や遊びをし合って楽しい時間をすごしてきた。
しかしそれも6歳の頃に突然終わる、タッちゃんが引き取られてい

ったのだ。
そしてそんな友達が引き取られていった翌日の事、俺にも客が来たのだった。

「俺のガキにならないか？」
「なんだよ、おっさん？」
「おっさんじゃねーよ、まだお兄さんだ」
「何であんたのガキにならなきゃいけねーんだよ？」
「友達が引き取られてんじゃん、さびしくないのか」
「さびしいけど……」
「だったら来いよ、ここに居ても会えるかわからねーんだぜ！！」
「分かったよ、おっさんの名前は？」
「俺の名前は……テメェがおっさんで良いならおっさんと呼べ」
「おっさんで良いならそう呼ぶよ、よろしく、おっさん」
「お前の名前は？」
「俺の名前は香耶って言うんだ」
「面白い名前だな」
「そうだろー」

それからこの川神市って所で俺はこのおっさんと生活をすることになった。

「座って待ってろよ」
「何やってんだよ、おっさん」
「飯だ、食え」
「頂きます」
「で、味はどうだ？」
「味があんまりしないぞ」
「仕方ないな、旨いもの作れるように頑張るからよ」
「外に出てくる」

「行って来い、怪我するなよ」

そして俺は原っぱへと行った、なんかダンボールで出来た城に人が居る。

「誰だ、お前？」
「俺か、俺の名は風間翔一だ！！」
「へぇ、これお前が作ったのか？」
「そうだぜ、『風雲風間城２号』だ！！！」
「１号はどうなった？」
「おっさんが住んでたから駄目になった」
「そうかお前、面白いな、友達になってくれよ」
「良いぜ、名前はなんていうんだ」
「香耶だ、宜しくな」
「キョーヤか、俺の事はキャップと呼んでくれ、気にいってるからな」
「分かった、キャップ……でなんか近くに居るぞ」
「そうか、どうする？」
「話聞けば良いだろ」
「そうだな、近づけよ」

俺はそしてその子供に近づいた。

「お前は何でここに来たんだ？」
「俺は家出してここに来た」
「そうか、家出か、そりゃまた何で？」
「お前に言わなくて良いだろ、俺は今理由なき反抗をしている」
「はぁ？」
「おお、何だそれかっこいいな！」
「何だもう一人いたのか」

「まぁな、キャップ来たのか、話してるがコイツ結構訳分からんぞ」
「母親がうるさいから家出したんだ」
「それにしても反抗の気持ちはつまらん理由だなぁ」
「家出！、やるじゃねーか！」
「とは言っても俺は冷静な子供だ」
「冷静なら家出しないだろ……」
「あまり遠くへ言っても、アホにさらわれても経歴にキズがつく」
「難しい言葉知ってるなー、お前」
「かといってすぐに帰っても舐められる、程よく家出するんだ」
「そういうもんか……」
「んん？、あまりかっこよくないかな」
「この空き地はなかなか良い、隠れ家にしようか」
「駄目だ、先に俺が目をつけた、俺のもんだ」
「一応、俺は友達になったしこんな広い所を独り占めする気はない」
「実は俺が先に目を付けてた、俺のもんだ」
「ふざけんな、俺が先だ」
「証拠があるのか？」
「「あるぞ、これ！、『風間城』」」
「これ作ってたけど、お前見なかったぞ」
「そしてお前は次に……『遠くで遊んで居たんだという』」
「言わないぞ、しかしこの城は甘いな」
「言われても困るからな」
「待て、風間城が甘いだと？」
「見ろ、こんな広い通路じゃ敵が一度に潜入してくるだろ」
「そう言われれば、そうか、多かったら面倒だな」
「それでここを直角にして通路を狭くしろ」
「多い人が入れないから楽だな」
「こんな広い城を作ってどうするつもりだ」
「基地にすれば良いんじゃないのか？」
「そうだ、ここを基地にする！、『俺たち』の秘密基地」

「……お前ら、あまり見ない顔だ」
「今まで孤児院に居た……」
「……今まで親父と旅ばかりしていた」
「成る程な、ではこの秘密基地は？」
「俺一人だった、今さっきキョーヤが友達になったから二人だけどな！！」
「2人だけの城か……それでは国がうまく機能しないだろう…」
「お前なんか面白い奴だな」
「……頭よさそうだしなんか面白いぞ、お前」
「ん？」
「「一緒に遊ぶか？」」
「ああ、俺もこの城に入れてもらおう」

……こうして俺と風間翔一、そして直江大和が出会った。

そして友達が出来てその数日後の事……

「お前ら良い城作ってんじゃん、よこせよ」
「嫌だね、これは俺たちの風間城だ」
「風間、一年の奴か、上の人の言う事は聞かないと駄目だよな！！」
「うるさいぞ、ここは俺たちの場所だ、渡さない！！」
「わからねぇ奴だ、やっちまえ！！」
「お前ら、何やってんだ！！」
「なっ、キョーヤ！！？」
「お前も新しい1年だよな？」
「だったらなんだよ、デブ」
「てめぇ、殺してやる！！」
「出来もしないことといってんじゃねぇ！！！！」
「ぐあっ！！！」

上級生との喧嘩の結果、風間城は巻き込まれて壊れた、キャップと大和に怪我は無かったが俺は、アソパンマンみたいに顔が腫れた。

「スマン、キャップ、壊れちまった」
「別に良いぜ、キョーヤって強いんだな、驚いたぜ」
「でもあいつらは倒せなかった、全員逃げやがったし」
「雨が降ってきたぞ、俺は帰る」
「流石だな、大和」
「俺たちも家に帰るか」
「そうだな……」

家に帰って俺はおっさんに相談する。

「上級生との喧嘩で悔しい思いをしたから強くなりたい？」
「おっさん、俺が寝たり出て行ってからなんかやってんじゃん」
「あぁ……やっているな、見てたのか」
「俺もおっさんみたいにあれをやってみたいんだよ、教えてくれよ」
「どうしても教えて欲しいのか？」
「ああ、教えて欲しい！！」
「わかった……でも俺の教え方は甘くないぜ」

――――――――――　そこで俺はガキのころの夢から覚めた。

「やめてください……って、何だ、夢か」
「何うなされてたんだ、お前？」

ここのアパートの管理人さんで筋肉が凄い土方の人である、わざわざ俺を起こしに来てくれたのだ。

「起こしに来てくれたんですか、わざわざすいません」

「7時越えてんぞ、学校大丈夫か？」
「ヤバ、始業式なのに！！、行ってきます！！」
「若いって良いねぇ、俺も昔はあんな奴だったなぁ」
「まぁ……今までの忌まわしい事件さえなければもっと良かったんですけどね」
「去年のあれなんかミイラの高校生とか話題になってもおかしくないぜ」
「いじめの対象にもなりますしね」
「そんな野暮な輩は入れさせないけどな」

――――――――――　今日から新学期で新入生が入ってくる、俺は学校の新学期で挨拶のチラシを配る係だった。

そのため学校に着いた後はひたすらにチラシを配る、新入生が俺を見て驚くが別に良い。
友達『だった』大和も一緒になって配っている、まぁ俺の事には気づいていないが。

「この通りは人があまり通らないから退屈だな」
「そうは言っても人は来る、って凄い勢いだな、どいてろ」
「あぁ……ミイラさん、わかった」

ある大きな事故で死ぬ事はなかったが大火傷を体中に負ってしまったのだ、その際皮膚が爛れたのを隠すためにミイラになったのだ、おかげで学校内では名前で皆が呼ばず”ミイラさん”が定着してしまった。

「桜が咲いてるのに無粋な人だな」
「ひえっ！？」
「それに受身取ったらアレが見えるだろ『黛（まゆずみ）』さん」

この驚いている女性の名前は黛由紀江と言って。父親が国から帯剣許可を貰うほど名の知れた武道家の娘さんなのだ。
正直父親より力を一瞬感じたのは気のせいではないと思いたい。

「あっ、貴方は、ひっ、久しぶりです！！！！」
「覚えているよ、あの事故で助けてくれた事、元気そうだね」
「そちらもお元気で何よりです！！」
「早くしないと入学式が始まるけどそれのせいで多分警察沙汰になるかもよ？」
「あっ、ああ、有難うございます、ではっ！！！」

大きな事故があってこんな見た目になっても自分を信じてくれる人はいる、いやだな、メランコリックな気分になってしまった。

まあ……忘れられるわけも無いか。
アレは去年の今日と同じ桜が満開の日の事だった……

プロローグ　「夢と現実」（後書き）

雨で風間城が崩壊する設定を変えました。
過去の描写はなんやかんやで相当はさみます。

第1話「S組」（前書き）

夢の中で過去編をしています、今回の最後にとんでもない爆弾がありますが気にしないで下さい。

第1話「S組」

――――――回想シーンへと移る。

１５歳で新しく高校生となるために川神へと戻る俺は３年前から滞在していたドイツからの帰国途中。
いきなり飛行機が高度を失い墜落してしまったのだ、その時に生き残ったのはただ俺一人。
爆発や炎が燃え盛る中で俺は這いずりながらも命からがらであったが抜け出した。
幸い北陸地方での墜落であった為、近くの林で鍛錬をしていた由紀江さんが速く、俺を見つけて保護してくれたおかげで、発見当時は危険な状態であったはずの命は助かった。
そのあと親父達がわざわざバイクで迎えに来てくれてある病院に連れて行かれた。
そこで遺伝子検査を行った結果『異能生存体』と言う奇跡の様な存在であると認識された。
その異質な力の遺伝確率は２５０億分の１、因果律を捻じ曲げて死ぬはずの運命に打ち勝ったらしいのだ。
しかし残念な事に体の大火傷は完全に治るまで一年と少しは掛かるであろうとの診断。
一年が経った今でも鏡を見てあとどれ程掛かるのかが予測できない。
別に死なない体というわけではなく肉体的に頭がトマトとか老衰とかそういったのはアウトである。
あと余談ですが、看病してもらった時に食べた由紀江さんのおかゆは旨かったです、いやマジで。

――――――回想シーン終わり。

「で……わざわざ、北陸の方じゃなくてこっちの方に来たのか」
「そうですけど、携帯がなってますよ？」
「ああ、ちょっと人脈をな、一年の間に大幅に広げたんだ」
「そうなんですか、少し変わりましたね」
「そうだろうね、でも由紀江さんは変わらないね、慌てる所とかさ」
「私の方が年下なのにさん付けはやめてください」
「あの時貴女のおかげで俺の命は助かったんだ、尊敬の意味を込めてそう呼ばせてくれ」
「そっ、そんな恐れ多い、人として当然のことをしただけですっ！！！」
「はいはい、俺は教室に行くから。また今度に逢った時、さん付け無しで呼べるように頑張りますよ」
「はっ、はい、どうかお願いします！！」

――――――――　そういって俺は職員室に行く、なぜなら今日から俺はクラスが変わるからだ。

「で……オジサンの２－Ｓに転科するんだけどいける？」

自分をオジサンと言うこの先生の名前は宇佐美巨人（うさみきょじん）。
人間学と言う科目を受け持っていて、ユニークさから生徒への評判は良い。
まぁ……人間としては中年の哀愁が漂うとか生徒に馬鹿にされ気味なのであって正直悲しいけどね。

「いけます、一応Ｓ落ちはしないよう頑張る覚悟はあるので」
「まぁ、転科の編入試験で７００点満点中６９３点叩き出してる時点で本気丸出しだよな」
「環境次第で本気出すかどうか、津々浦々過ごすべきかって考えてますからね」

「そうかよ。まぁ、とりあえず今日から俺の事はちゃんと先生付けで呼べよ、他の生徒みたいにヒゲは駄目な」
「はい、宇佐美先生」
「あと、代行センターの依頼来てるから今日も頼むわ、忠勝にも言っといてくれ」
「って言うかよくこんな外見の人雇いましたよね、今でも不思議ですよ」
「脛に傷持ってるから駄目とかはしないって、おじさんこう見えても心広いんだぞ」
「……小島先生に売り込めとか言うわけじゃないですよね？」
「違うって、ゴメン…ちょっとだけ考えた」
「とりあえず行きましょうか？」
「あぁ……そうだな、香耶」
「先生は何でSの担当になったんですか？」
「そんなのオジサンが知るわけ無いだろ、あとさっきの事は児島先生に内緒にしとけ」
「はい、分かりました」
「二つ返事ってのが怪しさ満載だが信じるかな」
「その前にF組に言ってタッちゃんに伝えときますか」
「いやいや、ソイツは困る。オジサンの面目丸つぶれだからな」
「さいですか」
「そういうもんだ、世の中は順序良くして上を立てろ、そうすればゴマすりとは違うが印象が良いぞ」
「でもそんな事言ったらルー先生の方が年上なのに宇佐美先生は立ててませんよね」
「そういうもんだよ、こんな事言っても所詮はケースバイケースって奴だ、相手次第で変わっちまうもの、それが世の常だ」
――――――――　そう言われて俺は宇佐美先生と新しいクラスである２－Sの扉ををくぐった。

「はーい、お前等ちゅうもーく」
「今日はいつもに比べて気合が入ってますね、何か良いことでもありましたか？」
「はいはい、葵、おじさんをそんな風に言わない、それだと普段やる気無いみたいだろ」
「実質そうなのじゃ、ヒゲ」
「おいおい、不死川までコンボ繋がったよ、悲しいなぁ……」
「それよりも何があるのか早くはなしをすすめるのだー」
「ユキの言うとおりだぜ、先生」
「井上達は良識あるねぇ、実はC組から編入生が来てんのよ、これが」
「何、Sクラスへ転科してきたと言うのか！？」
「珍しいですね、英雄が慌てるとは」
「英雄様はきっと普通のクラスであるCからの転科と言う珍しさに驚いたのではないかと」
「あずみさん……流石ですね、英雄の事をよく見てないとその小さな違いは分かりません」
「気にするな、我が友トーマよ！！、あずみはずっと我のそばにいたゆえ分かって当然と思っておくのだ！！」
「で……先生、いい加減転入生呼んで良い？」
「あー、呼んで良いっすよ」
「どんなのか早く見るのだー」
「じゃあ、入って来い」

――――――――　そういって俺は２－Ｓの全員の前に立った。

「おやおや……これは」
「巷で噂のミイラさんかよ、まぁ男ってバレバレだけどな」
「あの姿は見た事あるのじゃ、１年生の時にじゃが……確か」

「アレは感じがどこかで感じた奴ではないか？」
「（おいおい、なんなんだよ……あんな格好で来る奴初めてだろ）」
「アレー、来ちゃったんだー」
「名前は……言わなくて良いよな、皆ミイラさんで統一しちゃってるみたいだし」
「はいはい、で席はどこですか？」
「あいつの斜め後ろで良いか、丁度そいつが落ちるからな」
「分かりましたよ、不死川さんでしょ」
「ふむ、あの日から此方の名前を覚えておる、その殊勝な態度は褒めてやろう」

――――――　そう言われて俺は不死川って言う人の斜め後ろに座る、この人……なんかやってるな、合気か？

「此方をじろじろと見おって何か気になることでもあるのか？」
「ああ、武術をやっているんじゃないかなと思ってさ、悪かったなら謝る」
「此方を武術家と見抜くとは……さすがは此方が認める男なだけはある」
「ん？」
「覚えておらんのか、此方が車の事故で危なかった時飛び込んで助けたのを！！」
「あぁ、そういえばそうだったな、まぁ……目の前で女の人が死んだら気分悪いぜ、日常生活の中でだけどな」
「全く……此方を助けると言うのがどれだけの大儀か知らんとは」
「そんな顔しなくても、すみません……」
「まあ良いわ、そういえば今週末にクラスのオリエンテーションがあるらしいの」
「どこ行くのか知っていますか？」
「軽井沢じゃ」

「有難うございます」
「この程度、此方なら知っていて当然、礼には及ばん」

――――――――HRが終わって俺にいろんなやつが寄ってくる

「それにしてもその包帯の中身、気になりますね」
「葵冬馬……」
「あれ、私名前言いましたか？」
「いや……若は名前を言ってない、お前怪しいな」
「…俺は怪しくない」
「そうは言っても外見からして、怪しすぎるのでー、取らせてもらいます☆」
「やめろ！、忍足あずみ」
「あずみの名前まで……もしや、いや、そんなことは無い、あの日に死んだのだからな……」
「皮膚を採取して真偽のほどを確かめられてはどうでしょうか、英雄様！！」
「構わん、放っておけ」
「はい！！」
「それにしても名前を把握しているのは、有名だからと言う線が無きにしも非ずですね」
「若のことだから突拍子もなく、サイキッカーだとか言うんじゃないかとひやひやしたぜ」
「準、あの人のなかみはねー」
「逢間小雪、言う必要なんてないだろ、マシュマロやるから言わないでくれ」

そう言って寝た俺は夢を見る、一番とてつもない夢を、大和達から離れる理由になった夢を……

第1話「S組」（後書き）

次回はなぜ小雪が逢間になっているのか、そして父親が誰なのかをはっきりさせようと思います、上の名前抜くのって当初よりも相当きついんで。
原作知識があれば原作介入できますが、人徳的なものを理由に止めているのでそういうものじゃあありません。

第2話　「Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｏｆ　Ｋｙｏｕｙａ」（前書き）

モロ＝準主役
長枝＝鬼軍曹

第2話　「Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｏｆ　Ｋｙｏｕｙａ」

――――――あの日さえ無かったら俺は……

「大和、キャップは？」
「風のように消えていった……どこへ行ったんだろうな」
「そうか、また行ったんだ」
「おーい、二人ともこっちへこーい」
「分かっているよ、モモさん」
「行くよ、姉さん」

しかし俺には見えていたのだ、ある女の子が……黒い髪の毛をしてそこに突っ立っていたのを。

「オイ……どうしたんだ？」
「……っ！」

その子はびくりと体を震わせて遠ざかる、一体どうしたんだ？

「オイ、キョーヤ、行かないのか？」
「悪い、ちょっと先に行って遊んでてくれ」
「そうか…俺は行っておくぜ」
「分かった、皆には言っておいてくれ」

そう言って大和を先に行かせる……あの女の子はいったいなんで逃げたんだ？

「オイ、逃げなくて良いよ」
「……」

「怖くないって、ほら何もしないから来いよ、話をしよう」
「本当に何もしない？」
「しない、しない、嘘はつかねーからおいで」
「うんっ！！」

そう言ってこの女の子は花が咲いたように微笑む、なんでこうも良い笑顔が出来るのに逃げられたのだろうか？

「お前の名前は？」
「小雪……」
「コユキか、良い名前だな」
「そう？」
「そうだよ、俺の名前は香耶」
「キョーヤ？」
「そうだよ、呼んでごらん」
「僕の事もユキって呼んでくれる？」
「良いけど先に呼んでくれよ」
「キョーヤ」
「うん、良い声だな、それでユキに聞きたいことがあるんだけど良いか」
「なぁに？」
「何であんな所に居たんだ？」
「僕ねえ、誰も友達居ないんだ……」
「だからマシュマロ持って仲間にしてもらおうと？」
「うん……」
「それなら任せろ、着いて来い」
「えっ、ちょっと！？」

そう言ってユキの手を引いて皆の所へ連れて行く。
と思ったらモモさんの方に行っていたはずの大和が目の前に居た。

「キョーヤ、その子は一体どうしたんだ？」
「仲間に入れてやれないか、友達が居ないんだってよ」
「残念だが定員オーバーだ、キョーヤ」
「何！？、そんな決まりは無いだろう」
「ソイツは隣の小学校の奴だ、関係ない奴を仲間に入れれば俺たちにも飛び火する」
「そんな……お前がどうのこうので決められるようなものじゃあないだろう！！」
「俺にとって人生は死ぬまでの暇つぶし、それまで幾ら暇つぶしでも無駄なものを持ち込みたくは無い」
「それでも……」
「それ以上言うなら、お前が風間ファミリーから抜けないといけなくなるぞ、和を乱すのは良くないからな」
「くっ、それなら俺はこいつと遊ぶ！、大和がそんな見解が狭いやつだとは思わなかった！！！！」
「じゃあ俺たちは……」
「あぁ……」
「「決別だ」」

そう言って俺は風間ファミリーを抜けた。
正直短絡的な怒りではあるが、一人ぼっちの辛さを知っている俺からすれば、ここでユキを一人にする方がよっぽど悪い気がした。
そしてユキの体の汚れを見た俺は遊ぶよりも先に家に連れて帰った。
「父さん、居るんだろ？」
その時から俺は「おっさん」と呼ばずに「父さん」と呼んでいた。

「なんだ…その子は？」
「指一本で逆立ちするなよ……」
「お前に厳しい教え方してるのに、俺がやらなきゃカッコつかんだろ」
「この人、誰？」
「俺の里親だよ、名前は……」
「逢間長枝だ、宜しくな」
「それで父さん……」
「汗流したし、銭湯行くか」
「えっ？」
「外で遊んで汚いからお前らも行くんだよ、どうした、来ないのか？」
「いや……行くけど、ユキ、ユキ？」
「あっ、ごめんなさい……」
「こんな事で謝るな、ほれ、タオルと石鹸とシャンプー持って、行くぞ」

父さんの案内で銭湯へ行く。

「女湯がねぇんだよな、分かれてないんだよ、ここ」
「父さん……そんな所になぜ連れて来た？」
「いや、なんか女湯で一人にしたらあの子が危ないだろ、あとここは普通の人は知らんから、大人の女とかいないぞ」
「そうか、行こうか、ユキ」
「うん！！」

そして俺は風呂に入る……って

「父さんのあれ見えたけど、やばくないか？」
「気にすんな」

「どれ位あるんだよ？」
「17の時は27センチで今は知らん、とりあえず洗え」
「あぁ……」
「このお風呂、綺麗だねー」
「ユキも洗えよ」
「うん、分かったー」
「待て……この子」
「なんだよ……父さん？」
「ちょいと耳貸せ」
「えっ…分かった」
「あの子、凄い打撲の痕とかないか？」　※小声で言ってます
「多分、いじめか何かだと思うけど」　※小声で返してます
「必要なら俺にも言え、大人の問題って奴があるんだからな」　※小声で言ってます

それでお風呂からの帰り道、駆け足で父さんとユキより早く家に帰ると意外な来客が居た。

「モロ……どうしたんだ？」
「頼みがあるんだ、キョーヤ」
「おいおい、風間ファミリーから抜けた俺に即日で通達か？」
「えっ、キョーヤ、本当に抜けたの！！？」
「そうだ、大和から聞いていないのか？」
「聞いたけど……信じられなくて」
「お前って本当優しいな、俺が女だったら惚れているよ」
「からかわないでよ！！」
「で……何の用だ？」
「実はキョーヤって凄く強いじゃん」
「そうか、ただ鍛錬した結果だと思うぞ」
「僕も強くなれるかな？」

「いや……それは」
「君も頑張ればなれる事はなれるぜ」
「父さん…」
「名前を聞くが、何って言うんだ？」
「師岡卓也（もろおか たくや）です」
「モロか、呼び方は定着させよう、でなんで強くなろうと思ったんだい？」
「実は……」

そしてモロは理由を語る、虐められている女性を守りたいって言う理由、それを聞いた父さんは……

「良いけど、覚悟はあるか？」
「えっ」
「コイツと同じ八極拳は教えてやれないが別の武術を教えてやる、が血反吐吐くし、血の小便が出るほどきつい、それでも良いんだな？」
「それでも……守れるほど『強くなれる』なら……」
「なら力をお前に授けてあげよう、必死について来い」

その言葉から地獄の修行にもう一人増える事になったのだが、俺はモロにユキの体のケガについて語った、そしてその答えはやはり優しすぎるモロらしい一言だった。

「キャップやガクトにも相談してみる、これがやばい事だったら本当に洒落にならないよ」
「本当に有難うな、俺はお前が友達でよかったと思うよ」
「照れるな、僕そこまで凄い事言ったつもりは無いんだけど……」
「無駄口叩く暇があるのかー！！！、ちゃんとしろー！！」
「いやいや、人乗せて腕立て伏せするあんたに言われたくない」

「麗一、付き合ってくれて有難う」
「いやいや、この程度なら幾らでも手伝うっすよ」

――――――そして2ヵ月後、悲劇が起こった。

打撲の事について話し合う事をすればいい、そう考えて今日はユキが来るのを待っていた……しかし来ない事から、俺は心配になってユキの家を探す。
とは言っても事前に足を使っていたからユキの家は知っている、こういうのはキャップから学んだのだ。
『教えてもらえないなら、自分の体や頭を最大限に使え』ってね。
それに学校で虐められているなら、親が黙っていないはずだ。

「本当にこんな事があって良いのか？」

目の前にあるのは悪夢の形、ユキが母親に首を絞められている、ユキはショックや恐怖で髪の毛は白くなってしまっていた。

「許さん……」

踏み込んでガラスに一撃を加える、するとガラスは一気に砕け散って侵入できる状態になった。

「ユキを離せ！！」
「邪魔をしないで！！」
「おおおおお！！」

怒りに任せて顔を殴りユキを開放させた。

「ふざけた事やってるんじゃないぜ、ばあさん！！！」

「貴方も同じようにしてあげる、ぅぉおおおおおおおおっ！！！！」
「かぁ！！！！」
腕に握った包丁を平然と避けて小雪に電話するように外へ出て行かせる。
「私から小雪を取らないで！！」
「残念だがここであの子は幸せになれない！」
外に出て誰か頼れる人に電話をしよう……ってアレは確か……！！
「モロ？」
「どうしたの、そんなに慌てて？」
「実はキョーヤが警察を呼べって……」
「そうか、確かここに公衆電話がある、行こう！！」
「この人誰？」
「俺か、俺の名は風間翔一って言うんだ！！」
「僕はキャップって言ってるけどね、細かい所を知ってるからすぐに見つけてくれるよ」
「凄いね」
「でもそんな事を言ってる暇なんて無い、小雪も一緒に行こう、着いてくるんだ！！」
「ねぇ…キョーヤは大丈夫なの？」
「大丈夫さ、死なないよ」
そして公衆電話を使って警察を呼ぶ。
それから１０分ほどした後、ユキのお母さんは捕まって警察病院へ搬送された。
そしてキョーヤは大怪我をしたがまたユキのお母さんも大きな障害

を残すこととなる。

「ゴメン、ユキ、やっちゃったよ」
「お母さんがキョーヤをそんな風にしたの？」
「うん、やっぱり包丁はむちゃくちゃだね、掠っただけでもきついよ」
「良いよ、僕が笑っていても苦しくしてくるお母さんよりキョーヤの方が良い」
「警察だが…分かっているね、話してもらうよ」
「はい、分かりました」

警察での話で親の監視の元、２年の間外出および、他者との接触を禁じる。
つまり学校へ行く事も無理となった。
父さんはあっという間に駆けつけてくれたけど少し不機嫌そうだった。

「相談しろと言っただろうが」
「ごめんなさい」
「で、とりあえずこの子は身寄りが無いと……」
「うん…」
「ならよ、小雪とか言ってたな」
「うん、どうなるの？」
「このままじゃあ行き倒れだ……」
「そんな何とかできないんですか！？」
「モロ、叫ぶな……そこでユキに聞く」
「なぁに？」
「このまま道端で眠るか、俺の子になるのとどっちが良い？」
「それってつまり…」
「俺がユキを引き取るってことだが、どうする」

「キョーヤやモロに会えるの？」
「当然逢える、キョーヤは家の中でだけどな」
「なら僕、おじさんの子になる！！」
「早っ、即決だな！！」
「キャップ、今回は即決めだと思うよ」
「じゃあ、今日からお前は逢間小雪だ、宜しくな！！」
「うん！！、わーいわーい！！」
「微笑ましいな」
「キャップ、今の言葉はおじさんみたいだよ……」
「それはそうとキョーヤは病院だな、結構血が出てる」
「さっきの僕の言葉、無視してない！？」
「さすがモロ、ナイスツッコミだ、キャラメルをやろう」
「長枝さんもちゃっかり乗らないで！！」

病院に行ったがユキの方は精神疾患という診断、ストレスや虐待による心の傷が深い為、カウンセリングしだいでは治るが、時間が必要とのこと。
そして香耶は大怪我の為治療をするが思った以上に時間が掛かり夜にもう一度来てくれといわれた。

「ゴメン、キョーヤ、間に合わなくて」
「キャップはまたどっかいったのか、モロ？」
「うん、名古屋のひつまぶしがおいしそうって理由で……」
「そうか、間に合わなかったものは俺はなんとも思ってない、お前に言っていた所で場所知らなかっただろ？」
「でも！！」
「でもじゃないよ、俺はそう思っている」
「分かった、もうこの事は言わないよ」
「それで……話はここからだ、もし学校が転校でこっちにユキが来たら守ってやってくれないか？」

「えっ？」
「嫌ならかまわないんだ、俺はもう学校に行けないからな」
「そう言えばそうだね、できる範囲でならやってみる、これは頼み聞いてるわけじゃあないよ、僕だってキョーヤみたいに守ってみたいんだ」
「…モロ、お前本当にいい奴だよ」

――――――――　そして俺はまどろんだ夢から覚めた。

第2話　「Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｏｆ　Ｋｙｏｕｙａ」（後書き）

今回で親だった男の名前判明。
モロは京が好きなので守るために弟子入りしました、エアマスターの時みたいな鬼モードの長枝の修行は、ワン子が原作でやっていたのと同じくらいの密度と量です。
しかも当の本人はそれを超える修行をしています、モロに何の武術を教えたのかはまたいつかに教えますのでご容赦を。
今回は香耶の悪夢ですが、次回は別の人の悪夢をお送りします。

第3話　「Nightmare　Of　Moro&Tyoushi」

モロの悪夢＝不遇
長枝の悪夢＝敗北

第3話　「Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｏｆ　Ｍｏｒｏ&ａｍｐ；Ｔｙｏｕｓｈｉ」

――――――あの日さえ無かったら僕は……

決意もせずに流されて弱いままだっただろう。

強くなろうとは思わなかった、そして後悔は酷いものへとはならなかった。

僕が長枝さんからカポエイラを教えてもらって一年が経ったある日のことだった。

「僕はこの一年何をしていたんだろうね……キョーヤ」

「どうしたんだ、モロ？」

「僕の武術を習いたかった理由って覚えてるかな」

「虐められていた人を守るためだったっけ？」

「正解だよ、でも無理だった」

「そうか……何かゴメンな」

「何で？」

「ユキを守ってくれって約束やってくれてたんだろ、そのせいで……」

「それは違うんだ、それにそこまで出来ないよ、ただ悪口は言わないように注意したりして被害を小さくしてる」

「それでも十分だ、ユキはお前がやってくれているって言っているんだよ」

「気づいてたんだね……」

「そうだ、お前の優しさはユキに伝わっていると思うよ」

「で、本題に戻るね」

「あぁ、守れなかったってことだな」

「違う、そうじゃなくて守られる事は守られたんだ」

「それは良かったな」

「実は大和が先にその子を守ったんだ、僕の行動は実を結ばなかったんだよ」
「大和が守っただって？、でもあいつは言ってたじゃないか……他人との関わり合いは無駄だって」
「そう言ってたけど……それはそうと大きな台風があったの覚えてる？」
「あったな、とても大きな奴だったっけ」
「実はあの台風でね、僕達の中に新しいメンバーが入ったんだ、その子が新しいメンバーだったからだと思う」
「新しいメンバーだと……」
「うん、それでなんだと思うよ」
「俺が抜けたからそいつは入ったのかね？」
「多分そうだと思う」
「そうか、お前も災難だったな」
「何でそう思うんだい？」
「努力した行動がうまく実を結ばなかったからな……」
「だから長枝さんに言うんだ、これ以上はやっていても意味がないからさ……」
「それは残念だな、せっかく武術仲間が増えたと思ったのに」

――――――――　いつもの鍛錬が終わった後に僕は今日で辞めることを伝えた……すると

返ってきたのは怒りでもなく諭すような物言いで語り始めた。

「お前はそのままで良いのかい？」
「そのままで……とは？」
「そのままっていうのは悲しい気持ちを抱えたまま、自分の努力を否定しても良いのかって聞いてるんだ」
「僕がしてきた努力なんて高々1年じゃないですか、子供同士とは

いえ、何年も策を練った人間に比べたら無理だったんですよ」
「でもお前は血反吐を吐いても何が有っても、俺がやれといった事は成し遂げてきた、それは何でだ？」
「そんなの……自分が強くなったらその子を守れるんじゃないかと思いました、そうなれたら嬉しいと思えたんです…でもできませんでした」
「出来ないから諦める……お前がそれでも良いなら良いけどどうするんだ？」
「どうするって？、そんなの……」
「誰も守らないまま、自分の限界を決めるのか？」
「限界なんて、そんなのとうに振り切ってましたよ」
「だったらもう一段階振り切れよ、本当に中途半端で良いのか？」
「そんなの良いわけ無いに決まってます、でも……やろうと思っていた目的が果たせなくて、これ以上やって、一体何の意味があるんですか？」
「何の意味とかは良いんだよ、たとえその努力が実を結ばなくても良いだろう、誰だって生きてる間に屈辱を食うさ、屈辱を食わないなんて奴はいない」
「長枝さんも？」
「1回だけな、あとこういうものって絶対巡り巡るものだ、今回が駄目でもまたいつかそんな気持ちになる」
「長枝さんが一回なら僕はもっとそんな目にあうんですね」
「あうとしてもそれは頑張ってやっているという証だ、己の限界を何度も超えるチャンスだ」
「ならもう一度だけ、諦めずに頑張ってみます、中途半端で終わらせません、その……今までどおり、いつになっても良いから守るってのを成し遂げてみます」
「あぁ、そのひたむきさが良い、またいつかそんな奴に会えるように俺も応援してやる」

その応援の言葉を聞いて僕はもう少し頑張ってみようと思った。

――――――――　そして僕は夢から覚めた。

――――――――あの日さえ無かったら俺は……

強いままで、もっと傲慢で人を見下していただろう。
二人の子供を引き取るなんていうこともせずに見捨てていたはずだ、
我ながら血も涙もない人間になっていたと思う。
そう考えれば変わるために確かにあの日に神様がいたのならば最高の贈り物をくれた。
しかしまたあの日ほど屈辱を食い、悲しみに暮れた日も無かった。
アレは忘れもしない…１１年前の夜の公園でのストリートファイトだった。
向かい合っているのは銀色の髪をしたホスト風のスーツと、白いローファーがトレードマークの男だった。

言葉を語るのは難しく、互いが互いを示し合わせたように見合わせて構える、その構えは一寸も違わず一緒、しかし利き手と踏み込みの足は鏡で移したように逆になっていた。

互いが踏み込む、その一撃は必殺の威力を持ったままぶつかり合う。

最初の一撃は俺がホスト風の銀髪の男を吹き飛ばした。

再び向かい合い構えた時そのホスト風の男は言った、こちらの必死な思いに答えると。

誰だってその道では負けたくない、ましてや同じ八極拳士で同じ構え、そしてさっきの一撃は本気ではなく、今から本気だと言って構

えなおす。

その圧迫感は今さっきの一撃の際の比ではなく、鋭くなく纏わりつくのでもなく、際限なく広がる重圧がまるで質量を持って押しつぶしてくるよう。

動物で言うならまるで蛇が一飲みにするように俺を威圧して飲み込もうとする、もし戦いに慣れていなかったら、俺はあっけなく飲まれていただろう。

二撃目の重みはお互いが再び必殺の威力を持ってぶつかる、しかし今度は俺の方が押し返された。

踏み込みがぬるいといわれ、その僅かな差異が互いの明暗を分けた。

俺は初めて自分の中に生まれたこの感覚を何といえばいいのか分からなかった、そしてその顔に浮かんでいたものを見て、ホスト風の男はその感覚を『屈辱』といった。

さらに言えるのは『安いプライド』がまだお前には備わっていないという事、それを見つけたならば、どんな奴とでも戦えるんだと声を大にしていっていた。

その言葉が終わり三度同じ構えでぶつかる、今度こそは勝つ、その思いで挑んだが結果としては相手の勁が単純に勝って吹き飛ばされる。

吹き飛ばされて体が言う事をきかない、俺は必死に体を動かそうとする。

嫌だ……負けるのは…嫌だ、嫌だ……

そんな時不意に声が聞こえた、響くような声が。
……チョー…！！、……チョーさん！！

「大丈夫か、チョーさん！！」
「何だ…風間か」

――――――――　そして俺は夢から覚めた。

「チョーさん、何かうなされてたけど大丈夫か？」
「ああ、大丈夫だ」
「本当か？、ここで事故したら危なかったぜ」
「そうだな…風間、お前もここ好きか？」
「あぁ、屋上は俺の特等席だぜ！！！」
「そうだよな、風が吹いて本当に良い気分にしてくれるんだ」
「俺もこの風になりたいぜ！」
「山の近くになるとな、風が強いけどこれがまた良いんだぜ」
「山か！、行ってくるぜ！！」
「オイ、待て！！」
「何っすか、チョーさん、止めないでくださいよ！！」
「気をつけるんだぞ、あとお土産宜しくな」
「あんたって、悪い先生だな」
「悪いだと？、俺はこの年で少年の心を持っているんだよ、テメェを前にするとそれが特に出る」
「そうなのか、まぁ行って来るぜ！！」
「ちゃんと新クラスのオリエンテーションには、間に合うように帰って来いよー！！！！」

そういって俺は風間翔一を見送った……

第3話　「Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｏｆ　Ｍｏｒｏ&ａｍｐ；Ｔｙｏｕｓｈｉ」

今回で悪夢シリーズ完了。
大和に良いとこ取りされたモロ、しかし語り合って武術を辞める事を留まる。
長枝の悪夢はあれ一択です。

第４話　「新クラスオリエンテーション」（前書き）

ちょっと遅くなりました。
内緒の話は油断しても喋ってはいけない。

第４話　「新クラスオリエンテーション」

月が始まって一週間も経ったころ、新クラスオリエンテーションの為、宇佐美先生の引率で俺達Ｓ組は軽井沢に来ていた、一応Ｆ組は箱根らしい。

「山猿クラスにはあのくらいがお似合いなのじゃ！！」
「はいはい、不死川そんな事言わない」
「何じゃ、ハゲ、本当の事をいったまでじゃ」
「川神一子の悪口聞いて、お前の右後ろが不機嫌になったらどうするんだ？」
「準、今の英雄には聞こえていませんよ」
「あっ、寝てるのか、悪い事したな」
「世界を相手に超多忙なのに、わざわざクラス委員長の任務って言って来てくれたんだもんな……」
「あずみも大丈夫？」
「あぁ、ユキか…気使わなくて大丈夫だ、のんびりしてな」
「お前ら駅弁どうする？」
「私は要りません、準のお弁当が有りますから」
「僕もお父さんの奴があるのだー」
「そうだね、お前らは要らんのか、おじさんはご当地の奴でも貰おうかね」

――――――――　俺達は電車に揺られて軽井沢につく、それにしても避暑地と名高いだけあって涼しい風が吹いているぜ。

「ふはははは！！、我は起床したぞ！！」
「流石です、英雄様！！」
「全くだ、到着とぴったりに起きるなんてそう簡単には出来ないぞ」

「奇怪な者よ、そう言った言葉で褒めるのはよいが、我ほど多忙になると勝手に肉体が反応するのだ、一つの悩みではあるな！！」
「英雄、ちゃんと休めないと本当に体に毒ですよ」
「我が友トーマよ、案ずるな、事前に交渉を終わらせて昨日は早めの就寝を取っていたのだ」
「自分ではそういっても洒落にならないんですから、普段から気をつけてくださいね」
「フム、分かった、トーマは心配性だな」
「あずみさんもお疲れ様です」
「ミイラに褒められても嬉しくありませんがそのねぎらいに感謝します」
「ミイラで浸透してるんですか？」
「あずみ、我はトーマたちと先に部屋へと向かう、気にせずのんびりと来るが良い、良い風が吹いているのでな」
「はい、英雄様！！」
「本当に元気だな、あの日から変わってない」
「変わってない？、あとな…浸透するもなにもそれ以外呼ぶ気ねーんだよ」
「あっ…口が滑ったかな」
「やっぱりテメェ怪しくないか？」
「怪しくないですよ、全然怪しくないですよ」
「ならよ…質問だ。今この状況で嫌いな虫は何だ、この状況で言ってみな」
「”女王蜂”ですけど……」
「ははは……まちがいなくテメェは黒だな」
「えっ？」
「いまさらとぼけんなよ、あたいの戦場での異名を知ってるなんてどう考えても黒だ」
「なんか嫌な予感が……」
「包帯剥いで素顔を見せてもらうぜ！！」

「しかし残念、その前に逃げる」
「待ちな！！」
「待ちません、逃げ切るまでは」
「英雄様の部屋に逃げ込んで安全を手に入れようってか、甘いぜ！！」
「そぉい！！！」
「テメェ……自分から包帯を」
「少しでも足止めする、テイクダウン狙いだ！！！」
「くっ！？」

包帯を足に絡みつかせて転ばせようとする、当然逃げるためにバック走をしながらやっているため精密さは低い。

「しかしあたいはこの程度でって、ここは……、チッ！！」
「とりあえずは時間稼ぎだな」
「おいおい、もう風呂に入るのかよ」
「先生は？」
「体重計ってんだよ、服の重さ抜きでな」
「わざわざこんな事しなくても」
「俺達の仕事は体が資本だからな、お前もちゃんと健康管理しとけよ」
「はい、分かりました」
「じゃあな、良い湯だと思うが長湯はすんなよ」
「さて……ここから脱出するか」

そう言って入浴を装い露天風呂の場所から出て行き外からの侵入を試みる。

「流石に窓をよじ登って伝えば問題あるまい」
「しかし残念、読んでいるぜ、ガキ」

「しかしこちらも片手で登っていました、片手に砂を握りこんでいたんです、すいません」
「ぐっ！？、このガキがぁ！！！、あたいを舐めてんじゃあねぇぞ！！」
「まだまだいけるか？」
「くそっ、即座に降りて獣道からの合流地点狙いか、流石のあたいも複雑な道で逃げ回られたら面倒だもんな、仕方ねェぜ、逃げ足は一級品ってことで今回は見逃してやるか」
「どうにか逃げ切れたか、いやはや危なかったぜ」
「お前、なんか老けたか？」
「黙れ、老けたわけじゃない、ちょっとエキサイティングしただけさ」
「そうか、で俺達は露天風呂入るんだけどどうするよ？」
「最後に部屋の風呂に入るから良いよ、行って来い、見張っておくから」
「分かった、じゃあな、また九鬼の奴寝てるから起こすなよ」
「本当に疲れてんだな、見とくよ、十分さ」
「任せたぞ」

そう言ってトーマと準が風呂に入って行った、俺も入るか……

「んっ、我は寝ていたか、トーマたちは……風呂か」
「……全くばれ……たらヤ……バイ」
「ん、あの奇怪な奴はここの風呂か」
「英雄と……トーマな……ら財閥っ……て言うの……と病院って間……柄、ＤＮＡ……鑑……定とかでばれ……るからあま……り良くな……いんだよな……何で同じ班に入ったんだろうか」
「ばれる、一体何の話だ？」
「あ……の飛行……機事……故で皮膚が……やられ……ているから……、外見……での信憑……性はないけ……どＤＮ……Ａは嘘を付

……かない」
「飛行機事故で皮膚……まさか！？」
「俺が……逢間……香耶とば……れたらなぜ……隠して……いたの……かと、あいつらに突かれ……るだけだ」
「キョーヤ、やはりお前だったのか……」
「良いお風呂でした、あれ？、英雄起きていたんですか？」
「トーマよ、お前の病院でキョーヤの採血を行ったことはあるか？」
「えぇ、一度だけですが取りました」
「我はあの奇怪な奴の独白を聞いてしまい、毛髪を取るか皮膚の採取をするのを考えた」
「どういうことなのですか？」
「奴は逢間香耶かもしれん、今風呂でそのような言葉が多く聞こえた」
「でも、飛行機事故では生存者がいないって聞いていたぞ！！」
「その通りだ、ハゲよ」
「確かに嘘かもしれないと断言するのは良い、しかし信じてみるのも良いかもしれませんね」
「そこであずみに頼んで夜な夜な忍び込んでもらい、皮膚か毛髪を採取して鑑定をする」
「結果が出るのは、どれ程の日程が必要ですか、英雄？」
「5日掛かれば良い方だな」
「ならば、私はあずみさんを呼んで来ましょうか」
「頼むぞ、トーマよ、我は一刻も早く知りたい」

そしてトーマは忍足あずみを呼ぶ、英雄は毛髪や皮膚の採取を任務として命じているのだ。

「英雄様、毛髪ならば先ほど走っていた際に落としておりますので、これをお使いになってくださいませ」
「スマンがあずみよ、今すぐこれをＤＮＡ鑑定にかけてくれ、そし

て九鬼財閥の医療部門から葵紋病院へ派遣させて、逢間香耶の採血からのＤＮＡと照合するのだ」
「これでキョーヤ自身ならば……英雄」
「ああ、問いただしてくれるわ！！」
「あの日彼とユキに出会えたから今の私があるのですから…葵門病院が今でも名高く有れるのは、その後の父親である長枝先生の働きも大きいものでしたが」
「我も奴のおかげで肩に傷がつかず、夢を諦めずにすんだ、当然今でこそこうだがそんな簡単に夢を諦めたわけではない、我は心のどこかで思ったのだ、父を三位一体であろうと超えたい、尊敬するものを超えたいとな」
「私達は二人とも借りが彼に多少とはいえあります」
「若が生き生きするようになったのがでかかったな、本当に」
「しかしユキは知っていたのでしょうか、自分の兄ですよ？」
「大方キョーヤの奴が口止めさせていたのであろうよ」
「とりあえずはこのオリエンテーションが終わったら、若」
「えぇ…準、尾行をお願いします」

――――――――――――　オリエンテーションの夜は騒がしくなく、静かに互いの話をしていくだけだった。

まどろむ夢の中、英雄と冬馬はかつて自分が危険を感じた時の夢、自分の絶望した時の夢を見た。

――――――――――――　九鬼英雄

我は某国へと滞在していた、野球が好きな我はこのような所へいるのはいささか気が気でない。
何か楽しめるものはないかと探索していた所、武術の世界大会が行われていた。

「我は野球がしたいのだがな、パーティーなどどうでも良いわ」
「すまないけどそこをどいてくれないか？」
「むっ、庶民が我の前を横切るだと！？」
「悪いが試合があるんだ、１分ぐらい待ってくれ」
「ふん、準優勝の奴が相手で勝てるわけが……」

試合会場に我の前を横切った庶民がいる、負けるだろうとたかをくくって見ていた、しかし目の前に飛び込んだのは……

「恐ろしいほどに強い！！、若き世界王者の目の前に世界屈指の戦士達が敗れ去っていくー！！、対抗馬と見られていた、カラカル兄弟も一撃粉砕だー！！」
「なっ……一撃か、今の試合時間はどれ程だ」
「おおよそ、８秒」
「お前は何者だ？」
「あの人の息子だよ……と言っても里子だけどな」
「僕もなのだー！！」
「成る程な……事情は分かった」
「俺も次の試合に出るんだぜ、大人達に混じってよ！！」
「よいしょっと、日本の警察の監視が国の駐在より少ない、国際トーナメントでよかったぜ」
「香耶、頑張ってねー！！」
「おう！！」
「準決勝、第２試合始め！！」

……結論で言うならば香耶という我と同じ年の男は大人を一撃を静めていた。

「弱いんだけど……」

「全くだ、こんなレベルだけがうろついている表舞台、この程度じゃあ退屈するぜ」
「お前たちは何者なのだ？」
「俺は世界王者だ、無敗のな」
「俺は力試しで出てたんだ、そういうあんたは何者だ？」
「我か、我の名は九鬼英雄！！、九鬼財閥と言えばわかるか？」
「九鬼財閥と言えば…あの九鬼財閥か？」
「その通りだ」
「で、そこの子供がわざわざこのような場所に？」
「パーティーでな、面白くはないが我は此処にいないといけないのだ」
「そうか……そろそろ決勝戦だな」
「親子対決だな、香耶」
「二人とも頑張れー！！」
「お前は出ないのか、女よ」
「僕は二人とは違う格闘技習っているから良いんだー」
「お互い本気でアレか？」
「ううん、ぜーんぜん。その気になった所なんて見た事なーい」
「そうか、どれ程のものなのだろうか？」

結論として言うならば香耶の一撃は弾かれるように無効化されたり逸らされていた。
一撃だけまともに喰らっていたが父親の方は平然と立っていた。
そして……反撃の一撃は互いが背中をぶつけて試合場にヒビが入った。
飛んでいったのは香耶のほうで、香耶はその一撃で動けず試合は父親の勝利で終わる。

「やっぱり強いな…」
「飛ばす程度の威力で留めただろ」

「本気出してないじゃあないか」
「すまないな、こんな衆人環視の前の本気ほどみっともないものもない」
「とはいえどあの程度は受け流せないとな」
「そうだな、まだまだ修行不足だぞ」
「ムー、父さんは香耶の倍は修行してるのに生意気だー！！、エイ！！！」
「脛は痛いって！、やめてくれよ！！」
「それにしてもすさまじい一撃だった、出来れば名前を聞かせて欲しい」
「そういえば言ってなかったな、俺の名前は逢間長枝、格闘家だ」
「覚えておく」
「僕の名前はね、逢間小雪って言うんだー」
「成る程な、我は巨大ビルに戻らねばならん、さらばだ」
「悪いが滞在していたからな、荷物の整理とチェックアウトをする」
「そういうものなのだー！！」

我と同じホテルへの滞在…王者であるが故の提供であろう。
我は香耶や小雪とエレベーターへと乗る、しかし次の瞬間…

「嫌な臭いがする、予感も……」
「何？」
「父さん、それって？」
「勘ではあるが……」
「降りるぞ、我と同じ階だったとはな、姉上が出迎えてくださったか！！」
「出かけていたのだな、英雄よ！！」
「危ない！！、香耶、お前は九鬼英雄を！！」
「なっ、飛行機が突っ込んでくる！？」
「ユキ、父さんの後ろに居ろ！！」

「うん！！」

飛行機が突っ込み巨大ビルが爆発を起こす、この爆発の大きさたるや人の命など軽く消し飛ばすであろう、しかし我と姉上はそうならなかったのだ。

「ゼーハー…ゼーハー…」
「全力でやったのは鍛錬以外じゃ久々だぜ」
「ハッケイー」
「我は生きているのか……」
「一応、俺がやってもいけるんだな…」
「香耶、盾になって大丈夫か！？」
「あぁ、今ユキが言っていた技で爆発を押し返したのさ」
「俺も同じくな……ビルの床が陥没してら、大丈夫かい？」
「あっ……ああ、我には何も問題はない」
「ユキは？」
「大丈夫なのだー」
「とりあえずはテロだな、これ」
「我が思うに自爆テロだな」
「警察が来る前に帰るか、面倒だし」
「そうだね、マシュマロがないから嫌だし、トーマや準にも逢いたいなー」
「感謝するぞ、逢間香耶、逢間長枝！！」
「我と英雄の命を救ったこと大儀であった、何か困ったことがあったら頼れ！！」
「凄いなんか感謝されてる……」
「俺たちはそういうことで助けたんじゃないから、気にしないでくれ、また縁があったら逢おう！！」
「うむ、ではな！！」
「ふはははは、まるで嵐のように現れ、去って行くか！！」

「その前にー、貴方のーお名前、なぁーにー？」
「うむ、我が名は九鬼揚羽だ、胸にこの名前刻み込んでおくと良い」

――――――――――――――――――――　これが我と逢間香耶の出会い。
一応我はこのあとも夢を続けていたが、姉上が軍需鉄鋼部門統括となった事をきっかけに、我が商業をして妹の紋白が政治をすることで、父上を超えることが夢へと成り代わった。

――――――――――――――――――――　葵冬馬

大病院の一人息子として自分は育ってきた。
我ながら聡明だと感じている時もあった、成績はさすが先生のご子息だと皆が言う、それほどまでにずば抜けていた。
私の夢は父と同じ立派な医者になる事であった。
その為に勉強をしてきた、その内人の醜さを感じてしまったが父は違う。
詰め込み教育だと言われるような事があったのだが、それでも父のようになりたいと思えば決して苦にはならなかった。

しかしそのような思いは瓦解した。

６年生のある日、今までもときおり父の不審な行動を見て気にはなっていたが、それにその時強烈な好奇心を持った自分は探ってしまう。
知ってはいけない事もあるのだとその時は思わず……正に『好奇心は猫をも殺す』だった。
その時関係上親しかった準、親友であるがゆえに自分を止めようとしていた英雄や、４年生の時から患者としてきていたユキやキョーヤの言葉を聞いていれば知らなくて済んだ。

「これは……！？」

置いてあるファイルの中身を見て驚く、そこにはびっしりと言う言葉では言い表せれないほどに不正の証拠があった。

「おお！、冬馬！、早くもそのファイルを見つけられたか！、偉いぞ！！」

「えっ？」

「知識を実戦で活用できている証拠だ、素晴らしい」

「お父さん……貴方は…」

「そう、お前の思ったとおりだよ、冬馬」

「嘘でしょう……お父さん」

「何が表で何が裏か…世の中面白いだろ、冬馬」

「これは悪事ではないですか！、立場を利用して行政の癒着、医薬品の横流し、それ以外にも数えられないほどある！！！」

「そんな事を言うな、冬馬、お前なら私が築き上げたこの病院の表も裏も全てを安心して任せられる」

「随分ご機嫌だな、おじさん」

「なっ、キョーヤ！？」

「此処に来たのは友達か、君にも教えておいてやる、大人の世界をな！！」

「お父さん……私は裏なんて嫌です」

「はっはっは、大丈夫さ、冬馬、おまえなら出来る」

「そんな根拠がどこにあるって言うんだ！！」

「それはな……なんたって私の血を引いているもんな、冬馬！！！」

「同じ血、私もお父さんと……同じ…」

「そんな言葉に耳を貸すんじゃない、冬馬！！」

「邪魔をするものじゃあないよ、そうだ、冬馬、所詮鷹の子は鷹だ、変わらないんだよ」

「私はただお父さんのように尊敬される人間になりたかったのに…

…」
「トーマ……」
「そう、なれば良い、ただし上っ面だけだ、これがまた楽しいぞ、なんせ尊敬されつつ好きな事出来ちゃうわけで」
「何言ってんだよ…トーマは嫌だって言ってるじゃないか！！」
「こんなに才能があふれて嬉しいよ、井上副院長の息子もお前につけよう」
「そんな、準までお父さんと同じ道に引き込む気ですか！？」
「小さなものから少しずつ、悪い事をして行こうじゃないか」
「コイツ……」
「捕まらない為にもっと利発にならなきゃな、できれば全国模試で1位近くではないとな、冬馬」
「……お父さん僕はそんな事の為に勉強したくないです！」
「駄目だっ、どんどん勉強するんだ、それこそ飽きるほどにどんどんどんどん勉強するんだ！！！」
「何でそこまで僕をその道に引き込むんですか、キョーヤが言う様に私は悪事の為に医療従事者になりたい訳じゃあないんです！！」
「何でか……そんな事は簡単だ、冬馬は私の子だろ」
「だから何だって言うんだよ？」
「連帯責任だ、一蓮托生だよ」
「ふざけんなぁ！！！」

遂にキョーヤがお父さんへと攻撃した、話では八極拳士だと言うのに拳を顔へ叩き込む、実に原始的なものであった。

「ぐっ！？、何で私と冬馬の問題で君が出る！！」
「何でか……そんな事は簡単だ、冬馬は俺の友達だからさ」
「実にその通りだ、キョーヤよ、よく言った！！！」
「英雄まで……来てくれたのですか？」
「まだおるわ、ユキと準がな」

「やほー」
「悪いが若の父親に恩が有ろうとそれとこれとは別ですよ」
「言ってやるよ、子供はな、親の操り人形じゃあないんだ」
「その通り、自分で立って動いて決断する、そいつが通りたい道を立て札立てて邪魔するのはよくないぜ」
「長枝さん、遅かったな」
「お前らが俺がユキの薬もらっている間にどこかへ行ったからだろ、こう見えて俺は方向音痴だからな、そのせいで遅くなったんだ、案内できる奴ぐらい用意しとけ」
「それでか、ビックリした」
「ココから大人の交渉がある、ちょいと下がっていろ」
「はい、分かりました、チョーシさん」
「下がろうぜ、トーマ」
「はい、キョーヤ」

そして私の父親とキョーヤの父親が向かい合う、小声での交渉のようだ

「お前さんは悪い事をした自覚はあるのか」※小声で言っています
「だから何だというんだね、親が出て来て良いのか!!」※小声で言っています
「あんただってトーマ君の夢の話に、わざわざ首を突っ込んだじゃあないか……俺にとやかく言えるのか?葵院長」※小声で言っています
「残念だが脅しても私には多くの後ろ盾があるんだ、力ずくでもしらを切りとおせる、交渉で私を篭絡させようとしても無理だぞ」※小声で言っています
「暴力に訴えかけるまでですね……権力やその道のスペシャリストに力借りますか」※小声で言っています
「残念だがそんじょそこらのチンピラでどうこうできないぞ」※小

声で言っています
「暗殺者集団に頼みますよ、そこの師範とは顔見知りでね」※小声で言っています
「なにっ！？」※小声で言っています
「それに情けないお話だが九鬼揚羽から困ったことが有れば、頼っても良いと言われている」※小声で言っています
「くっ……」※小声で言っています

「それら踏まえたうえで悪いが、これを持って警察に行けば良いが、クリーンな人間になるのと、秘密裏に行方不明になんのとどっちが良いよ？」
「ぐっ……ここまでか」
「悪い事していたから云々じゃあなく、子供に自由な決断をさせてやらなかったのが何よりいけないことだな」

それでお父さんはクリーンな人間となる道を選ぶ、監視の目付役として長枝さんが抜擢されてしまう。

それから時は流れキョーヤは中学1年生になる際、軍で実戦経験を積みさらに強くなる為、その筋では最高峰と呼ばれるドイツへと旅立った、少年兵士としては逸材でしょうね……帰ってくるのを楽しみにしています。

――――――――――――――――――――――――　ちなみに長枝さんは職場の皆さんに言ってませんがキョーヤとユキ、準と私だけが知っているんです。

6年無敗のまま駆けていった格闘界を引退した後の就職先は……

「今日から新しく九鬼家従者部隊所属になります、逢間長枝です」
「そうか、我の名は九鬼帝、おぬしは揚羽でも英雄でもない者へと

付いて貰う」
「ハッ、所属初日からお仕えの任務を頂けるとは、有難うございます」
「どうやら英雄が礼儀を教えたか、まぁ、おぬしは子供を育てているらしいな」
「はい、２人の子を養う身でございます」
「つまり年が小さい子供でも問題はないな？」
「はい、問題はございません」
「おぬしには英雄と揚羽の妹、『九鬼紋白』について貰う」
九鬼財閥なのでした。

第４話　「新クラスオリエンテーション」（後書き）

リュウゼツランルートのフラグは終了。
元々長枝の就職先は決めていました。

第5話　「友情とは？」（前書き）

エアマスターのキャラが出てきます。

第5話　「友情とは？」

新クラスオリエンテーションが終わった次の日曜日、学校が休みだった為に俺は月雄荘へと居た。
父さんが心遣いをしてくれてばれないように１０５号室を皮膚が治るまで借りている。ちなみに家賃の方は自費で出している、宇佐美代行センターで貰ったバイト代がここへ使われている。
まぁ、＋収入だから貯蓄しているけれども、父さんは今までのファイトマネーが山ほどあるのに使わないからな……何がしたいんだろう。

「今日は診察の日だな、夜まで暇だな」

今日は病院で治療経過を見てもらう、もう少しで当初のめどであった1年と少しが経つので期待はして良いだろう。

「で……オジサンの所にわざわざ仕事貰いに来たわけ？、お前も暇だね」
「だって学校がなくて仕事の連絡がないって暇ですよ、鍛錬なんざ朝に終わりましたし」
「じゃあこのごろ話題になっている路地裏の通り見てきてくれよ」
「話題の路地裏？」
「なんでもな、『青空闘技場』に続くまでの路地の床がやばいのよ、これが」
「あそこの床が……大方いさかいかなんかじゃあないんですか？」
ちなみに『青空闘技場』と言うのは賭博でのストリートファイトが出来る施設である、俺も１１の時にタッちゃんにここであった、観戦者と試合している奴の図でだが。

俺は1年無敗を貫いたまま消えた、なぜならそんなに強い奴が居なかった、強いとか言う触れ込みの奴は一撃で倒せたからだ。

「そうだと思うんだがこの一ヶ月の間に起こったことだからな、調査の方頼むわ」

「分かりました」

「後は……清掃活動の代行の事を忠勝に伝えといてくれ」

「行って来ます、どこに居ますか？」

「今ここのパトロールだからすれ違うだろ、もしかしたら喧嘩商売の代行してるかもしれんしな」

そしてその路地裏へと行き床を見る……するとそこはまるで蜘蛛の巣状に広がっていたクレーターがいくつも有ったのだ。

自分が震脚をしてもここまではならない、他人を踏みつけたにして歯の跡や血がないところを見るとこれは踏み込んで放った一撃だ。

しかもこれだけ多い数を見ると、その人が不良に絡まれていたので技を使ったというのが正しいだろう。

「でも『仮に』八極拳士だとして……だ、その人はどんな『踏み込み』をしてどれだけの『気』で放ちそしてどれほどの『腕前』なんだ」

そうなのだ、ただの八極拳士の一撃でこんなにも床が陥没はしない、クレーターを作る事が可能なほどとなると……そいつは間違いなく『最強』の部類である。

「おいおい、なんだよあの人はでか過ぎるんじゃあないのか？」

そしてタッちゃんを探しに来て青空闘技場へ来て最初に目に入った

のは試合だった。
青空闘技場での試合場に居たのは、異様に大きな人と黒い服を着ていた人がタッグを組み、そして相手の女性が3人という変則マッチのようだ。

「天、あんたが行きな」
「おっしゃー、暴れてくんぜ！！」
「ｚｚｚ」

「行くぜ！！！！」

黒い服を着た男の人の拳を、小柄な女の子がゴルフクラブを使っていなして蹴る、
しかし男の人はそれを避けずに再び拳を振る。

「ヒャッハー、避けなきゃあサンドバッグ、だぜぇ！！」

その言葉通りゴルフクラブで叩かれて、蹴られて流血し始める、しかし男の人は平然と立っていた。

「効かねぇな……」
「あぁ！？、何言ってんだ、コラァ！！」
「攻撃に芯がねぇ！！！！、心がねぇ！！！！」
「あぁん！！？」
「攻撃ってこうやるもんだ！！！！！」
「なっ！？」

打ち下ろしの拳が命中する、ゴルフクラブでいなす間もなく、今までより明らかに速い拳が飛んでいた。

「がっ……」

女の子はそのままうつぶせになる、気絶しているようだが、この人ってどういう人なんだ？

「天がやられちゃったか…仕方ない、私が行くか」

「きな、まだまだやれるぜ！！！！！」

「暑苦しいねぇ、根性の塊みたいな奴だよ、あんた」

「当然だ、『喧嘩は根性』なんだよ！！！！！」

「じゃあ、やってやろうかね、痛い目見させてやるよ」

棒での突きが来るがどうやら無駄な一撃のようだ、鍛えられた筋肉の鎧がその突きを無効化する。

「なんだい、天の蹴りとゴルフクラブは喰らっていたのに、私のは効かないって言うのかい？」

「違うな、こっちにもエンジンが掛かってきただけだ」

「そうかい、でも鍛えていない場所なら問題ないね！！」

喉を突きにいく、その突きは命中したが……やはりこの人もまた、根性だけで見たら父さんをはるかに凌駕している。

「効か……ね…ぇ」

「ぐっ！？、離しな！！」

「らぁあああああああ！！！！！！！」

ナンセンスといえばそれまでだが棒を掴んだまま頭突きを見舞う、さらにもう一発頭突きを見舞いアッパーを打ち込んで吹き飛ばした。

「仕方ないねぇ……タツ…あんた」

「なんか変だな？」
「『本気出して良いよ』」
「Ｚｚｚ……うぅううううう…」
「板垣三姉妹、舐めんじゃあないよ…」
「うがあああああああああ！！！！」
「なっ！？」

男の人に拳を放ち吹き飛ばす、さっきの戦いで元から流血をしたりしていたのだがこの一撃のダメージは深刻だと俺の目には見えた。

「ぐっ…」
「うああああああああ！！！！」

拳の雨を降らして一気に片をつけようとしていた、男の人は防御をせずある一定の距離を取る、そして……

「おおおおおおおおおおお！！！！！」
「うわあああああああああああ！！！！」

クロスカウンターで打ち込む、どう考えてもここまでくれば我慢比べである。
根性があるが先にダメージは有った、だというのにこんな無鉄砲な戦い方というか熱い戦い方をするのはなぜなんだろう？

「く……もう立てないか」
「うああああああああああ！！！！」
「やはり俺は強い女にばかり出会うな……」

ダメージを先に貰っていたのが響き、女の人が立てなくなった所を体当たりで吹き飛ばした。

「次はお前だぁあああああああああ！！！！！」
「何やってんだよ、お前」
「ぐあああああ！！！！！？」

大きな人が掴んでほおり投げる、着地をするがどうやら予想外だったようだ。

「何やってんだよ、テメェ……」
「あああああ！！！！！」
「ボロボロになるまで磔の刑にしてやる！！！！！！！」

大きな人と女の人の戦いが始まった、しかしこの戦いは引き分けで終わったのである。
タッちゃんを観戦席で見つけて代行業を言って、俺は当初の用が終わったので帰るがその間に両方がノックダウンしていたのだ、まぁ女の人は寝ていただけだけど。

「で……どんな奴が居たか分かったわけ？」
「多分相撲か八極拳士とかのように踏み込んだりする動作を、非常に大切とする武術の方が喧嘩したようですね」
「踏み込み一つで蜘蛛の巣のクレーターってなぁ……治安が心配だよ」
「もう夕方来てるので、ちょっと今日の方はこれで……」
「夜中に電話する場合があるから頼んだぞ」

そう言って俺は宇佐美代行センターをでて、川神駅から少し離れたアングラ気味な病院に向かっていった。

「静菜さん、いますか？」

「居るわ、入って来て」
「経過として見てもらうって言うのであって、決してシズナマンにはなりませんよ、そっちには行きませんよ」
「冗談よ、それはそうと貴方の妹さん凄いのね」
「まぁ、自慢の妹ですよ」
「まさかサンパギータ・カイと一回組むなんてね」
「トミさんがユキとのスパーで鞭打ちになったからなんですけどね、直下型ブレーンバスター喰らって」
「リングネームが『白銀夜叉』ってカッコいいじゃあないの」
「1回戦と2回戦は一人で二人を倒した事で怒られてましたけどね」
「準決勝と決勝はWで、アクセルスカイツイスタープレスとか決めて良い試合だったわ」
「ど派手な勝ち方はルチャ・リブレにとってもいいものですからね」
「貴方の皮膚が治ったら兄弟で組めるんでしょうけど」
「どの世界で八極拳士とルチャドーラが組むんですか」
「K－1か何かでテコンドーと八極拳で組めば良いじゃあない」
「あぁ…そっちの方ですか」
「蹴りの威力が凄いものね、驚いたわ」
「父さんが友人とユキに蹴りが凄い奴を紹介してやる、とか言って結構組み手とかさせてましたよ」
「名前は？」
「坂本ジュリエッタって人です」
「貴方の父親、とんでもない人にコーチさせたわね」
「えっ？」
「嘗てこの町を騒がせたストリートファイトのランキングって言うのが有ってね……」
「それで？」
「坂本ジュリエッタは『形式上』7位だったわ、実力は3位と同格だったけどね」
「形式上ですか？」

「上位に挑戦してないからよ、ただそれだけ」
「本当に強い人に教わってたんだ」
「さて、話している間に診察は終わりよ」
「経過の程はどうなんですか？」
「４月の下旬か５月の頭かしらね、完全復活できるわ、保証してあげる」
「有難うございます」
「あと……これは風の噂なんだけどね」
「はい」
「九鬼財閥が偉人をこの世にクローンとして、転生させる『武士道プラン』って言うのがあるらしいの」
「それで何が言いたいんですか？」
「思えば思うほどぞっとする事があるのよ、この計画は父親である長枝にも言っておいてあげて」
「分かりました」
「じゃあね、もう来る必要はないわ、今度来る時はシズナマンを希望してからよ！！」

そして久坂医院を出て行き駅へと向かう、すると思わぬ人が前に居た。

「あずみさんに九鬼、葵に井上じゃあないか、どうしてここに？」
「他人行儀は通じませんよ、ミイラさん……いえ、キョーヤ」
「悪いがこの何日間、尾行して居たんだ、若に頼まれてな」
「悪いですが完全に裏は取れています☆」
「何が言いたい……」
「ＤＮＡ鑑定による照合の結果、お前が香耶であるという可能性は９９％を凌駕している！！」
「これでしらを切りとおせるなんて思ってませんよね」
「怖い顔をするな、全く……英雄、お前あの時起きてたんだろ」

「認めるか、香耶であると！！」
「正解のようだな、完全に目で分かるぜ、開き直って居やがる」
「その通りですね、英雄様、香耶さんに事情を話してもらいましょう」
「キョーヤ、ここで立ち話もなんです、公園で話しましょう」
「分かったから、トーマ、その怖い顔をやめろ」

そう言って公園のベンチに座って話をする。

「若、コーヒーだ、キョーヤもな」
「ハゲ、我にはないのか？」
「メイドさんが入れてくれてるじゃん……」
「はい、英雄様！！、ダージリンでございます！！」
「さて……話してもらいますよ」
「昔の話だ、アレは去年のこと……俺はドイツから帰国をしていた」
「軍隊から帰ってきていたんですね、それで？」
「その帰国の飛行機が墜落をした、それも北陸地方でな」
「何！？」
「その際の爆発と爆風によって皮膚は爛れてボロボロとなった、正直死ぬかもしれないと思ったよ」
「英雄、その飛行機は……」
「あぁ……当時、我は九鬼財閥の飛行機の墜落だけで激震が走ったが、まさかキョーヤが搭乗していた奴とはな」
「それでも死にたくないから這いずってまで生きようとした」
「マジかよ……良く動けたな」
「その時に俺を見つけて介抱してくれたのが今、川神学園にいる、黛由紀江だ」
「ほう……そのような間柄だったのか」
「大儀であるな、後日、我が直々に褒めてつかわそう！！」
「しかしなぜ師岡卓也や風間翔一、川神一子といった旧知の仲へ接

触を試みなかったのですか？」
「モロは言っておけば喋らず口は堅いが態度でばれる、キャップは勘が鋭いから調べられる、一子の場合はにおいでばれるから近寄らなかった」
「まぁ……風間の行動力を使ったらばれそうだもんな、賢明な判断だぜ」
「で、なんでお前らに言わなかったかというと……」
「何ですか？」
「『迷惑』をかけると思ったからだ、こんな姿で逢うなど言語道断だろう！！」
「キョーヤ……」
「素顔で会うならば良い、しかし証拠も無いまま会って何になる、お前らが全員奇異な目で見られることを思ったら、俺はお前らの目の前に現れる事が出来なかった」
「顔を向けよ、キョーヤ」
「えっ……」

その言葉の次に飛んできたのは鉄拳であった。
顔にめり込み飛ばされていった。

「迷惑だと……それがなんだと言うのだ！！」
「英雄……」
「迷惑をかけても良いのだ、もっと我やトーマや準を頼っても良いのだ！！、そういう時に迷惑をかけても良い存在こそが『友』ではないのか！！！」
「全くですよ、キョーヤ」
「冬馬……」
「貴方からしたら簡単な事でもそれで救われた人も居るのです、私は貴方があの時お父さんを攻撃してまで訴えてくれたから今の私があるんです、英雄にしてもそうです、聞きましたよ」

「あの時我を巨大ビルの爆破から救った事もお前からすればたいしたことではないが、それでも命が今有ることがすばらしい！！」
「これだけ救っておいて自分は迷惑をかけているなんてのは無しですよ、キョーヤ」
「ごめんなさい……」
「謝っておるから許してやろう、それが完全に治ったら次こそ我やトーマを頼れ、全員の奇異の目を変えてくれる！！」

その言葉でこの夜は終わる、友情は取引とか感情なんかじゃあないと英雄とトーマに教えられた夜なのだった。

第5話　「友情とは？」（後書き）

今回で色々なキャラが出せました、決して弱く書いているのではなく登場から華々しくしすぎるのもどうかと思ってこのような感じにしました。

第6話　「プラン進行中」（前書き）

武士道プランのキャラクター登場。

第6話　「プラン進行中」

久坂医院から帰った次の日の夜、俺は父さんに静菜さんから聞いた事を一言一句違わずに教えた。

「と言う訳なんだ、父さん、信じてくれ……」

「『武士道プラン』か、きっと『星の図書館』が提唱したな」

「そうか、でも思ったより驚かないんだな」

「当然だろ、偉人がどんな姿でもそいつは一個人だろう、たとえどれ程の偉人でもな。そいつはそいつでしかないんだ、生まれ変わりだからといってかつての偉人と、同じ様な歩み方などしなくても良い」

「そういうものか、それにしてもこの『武士道プラン』には全く持って興味無しか？」

「いや、興味はあるさ、そりゃあどんな奴が来るか分からないんだもんな」

「でも全然そんな風には見えないぜ」

「そりゃあな、表向きは喜ぶが本音は生徒が増えて、自分のクラスだったらと思うと

ちょっとは憂鬱になるさ、どうせ優秀ゆえにS組だと思うもん」

「そう言えば父さんは、３－Sの担当だもんな」

「クラスの奴らの選民思想がな……一握りの生徒はそうでもないんだが」

「俺の所もだよ、自分達が優れているからって、他のクラスを貶めるような発言をする奴もいる」

「本当に面倒なんだよね、注意してもプライド高いからさ認めないんだよ、自分の非をな」

「先生ってものも苦労するな…」

「全く、マジでそんなもんだ、お前も今後のために良い職探しとけよ」
「俺はドイツでの傭兵で軍人か、今まで通りバイト先の宇佐美代行センターで良いよ、あそこは良い職場環境だからね」
「そう思うなら止めないよ、ユキはなんだかこのままいったら葵紋病院のナースか、カイの弟子でルチャドーラになりそうだけどな」
「ナースの方はクラスで不思議ちゃんなせいか、性格に難有りみたいに見られているけどトーマの奴が居たら十分だしね」
「ところでお前はユキの性格についてどう思う?、俺は別に問題点は無いから良い子だと思うんだが」
「俺としてはあの事件の日に完全に壊れずに、ヒビ程度で済んだから、状態は全然深刻ではないけど、時々突拍子もない事言う節はあるかな、あと結構いたずら好きだし」
「時々ならば良いだろう、まだ心配事があってな……仮にあいつがS落ちしたとしても何とか世渡りうまく出来るような相手はいるか?」
「いや、悪いけどでモロの奴ぐらいしか無理だな」
「そうか、やはりユキはあいつには特別懐いているか」
「俺がいなくなっても、あいつはちゃんと父さんとの修行でユキに逢いに来てくれてたし、虐めから救ったからね」
「あぁ……俺の元で修行して1年が過ぎたあの日に出来た、あいつの心の虚しさは4年後にどうにか取り払えた」
「わざわざエアメール届けてくれたからな、ユキの奴」
「本当に良かったよ、あいつをあの5年生の時に引き止めておいてさ」
「トーマも準も違う学校だし、あの頃英雄は力を借りようにも勉学で忙しくなったからね」
「モロは頑張った、あいつが自分の力を振り絞り、勇気を出した事で見る景色は変わっただろうよ」
「その事がきっかけでユキがあいつに惚れているという線は、父さ

ん？」
「あるな、十二分に、と言うか前々から優しさに触れて意識はしていたと思うぞ」
「いつか俺はモロを義兄さんと呼ぶ日が来るのか……」
「いや、あいつに追いかけられたら捕まるまで終わらない鬼ごっこをするだろうから、気をつけさせてやれ」
「そんなにヤバイ？」
「最悪、両腕両足圧し折って看病してしまいそうだぞ」
「それ軟禁じゃあないか、近づけさせて大丈夫かな」
「事件になったら『芋虫事件』と命名してやろう」

――――――――　1人の家族の恋愛について話す2人、モロに平穏があるようにと願おう、軽口を長枝は叩いていたけど割とマジで気をつけようと、忠告をしようと香耶は思った。

――――――――――――――――　その頃　同時刻　九鬼家の一室

「どうですか、気分は？」
「別に何の問題も無いのじゃ、ヒューム」
「そうですか、なぜか上の空になっておりましたので」
「我は飛び級ゆえに高校生でも良いが、我が兄上のようになれるかと思うと少しな……」
「やはり、あの男が居ないと紋白様は不安ですか？」
「なっ、何を言うか！！、我は不安なぞ無い！！、長枝がおらんでも何とかして見せるわ！！、フハハハハハ！！！」
「しかし紋白様は川神学園への転入を望んでいるのでしょう？」
「そうだ、与一や義経、弁慶やあやつらの受け入れ先に我が入れば、兄上達とバラバラにならず、護衛が分散せんですむからな！！」
「そうですか、それは良い決断です」
「ヒュームよ、悪いが紅茶を淹れてくれんか？」

「畏まりました。私も紋白様の護衛として入るわけですが、情報によると長枝の奴は紋白様の成長による九鬼家との契約が終わった後、川神学園へ教師として赴任しております」
「なんと!?、それは楽しみだな、また昔のように肩に乗せてもらおう、フハハハハ!!!」
「(やはり長枝に関して紋白様は懐いていらっしゃる、それをおおっぴらに出さぬようになされているが私には分かる、長枝がやめて私が専属になった当初は紅茶の味に不満を示していた程だ)」
「クラウ爺も一緒に付き添って完全な準備をして川神学園に転入しような、ヒューム!!」

そういって九鬼紋白は花が咲いたような笑顔を浮かべていた。

――――――――――――――

その頃　同時刻　九鬼財閥系列のホテル

「どうですか……気分は?、なんだか無表情だったので心配になって…」
「義経殿……有難う、問題ない、どうしても癖のようなものでな」
「お前は組織のものか?」
「与一殿、そんな事は無い、気を楽にしてくれ」
「……はぁ、けだるい」
「そうか、疲れているなら布団をひくが眠るか、弁慶殿?」
「いや、気を遣わなくて良い、ただ単に面倒くさがっているだけだ」
「それはそうと山蘂(さんずい)さんは何の偉人なのだ?」
「俺はただの腕っ節が強いだけの存在だから、偉人ではないぞ、義経殿」
「なんだ……教えられていない葉桜さんとは違って、本当にその様な人なのか」
「もしかしたら貴方たちを守るためかもしれないな、まあ私自身にも目的はあるのだ

が」
「それって何ですか？」
「秘密だ、義経殿、この様に迂闊に喋りたくない言葉には口を閉ざさせていただく、すまないな」
「いや、こちらこそ不躾な質問だった、すまない」
武士道プランは順調に進んでいる、とてつもないものを携えたまま……

――――――――――――――――　その頃　同時刻　九鬼家の英雄の部屋

「あずみよ、状況はどうだ」
「紋白様の手続きの用意は出来ております、ヒュームさんもですが」
「長枝も紋が入ると知れば驚くであろう！！」
「優しき従者であり嘗てヒューム・ヘルシングに勝った、幻の九鬼家従者部隊最強の戦士」
「といった所で若いものの育成のため、戦う機会が無かったヒュームとキョーヤの倍の努力を重ねた、長枝ならやはり努力を積み重ねている長枝に分があったであろうよ」
「攻撃は１０回以上の交錯を経て、僅かにでは有りましたが、少しずつヒュームさんは押し返されていき、最終的には心臓へ一撃を叩き込まれて気絶をした」
「全力を尽くした結果、ヒュームさんを打ち倒して九鬼家従者部隊序列１位でありながら最強の戦士となった」
「あの戦いが終わった後に契約が切れたのは分かるが、あの時は紋を必死になだめて消えていった」
「そのあとに『九鬼の至宝』と呼ばれるクラウディオさんとヒュームさんが紋白様の護衛兼執事に就いたのですね」
「今だからこそではあるがヒュームとはやはり世代が違っていたの

であろう、全盛期を過ぎたものと、今正に全盛期のものではやはり実力差を埋める事はできなかったのでは無いのか」

少しばかり英雄とあずみは長枝の強さについて語っていた。

第6話　「プラン進行中」（後書き）

山藻さんはフルネームは山藻芽荘（さんずいめしょう）と言います。
ちなみに名前は設定上つけないとやばいので考えて付けました、オリキャラでは有りません。

第7話　「日常」（前書き）

安西先生、誰かとコラボしたいです……

第7話　「日常」

俺は朝にある男から電話が来た為喫茶店にいた

「電話をくれたのはありがたいんだが……どんな用件だ？」
「教師と言う道を歩んだ格闘家か、話題性ぐらいはあるだろう」
「何が言いたい？」
「戦いに『満足』していたかな、６年間お前は？」
「ふざけるなよ、ぼかさずに答えろ、どういう用で呼んだんだ」
「全く１１年前と変わらないな、自分のペースをすかされたりすると怒りやすくなる」
「お前な……そういうお前こそ１１年前から変わらんよ、その人を食ったような態度はな」
「逢間長枝…川神学園を辞めて再びストリートファイターになって見ないか？」
「深道……悪いが断る」
「くくっ、冗談だ」
「そうか、本気だったら力ずくでお前から逃れようとしていた」
「やめてくれよ……修復が店のテーブルとかだけじゃあ済まないからな」
「床とかガラスまで入るからな」
「お前の動向を追っていたが、随分様変わりしているな」
「調べたのか、流石と言わざるを得ない」
「紅茶を飲みながら話そう、ここは俺が認める５つ星の味を持っている」
「分かった」

紅茶をオーダーして２人は話し合う、あの深道バトルロイヤルからの１１年を。

「相も変わらずトップアイドルの一線で頑張っているんだな、お前は」
「まぁな、信彦は大道芸人だ、知ってるだろ？」
「全くもってな、七浜とか出張先で時折見ることがあったぜ」
「尾形は尾張忍者の里でつつましくやっている」
「屋敷は家を買っているんだろ？」
「時々この川神の青空闘技場で試合をしているらしいがな」
「あそこに集まるのも大概烏合の衆だろ」
「雁侍の奴は管理栄養士になって中学校勤務で嫁さんを貰ったらしい」
「あいつがね……」
「ちなみに嫁は久賀舘要だ、お前が一撃で倒した奴だな」
「あいつね……祝い物でも送ればよかったかな」
「月雄やサンパギータ・カイはアパート住まいで土方とプロレスラーだもんな」
「俺が一番変みたいになるな……最後に言われたら」
「いや、どう考えてもお前の経歴が一番変だろう」
「何がだよ、６年格闘家して、３年九鬼財閥で働いて、２年目の教師生活している俺が変か？」
「変だ」
「そんなバッサリ切るなよ……」
「どんな方法で世界の九鬼財閥の従者部隊に配属できたんだ？」
「某国の試合で九鬼家のご子息と知り合っただけだ」
「成る程……それでか」
「それにそれだけが俺の知り合いじゃあない、葵紋病院の院長もだ」
「ハハハ……お前はこの１１年でとんでもない人脈とバックを手に入れたわけか」
「ひけらかす必要も無いから黙秘している……そのせいで言われたい放題だけどな」

「家柄だけで言えば最低だもんな」
「勘当されて里親になって……ろくな大人じゃあないけどな」
「でもそれなりの事はしてきたんだろう？」
「風邪とかひけば看病したり、飯作ったり、普通の親としての行動はしてきたさ」
「お前のイメージに激しくそぐわないな」
「黙れ、気にしているんだ」
「こんな時だから考えているんだがな……」
「何をだ？」
「秘密だ、久しぶりに逢えて良かった」
「ん？」
「また近いうちに逢うだろうな、元気にしとけよ」
「そうかい、じゃあな」

そう言って来た時と深道は同じ様にマイペースで帰って行った。
今日は休みの日で朝起きて、いきなりアイドルから電話って言うのもおかしな話だよ、ホント。

――――――――――　その頃の香耶

「小西さん、行きますよ！！」
「おう！！、来いよ、朝からスパーって言うのも良いものだぜ」

俺は朝から小西さんとスパーをしていた、小西さんは格闘家で父さんと同じ様に無敗街道を何年も走っている。
後進の為に最近なんかスクールか、何かの案を考えてるようだけど…まだそんなに言うほどさ、年いってないんだよな。

ちなみに小西さんのスタイルはサブミッションで打撃はしてこない。
ユキの奴はトリッキータイプ過ぎて掴めないから絞め落とされてた

けどね。

「ハッ！！」

いつもと同じ様に大きく震脚で踏み込んで八極拳の技の一つである『猛虎』を一気に放つ、しかし……

「残念だな、足掬ったぜ」

「くっ！？」

「ほほう、踏みとどまるか、でも！！！」

両足タックルで足を刈って自分の領域（テリトリー）に引きずりこむ気だ、しかし！！

「がぁっ！！！」

後ろへの踏み込みで発勁をして一瞬だが動きを止める、そして前に踏み込み一撃を放つ。

「おぉお！！！」

「チッ、背中は掴めないから、腕貰うか！！」

小西さんは僅かに貼山靠（てんざんこう）を喰らいながら飛び関節で左腕を掴む、そして……

「ギブか、折れるぜ、どうする？」

「ギブで…さすがに腕やられたらちょっと学生として困りますよ」

「久々だぜ、掠ったとはいえガキの攻撃を食らうのはよ」

聞いてきたから良かったけどこれが喧嘩だったら今頃腕は折られて

いただろうな、もしかしたら靭帯断裂があったかもしれん。
って言うかよく平然と突っ込んで腕を掴むな、タイミングミスったら腕に込められている分、無防備に食らって大ダメージだぞ。
父さんが冗談で言ってた『芋虫事件』もこの人なら単純に出来るだろうな。

「あの、結構流してましたか？」
「まぁ、そりゃそうだろ、お前だって火傷で本来の実力はまだ無理だろ？」
「はい、もう一週間ぐらいは最低でも必要なんですよ」
「さっき久々に喰らったって言ってましたけど、久々って事はユキのは食らったんですか？」
「まぁな、あいつの攻撃は出所見えねぇし、こっちの力込めてるタイミングを的確に殺すし、なんか天性の勝負勘があって嫌だな、勝てないってわけじゃないんだが面倒だわ、ありゃ」
「あいつの素質はかなりヤバイらしいですよ」
「そりゃあな、サンポ…いや、サンパギータ・カイの技を真似れるって時点で分かってるぜ」
「それもそうか……」
「腹減ったけど肉あるか？」
「有りません」
「じゃあ梅屋いくか？」
「何でですか？」
「俺が肉を食いたいからだ」
「肉への欲望が凄いですね……」
「美味いからだろ、不味かったら食わねぇよ」
「ついて行った方が良いですね」
「ほらほら、早く行くぞ」

そういわれて俺は梅屋に小西さんと行く事になった。

なんでかって言うと肉皿だけやたらと頼むと言うのを一度見ていて、他の客への迷惑になる事が容易に想像できるからだ。

そして金柳商店街に入って梅屋へ着く、さてと注文に気をつけないとな。

「豚丼の特盛りで汁だく、トロロ付きで」
「牛丼の特盛りで汁なし、半熟卵つきで」
「あと牛皿４個で」
「結構頼みますね……」
「朝だから抑え気味にしたんだよ、減量しなきゃ駄目になるしな」
「それでも４つなんですね、多いですよ」
「いや、お前に２つやるよ」
「えっ？」
「俺の奢りって事で俺が頼んだんだよ」
「そうですか……」

そんな他愛のない事を話していたら来店客が来たって……なんだコイツは！？

耳にピアスのようなものをした無精ひげの男と肩から腕にかけて大きな刺青をしたロングヘアーの兄貴風な男、ツインテールでゴスロリの格好をした女の子と青いロングヘアーで立ったまま寝てる人……って

「お客様、ご注文は？」
「すんませんね、俺は豚丼豚汁セットの大盛りとトロロ１つ……おい、オメェらはどうするんだ？」
「おじさん、隣良いか？」
「ああっ？」

「スマンがそこのお兄さん、俺も隣良いか？」
「何だと？」
「注文は決まったぜー！！」
「私も～、Ｚｚｚ……」
「そうか、頼みな、あんたも座って良いぜ、場所に決まりは無いからよ」
「すまねぇな！！」
「全くお前みたいな奴に隣に座られるとはな…」
「えっ？、俺とあんたは今日が初対面だぜ」
「しらばっくれるな、この頃親不孝通りを徘徊しているだろう、源忠勝のようにな」
「そういうあんたは何者だ？」
「俺の名前は板垣竜兵（いたがきりゅうへい）だ、聞いた事はあるだろう？」
「すまないが無いな、新参者でね」
「ほう、それなのにこの俺の目に留まるとはお前中々だな」
「それにしてもなかなか良いガタイをしているな、あんた」
「お前は……体の方は良いが顔が隠れてるからダメだな、素顔を見たら変わるかもしれん」
「なんか格闘技とかやってるのか？」
「俺はステゴロだ、武術は使わん」
「そうか、注文の品が来たから食うけど良いか？」
「別に構わん、食えば良い」
「じゃあ、言葉に甘えて……」

ガラガラガラ……

「いらっしゃいませー！！」

お客さんか、盛況してんなー、梅屋とか思ってました、でも勝手が違う事もあります。

「よぉ、ミイラさんよ」
「あんたの噂、聞いてんぜェ」
「んっ、アレは……」
「リュウさんじゃん、ここで認めてもらおうぜ、生意気な新参者ぶっ倒しちゃってさ」
「飯食ってんだ、黙っててくれないか？」
「うるせぇんだよ！！！！」

そんな事言って抱えていたバットを俺に向かって振ってきた、飯が危ないからもって避けたら……

「おらぁ！！！！」

爪先の蹴りでこめかみを狙ってきた、たっくよ……飯だって言ってんだろうが！！！！

「がぁ！！！！」
「なっ、片手で受け止めた！？」
「飯っていったよな…俺はよぉ」
「コイツ、雰囲気が変わった！？」
「なぁ、板垣竜兵…」
「なんだ…代わりにやれというならやらんぞ」
「違うよ、この牛丼食ってくれよ」
「別にいいが天達と分けるか、俺一人で食ったら言われるからな」
「頼んだぞ！！」

そういって俺は不良どもを店外へと追い出した。

「で……お前らは俺の飯を邪魔したわけだ」

「あぁ！！？」
「罪は重い！！！」
八極拳の一撃ではなく鉄拳制裁を見舞う、といっても踏み込みの強さは八極拳と同じなのでその重さは伊達じゃない。
「なっ！？」
「山さんが吹っ飛んだ！？？」
「こんな事できるのリュウさんぐらいだぞ……」
「に、逃げないと！！！」
「逃げれると思ってんのかい？」
「いっ、何時の間に！！？」
「オラァ！！！」
『気』を込めた蹴りでアバラを砕きながら蹴り飛ばす、食い物の恨みは恐ろしい、それを骨の髄まで叩き込んでやるよ、雑魚共（チンピラ）。
まぁ……この程度の怒りなんぞＭＡＸではないがね。
「…あぅ、あっ、あっ……」
「ヒィ……」
「お前らあと残り三人か、覚悟は出来たか？、神様にお祈りは？、往来のど真ん中で、汚物を撒き散らす心の準備はＯＫ？　」
「うわぁあああああ！！！」
「後ろ向きに逃げちゃあダメだ、前を向いてバックしなきゃあ」
後頭部を引っつかんで床に叩きつける、そして仰向けにして蹴りを口の中へぶち込む、前歯全部終わったね、お疲れさん。
「クッソー！！」
「やけになるとはただの無謀だぜ、火に飛んで入る虫みてェなもん

だ！！」

飛び掛ってきたのを体をそらして避ける、そして一気にアッパーを放った。

「ハハハッ、ピンポン玉みたいだな」

「……」

吹っ飛んだチンピラは気絶してものは言えなくなっていた。

まぁ５～６Ｍは飛んだからな、アバラは確実にいっただろう、ってチンピラ相手だから普通なんだけどね。

そんな事を思っていたらチンピラを一人取り逃がした、全くもってどうでも良いんだが。

「やるじゃねぇか」

「板垣竜兵…」

板垣竜兵が店から出て俺の闘いを見ていたらしい、満面の笑みで俺に近づく。

「竜兵で良い、お前の強さを認めてやる」

「それはどうも」

「あれはお前の全力じゃあないだろう、あっと驚くものを持っているんじゃあないのか？」

「何を言ってるんだ、アレが全力だよ」

「坊主、竜兵と話をするとはたいした根性してるな」

「あんたは！？」

「川神院元師範代、釈迦堂刑部（しゃかどうぎょうぶ）だ、（俺にはよ、お前さんには悪い

がばれてるぜ、あの喧嘩殺法が本気じゃないって言うのはな）」
「ウチの名前は板垣天使（いたがきえんじぇる）って言うんだ、名前には触れるなよ！！」
「呼びにくいから天ちゃんでＯＫ？」
「天かそれなら問題ないぜ、呼びにくいって珍しいな、大概は笑うぜ」
「長い枝って書いて長枝（ちょうし）って呼ぶ人が、居たりしてる時点で名前には驚かないよ」
「へぇ、でこっちがタツ姉だ」
「板垣辰子（いたがきたつこ）って言うんだ～、宜しくね～」
「とは言ってもあと一人いるでしょう？、青空闘技場で観戦してましたからね」
「へぇ～」
「いつの奴だ？」
「巨人みたいな人がいた試合だけど……」
「あ～、あの勝負は面倒だったぜ、エンジン掛かってたらうちら全員、あの黒服に負けてもおかしくなかったからな」
「そうなんだ……」
「で俺の名前はさっきも言ったが板垣竜兵だ」
「一応俺の名前はおおっぴらに出さないでくれ、逢間香耶って言うんだ、宜しくな」

そう言って竜兵の腕を握る、思ったより良い気分だな、コイツの手を握っていると戦場の時の感覚が蘇る、そうあえて言うならば人間の、理性の皮を剥ぎ取られる気分だ。
そんな事を思っていたせいか思わず力を込めてしまっていたようだ、竜兵の奴も強く握り返す、めちゃくちゃ良い笑顔だ、きっと俺もそんな顔なんだろうよ、まぁ、目は潤んでないだろうけどな。

「くくっ、包帯を巻いてるのは分からんが、もし本気ではないなら、俺と全力で戦え」

「今ここでか？」
「違う、お前の体が完全に治ったときだ」
「治ったらここに電話しろ、まぁ、それいがいの他愛のないことはメールで済ませろよ」
「ウチとタツ姉からも送っておいてやるよ、これで寂しくないだろ」
「俺は今日帰るわ、じゃあな」
「あんたは電番くれないのかい？」
「俺は携帯持ってねぇんだよ、また会おうぜ、坊主」
「はい、また逢えたら良いですね」
「じゃあ、俺も帰るか」
「ウチもタツ姉運んで帰るかな」
「Ｚｚｚ」
「立ったまま寝てる……」
「ハハッ、これが日常茶飯事だからな、驚くもんじゃないぜ」
「そうなんだ、凄いな」
「俺と天で運ばないとてこでも動かないからな」
「手伝おうか？」
「火傷かなんかの奴の力は借りねー、ウチらでやるからよ、またな！！」

そういって板垣天使、もとい天ちゃんと竜兵は辰子さんを運んで帰るのだった。

――――――――――　その頃のユキ

「全く、この子は……」
「試合終了ー！！、『白銀夜叉』これで連勝を2桁にのせました！！！」
「ぶいっ！！！」

サンパギータ・カイとトミ子は呆れていた、タッグは無理だと思ってシングルマッチに出させたら、なんとデビュー戦から無敗でシングルでの、日本タイトルマッチへの挑戦権を手に入れた。

ちなみにユキのスタイルは殆ど形を成してはいない。
テコンドーからルチャ、ルチャから関節技へとシフトする異様なまでに器用な、それでいて惑わせたり死角からの攻撃にも長けたトリッキータイプなのだ。

「ユキは綺麗ですね、そう思いませんか、準？」

観客の中には親友である葵冬馬、井上準がいた。

「若、流石にユキの強さに突っ込んだほうが良くないか？」
「そんな事ありませんよ、ユキには最高のコーチ達が居て、精神的にも肉体的にも最高の環境です」
「そうか、あいつは親から『愛』を受け取ったんだもんな」
「そうです、ユキは長枝さんから沢山の愛をもらっています、不器用でしょうけどね」

そんな談笑をしていたら今度はマスカラ・コントラ・マスカラルールでの挑戦を言われた、当然のようにユキは承諾した、当然勝てるかどうかではなく『楽しそう』だからである。

「マスカラ・コントラ・マスカラとはどういったルールですか、準？」
「マスク剥ぎマッチだな、若」
「それはそれは……ユキは知っていますかね？」
「若、そればっかりは俺にもわからねぇ……」

試合が始まるが準とトーマの心配をよそに空をひらりと舞い、ソバットを叩き込む。
その所要時間は試合が始まって、およそ7秒足らず。
すなわちゴングが鳴ってすぐに距離を詰めて放った電光石火の一撃なのだった。

「おぉお！！！、やっぱり凄いな！！」
「よし、そこでアクセルツイスターニーだ！！」
「ダメダメ、ここは……」

相手をうつ伏せに肩の上に担ぎ、そのままジャンプして相手を頭から落とす技。
……受身を取らせない最高峰の技にユキはさらに昇華させる為、強烈な錐揉み回転を加える。

「スカイデスバレーボムにツイスターだと！！？」
「こうだよーん！！！」

キャンバスに轟音が鳴り響きレフェリーが近寄る、相手は死んでなかったようで手を交差してKO勝ちを告げる。
そして即座にユキの手を持って上に掲げた。

試合時間は19秒、一撃必殺とは違う武術であるため、それらを考慮したら十分に早い時間である。

「幾らなんでもあの複合はないだろう……」
「天才って言葉はあんな奴らの為にあるんだろうな」
「終わっちゃったー、もっとやりたかったのにー」

香耶からユキの強さについては聞いてきたから良かったけど、これ

が何の事前もなく知らされたものだったら、今頃は二人とも驚きの表情を浮かべていただろう。
１９秒で試合が終わるとか、秒殺という事が良く似合う試合内容である。
まぁ……この結果にあきれるのは二人、しかも大人でいたが。

「準、見えてましたか？」
「まぁな、若、ユキの奴はさっきの技の間に体を5回は回していたぜ」
「そうですか、ユキの体の調子を調べる必要がありますね」
「全くだ、あんな技は体に負担がかかってしまうぞ」
「キョーヤと長枝さんは用事ですから、葵紋病院での診察にしましょうか」
「そりゃあな、あんな技をやったんだからできるだけ慎重に診察はさせてもらうぞ、良いよな、若？」
「ええ、それで構いません、ユキ！！」
「あっ、トーマ、準！！！」
「ユキ、良くやったな」
「わーい、もっと褒めて、褒めてー！！！」
「ユキは本当に可愛いですね（頭撫で撫で）」
「あんたら、この子の知り合いか？」
「そうっすよ、何か用っすか？」
「この子の戦い方見ててどう思う？」
「ユキはユキらしく戦えば良いと思いますよ」
「良い答えだな、トミー、無粋な質問だったようだぞ」
「それにしても貴方は綺麗な方だ……」

そう言われてサンパギータ・カイは赤面する。
なんでかって言うとトーマは川神学園の中でもトップクラスの美形の４人組『エレガンテ・クワットロ』に数えられているのだ。

一応メンバーで言うと、風間翔一、源忠勝、唯一の3年生である京極先輩があとの3人だ。
アイドル好きのカイにとっては、それに勝るとも劣らない美形にいきなり『綺麗』と言われたのだ、それで赤面しないと言うのも無理な話だろう。

「大人の女性をからかうものじゃないぞ！！」
「おやおや、準、からぶってしまいました」
「若……流石にあの近さで今の言葉はどうかと思う」
「トーマ、カイさんはアイドル好きなんだよー」
「ユキ、そんなこと言うな」
「ミーハーという奴ですね」
「それはそうとどれだけの人に教わってんだ、ユキ」
「カイさんは世界チャンピオンだよ、準」
「えっ、そうだったの、知らなかった」
「写真とか取らせないから、雑誌とかであまり出回ってないんだ、私の奴は」
「そうですか、テレビや試合での知名度が高いんですね」
「そうだ、実績の方が良いからな」
「もう少しで今日のメインイベントが始まるぞ、カイ！！」
「私らの防衛戦だろ、分かってるさ！！」
「頑張ってね、カイさん！！！」
「あぁ、負けないぞ！！」
「頑張ってきてください」
「あぁ……見せてやる、スカイスターを！！」
「スカイスター……『空の星』ってことは空中殺法だな、若」
「そうですね、楽しみです」

そしてメインイベントが始まるが早々にトミ子さんが相手のクロスボンバーを喰らって退場。

その所要時間は試合が始まって、およそ1分足らず。
すなわち1Rも終わらないまま、サンパギータ・カイは2VS1の変則マッチを強いられることになった。

「……ってパートナーの脱落が早過ぎないか、ユキ？」
「いつもあんな感じだよー」
「それはそれは……カイさんも苦労人ですね」

そんな事を言っている間にカイがコーナーポストに立つ。
そして飛び上がって空中でキリモミ状に高速回転しながら、相手に突っ込む。
しかしこれはあくまで『スカイツイスタープレス』での事、さらに倍以上の回転を加えて技の威力を底上げする、この技こそがサンパギータ・カイの最強技、その名も……

「アクセルスカイツイスタープレス！！！！」
「いつもより多く回しているのだー！！！！」

まともに受けた相手が二人まとめて吹っ飛ぶ、カイは綺麗にキャンバスに着地した。
そしてそのままゴングが鳴り響きレフェリーが近寄る、相手は二人とも失神していた。
レフェリーはその様子を見て手を交差し、サンパギータ・カイペアのKO勝ちを告げる。

試合時間は1分39秒、いつもの試合時間に比べればなかなか良い速度ではあった。
そしてトミ子さんを引き連れてリングから降りる、なんでもこう言った試合内容は少なくはないらしい。

「いやー、勝った、勝った」
「スカイスター……ちゃんと見させていただきましたよ」
「さすがはカイさんなのだー」
「って言うかメインイベントの終わりが早すぎません？」
「だって苦戦するような相手が居ないからな」
「さいですか……相手が気の毒だ」
「勝ったお祝いとかしませんか？」
「いや、今日はトミーがこんなんだから遠慮しとく、嬉しいけどな」
「これはこれは、残念です、ではまたいつか」
「トーマ、僕と準とトーマで祝おうよー」
「そうですね、ユキ」
「じゃあ、ユキ、お前はどこに行きたい？」
「んーっとねー、えーっとねー」
「言ってる間に決めましょうか」
「若、それもそうだな、いこうぜ、ユキ！！」
「うん！！」

試合が終わってユキは3人で町に繰り出したのだった。

――――――――　その頃の英雄

「ここが島津寮……黛由紀江がいる場所か」
「オイ、九鬼じゃねぇか、こんなところで何やってんだ」
「源か、ここに今、黛由紀江という女はいるか？」
「あぁ……あの新しく入った奴か、居ると思うぜ、入りな」
「我への心遣い、褒めてやろう、ふはははは！！！」
「勘違いすんじゃねぇ、俺が入るついでだ」
「2階に入るのには許可が居る、待ってろ」
「あれ、ゲンさんどうしたの？」
「直江か、九鬼の奴がなんか用なんだってよ、新入りにな」

「珍しいな、九鬼がこんな所に来るなんて」
「こんにちはー、大和居るー？」
「この声は……一子殿！！！」
「えっ、九鬼くん！！？、なんでここに」
「我は今日貴方への用事ではなくある女性へ言葉を送る為に来たのだ、そこまで驚かなくてもよい」
「ほらよ、黛って奴だ」
「あうあうあう……私に来客とは、どう言ったご用件でしょうか？」
「用件とは話だ、座るところで話をしても構わんか？、黛由紀江」
「はい、構いませんが……」

そう言ってリビングで英雄と向かい合って座る黛

「話というのは他でもない、逢間香耶のことについてだ」
「キョーヤさんの事ですか？」
「一子殿と源、直江大和と風間も知らんはずだが、なぜ誰にも喋ってはいないのだ？」
「えっ、九鬼くん、キョウちゃんについて何か知っているの！？」
「一子、食いつきすぎだ、離れろ！！」
「構わん、一子殿はキョーヤと仲が良いのであったな」
「うん、一緒の孤児院でタッちゃんといたから、仲良しだったわ」
「ならば当然事故について悲しみは大きかったであろう……」
「うん……優しいキョウちゃんがまさか飛行機の墜落でなんて」
「オイ、九鬼、テメェ……幾らなんでも一子の心をえぐるのはやめろ、流石に切れるぞ」
「キョーヤの奴は大方、黛由紀江、お前へ口止めをしたはずだ」
「えっと……、その…はい、黙っていて欲しいといわれました」
「しかしキョーヤの所在は分かった、新クラスオリエンテーションでな」
「どういう事なんですか？」

「奴の髪の毛からＤＮＡ鑑定をして分かった、あのミイラの様な生徒が居るのを知っていますか、一子殿？」
「うん、あのミイラさんね、知っているわ」
「俺と一緒にバイトしてる奴じゃねーか」
「そのミイラこそが逢間香耶であったのだ、源」
「じゃあ、やっぱりあいつはあの飛行機事故で……」
「死んではいなかったのだのだ、命からがら助かった、そしてそのあと生死の境から救ったのが黛由紀江、お主であったな！！」
「そんな……だから私は当然のことをしただけで…」
「香耶の様な事を言うのだな、そちらにとって当然の事でも、喜んでいる物は居るのだぞ」
「まゆっち、有難う！！！」
「その……有難うよ」
「源さんに一子さん、私は…」
「それでも良いわ、助けてくれたんだもん！！！」
「勘違いするな、お礼ぐらい言わないとな、恩知らずって思われんのが嫌だっただけだ」
「その行動に対して我は礼を言う為にここに来たのだ」
「そんなその事だけの為に……」
「学校でも良いが、大勢にばれるのでな」
「九鬼くんもわざわざ教える為に来てくれたの？」
「一子殿が来るかどうかは分からなかったので源か風間、直江大和の３人のうち誰かには、ばれると思っていたのです」
「そこから続いてわかってたって訳ね、有難う、九鬼くん」
「何、一子殿の笑顔で我は十分伝えた事への礼となる」
「お茶とかは？」
「要らぬ、十分に満たされた」
「有難うな、九鬼、一子が喜んでくれて俺は嬉しいぜ」
「我もだ、キョーヤの事については流布をせぬように頼むぞ、源」

そういって我は島津寮から出て行った。

第7話　「日常」（後書き）

コラボがしたいから前書きに書かせていただきました。
コラボしても良いよという人がいたらお願いします。

第8話　「登校風景」（前書き）

みなとそふとのサイト情報によるとタッグトーナメントのイベントが……それなんてワクテカ。

第8話　「登校風景」

「今日も朝日がまぶしいな」

4月も残り一桁となった、そんな中眩しいほどの朝日を浴びて歩いている。
ちなみに包帯の方は静菜さんに強引に言って診て貰ったら、一週間後には外して良いということでその日が来たら外そうと思った。
モロとか一子の目の前でだけどな、英雄が言ってなかったら良いんだろうけど。

「あっ、ウチの常連さんだよ、マヨ、相変わらず背が高いね」
「そうですね、あの人は優しい人ですよ、千花ちゃん、私は信用できます」
「マジでー、どこで優しいとか知った系？」
「羽黒ちゃん、1年生の時から色々な人のお手伝いをしていたのを見た事があります」

橋の方へと歩いていく時に2－Fの委員長達が話していた、だから隣を通り過ぎる際に……

「お早うございまーす」
「お早うございますなのです」
「（準が言うだけあってなんかくすぐられるな、まぁ、俺はロリコンじゃあないけど）」
「でも、あんなミイラみたいにして何が有ったんだろうね？」
「きっと他人に言いたくない怪我とかじゃあないでしょうか」
「体全体なんてマヨ、それもう火傷だよ、想像したら少し……」
「有り得る話かもしれませんよ、千花ちゃん」

「でも、それってなんてホラー系でヤバイ系だって言う話だよ」
「良いじゃないですか羽黒ちゃん、ホラーでも何でもその人はその人ですよ」

通り過ぎていく際に顔が黒い人がいやな事を言っていたり、小笠原さんは想像して驚いていたが、委員長である甘粕さんは平然と良い言葉を言っていた。

川原の近くで、ある男と目を合わせる……というか真ん中を陣取られたら自然とそうなるよね。

「おはよう、初めてだね、こうして向かい合って逢ったのは」
「師岡卓也か……どうした？」
「前々から気になっていたんだ、その包帯を取って欲しいなーって思ったんだけど、駄目かな？」
「駄目だな」
「それって何でやってるの？」
「仮装だよ、ハロウィンに向けて練習してる」
「嘘っぽさ満載だよ！！、実際は全然違う目的でしょ！！？」
「ぬおっ、何という突っ込み！？」
「どう考えても本格的過ぎるし夏なんか蒸れるじゃん！！、それに仮にハロウィンだとしても去年に出来てたでしょ！！！！……はぁはぁ」
「マシンガンのような突っ込みだな、真相は……待っといてくれよ、師岡」
「分かったけど、あまりにも待たせるなら力ずくだよ」

そういって師岡……モロのやつが去っていく。
あいつ鍛えるのサボらなかったな、随分と動きが良いぜ。

「よーう！！」
「って今度は風間かよ！！」
「お前なかなか面白い格好してるな」
「そりゃどうも」
「お前……なんかどっかで見たことあるんだよな」

そういわれて内心どきどきする、風間ファミリーにおいて最高の勘を持つキャップ。
最悪一気に看破されて学校内に広まる場合がある、

「仲見世通りじゃあないのか？、ホラ、小笠原さんの店で……」
「あーっ、あそこでね！！」
「だから初めて見た気がしなかったわけだよ、分かっただろ」
「それもそうか……でもそれだけじゃないんだよな」

食い下がられて探られたら面倒だな……

「それ以外にっていっても大方飯食いにいった時に視界に入ったぐらいじゃないの？」
「クマちゃんと食いに行ってた時か、あまり気にしてないからな」
「そういうもんだろ、ちらちら見えてる程度だって」
「んーっ、そういう事にしとくか、正直見たとか見てないでこれ以上時間取りたくねーし、ＨＲに間に合わなかったら、屋上はチョーさんに取られるからな」

そういってこれ以上探りを入れるのをやめて学校へ風間……キャップは行った。

「それにしても今日はよく絡まれるな……」
「おやおや、面倒事を抱えたような顔をして珍しいですね」

多摩大橋の中間でトーマと会う、後ろにユキと準が来ている所を見たら待ち伏せかな。

「トーマ……いや、少し話していただけだ」
「そうですか、何か悩み事をしてそうだったので」
「このままいったら包帯とか取る前にばれるって思った……」
「それは、それは……」
「最悪、準かユキに頼んでた方が良いかもな」
「準とユキを？」
「風間とか師岡らへんはいけるだろ」
「試合を見ましたがユキの鉄拳制裁となると、師岡君や風間君が気の毒ですよ」
「お前の過去と一緒……『好奇心は猫をも殺す』だ、牽制はする」
「逆にそこから怪しまれると言うのは？」
「探るなと言うだけだ、時期が来たら教えるといっているのに、それでも探ってくるならそれを辞さない」
「２－Ｆに２－Ｓが喧嘩を吹っかけたとあっては洒落になりませんがね」
「そこは……俺が落とし前をつけるさ」
「ならば探りを入れてくるようなら」
「準を使わせてくれ」
「構いませんが、無茶な事をさせるのは勘弁してくださいね」
「はいはい、ってその顔はやめろ、皺寄るぞ」
「これは、これは……ご指摘有難うございます」

そういって顔を触るトーマ、皺が寄るのは冗談だが、こいつの怒った顔は好きじゃない。
コイツ自身が並の胆力ではないから、そんじょそこらのチンピラと雲泥の差で威圧されるのだ。

「若、ユキをほうってキョーヤとは…まさか」
「トーマの射程距離に認定されたのだー！！」
「いえ、ユキに準、キョーヤは家族ですよ、知り合ってなかったら入ってますがね」
「その評価は嬉しいが……そんな事を言っていたら英雄の到着だ」

その言葉通り黄金の人力車を引いたあずみさんと、それに乗った英雄がトーマの目の前で止まる。

「フハハハハ、我降臨！！」
「お早うございます、英雄」
「我が友、トーマよ、今日もよき天気だな！！！」
「あずみさん、お早うございます」
「お早うございます、キョーヤさん☆」
「キョーヤよ、話がある！！」
「えっ……」
「先日黛という女に礼を言ってきた、そこで一子殿がいたが……」
「まさか、英雄……」
「お前が健在という事を知ったら源と一子殿は大いに喜んでおったわ！！！」
「何言ってるんだよ…」
「本当ですよ、英雄、その判断は迂闊です」
「別にその時来たら教えるのに……よりによって一子とか、嬉しさで言うなって言っても言うぞ、あいつは」
「別に一子殿が喜んでいるから良いのではないか！！」
「聞いてないし、こうなったら過ぎた事言っても意味がないか…」
「はい、という事で諦めてください、ねっ」
「そういう事で諦めます」
「若、もう時間やばいぞ」

「いそごーよ、トーマ、ぎゅーん！！」
「そうですね、急ぎましょう」

――――――――　朝から気力を削がれる展開であった。

――――――――　登校してＨＲ終了後のキャップ

「で……やっぱり一番乗りか、チョーさん」
「風間に直江じゃないか、お前らもか？」
「まぁ、そんな所です」
「直江、畏まるなよ、敬語なんて息が詰まっていけねーや」
「そうだぜ、大和、チョーさんは一回本当に、堅苦しく言葉使った生徒に怒ったらしいからな」
「全く、礼儀は授業中ぐらいで良いんだよ、それ以外は同じ場所にいるんだ、仲良くいこーぜ」
「それに授業もユニークでヒゲ先生と同じみたいで結構人気あるんだぜ！！」
「一応3年での人間学を担当しているからな」
「実体験でなんか有ったんですか？」
「ちらほらな、警察沙汰とか、税務署とか……」
「そんな人なのに優しいから俺は好きだぜ」
「おまえなぁ、調子良いぞ」
「チョーさんなりのギャグか、それ？」
「テメェ……とさかにくる物言いだな」
「ハハハッ、悪い悪い」
「キャップ、本当に親しみすぎじゃあないのか？」
「これ位で良いんだって」
「まぁ、ちょっとやめろよって言う時は注意するから、直江も気にせず、タメ口聞けよ」
「はい……」

「で……チョーさん、前の山でのお土産どうだった？」
「あぁ、アレか」
「阿蘇山行って、熊本のからし蓮根と博多の辛子明太子だったっけ、キャップ」
「あれあったらゴハン進むだろ、そう思って土産にしたんだぜ」
「美味しく頂いたさ、たらこ茶漬けにしたりそのまま食ったりして、たらこは5日で全部食いきったぜ」
「それなら良かったぜ、辛い物がキライだったらちょっと悪いなとは思ったけど」
「だったらもっと万人受けするものにしようよ、キャップ」
「大和だって安直だけど行けそうとか思うだろ、フツー」
「そんな事言い合ってるけど、直江に風間、もう1時間目始まるぞ」
「大和は行っておけよ、俺はここで寝るから」
「風間……お前は成績どうするんだ？」
「俺は夢が冒険家だから別にいいっす」
「そうか、直江、お前は出ておくのか？」
「俺一応優等生で通ってるんで」
「そうかい、俺は一時間目ねーからちょっとのんびりするかな」
「先生なのに良いのかよ、チョーさん」
「アドリブで授業考える、これ最強」
「かぶらねーのか、それ？」
「一応記憶力は良いんでな……Ｚｚｚ」
「チョーさん寝ちまったよ、じゃあ俺も寝るかな……Ｚｚｚ」

――――――――　自由な風の生徒と自由な教師は今日も今日とてわが道を貫いていた。

――――――――　登校してＨＲ終了後のモロ

「一体あのミイラってどんな人なんだろう？」

「もしかして師岡ちゃんも気になりますか」
「委員長、うん、だってただでさえC組からS組だからどんな素性なのかね……」
「僕が仲見世通りに行ったら十中八九見かけるよ」
「あと、宇佐美先生の所のバイト系でー、源と一緒に仕事してる系だしねー」
「って事はキャップみたいに食べ歩きしていて、なおかつ腕力がある人って所だね」
「モロ、あとあいつは俺ほどではないがなかなかシンパシーを感じる点があるぞ」
「スグルがシンパシーって結構ディープなオタク気質持ちかな」
「でもあいつは男のロマンを壊す、S組の逢間小雪と今年の新入生の奴の写真をことごとくガードしているんだ！！！」
「サルの変態行為止めてるってだけでプラスだね、女性の味方だわ」
「そんなこと言うけどなぁ、目つきが獣なんだぞ、あいつ！！！」
「ヨンパチの行動を止めるほど……写真にかけては、俊敏性が格段に上がるのに止められるって事は身体能力も高い」
「でも総合して言えば3年生の先輩さんたちや2年生の人達、そして新入生とは結構仲良しさんを増やしているようですね」
「マヨの言うとおりだよ、手伝いとかしてね」
「これらの事を完全に考えれば人脈を欲していて、なおかつS組に入れる知識を持っているにもかかわらず優しい人、さらにスグル並みにディープな知識を持ちながら身体能力が高い……」
「結構絞り込めそうだよね、モグモグ」
「それにしてもここまでの評価って相当だね」
「まぁ、仮にあいつが俺と真逆で三次元好きでリア充だったとしても例外的に爆発しろとは言わんがな」
「スグル、病気か！？、お前がそこまで言うなんて……」
「ヨンパチ、俺は極めて正常だ、俺の中で奴はOKと言う結論がでた以上、俺自身の心に従うものだろう」

「イケメンだったら嬉しいけどね」
「イケメンという高望みをするものではない、スイーツ！！」
「なっ、何大声で怒ってんのよ！！、あんたには関係ないでしょう！！」
「お前のような外見で判断する奴のせいで、ああいう奴が肩身の狭い思いをするんだ、そこを勘付け！！」
「千花ちゃん、確かにスグルちゃんの方が正しいです」
「わっ、悪かったわよ、でもあくまで望みなだけなんだから……」
「それにしてもやっぱり皆気になるんだね、モグモグ」
「そりゃあ、クマちゃん、どう考えても不思議でしょ」
「こうなったらこんな時こそヨンパチ、お前の技術が必要だ！！」
「待て、スグル、お前まさか……」
「予想通りだ、お前があの男の包帯を取った所を激写しろ！！」
「嫌だね、なんで好きこのんで男を撮らなきゃあいけねぇんだよ！！」
「まぁ、スグル、時間が来たら教えるって言ってたけどね、今日の朝に外せって言ったらさ」
「モロ！！、なぁ、だったら気長にまとうぜ！！、なっ！！」
「必死だな、ヨンパチ」
「プライドを捨てるなんてまっぴらゴメンだね、俺だって必死だ！！」
「でも気長にっていつ頃だろうね、モグモグ」
「それについては分からないし、名前も知らないから、少し後手に回るかもしれないけど、スグル？」
「そうだな、モロ、名前は多分ミイラで通してるし名簿は先公が持っていてアウトだ……お前ならどうする？」
「裏サイトでどんな評価か、名前ぐらいは分かるだろうね」
「さすがはモロだ、模範解答だな」
――――――――　一人の男について正体が気になる２－Ｆ、着実

に香耶への包囲網が狭められていた。

――――――――　登校してＨＲ終了後のキョーヤ

「くしゅんっ！！」
「どうしたんですか、キョーヤ？」
「風邪か？、気をつけろよ」
「いや、違う違う、誰かが噂でもしたんじゃあないのか、風邪でないのは確かだぜ」
「それはないと思うんだー」
「ユキ……ストレートな物言いはよくないですよ」
「だって噂をしようにも噂してくれる相手がそんなに居ないでしょー」
「一応顔は広いんだけどね……まぁ、怒らないよ、俺紳士だし」
「自分でそれ言ってちゃ世話ないだろ」
「別に良いだろうが」
「それしても今日も２－Ｆ委員長は一輪の花のようだったぜ……ハァハァ」
「おまえなぁ、一応言うけど犯罪者にはなるなよ」
「お前、俺はな委員長の笑顔が見られればそれだけで良いんだよ！！」
「でも……」
「でもも何もあるか、この汚らしい阿呆がぁー！！」
「なっ、準の奴、キャラが変わった！！？」
「俺がただ不純な気持ちで委員長を見たり協力していると思ったのかぁー！！」
「準、ヒートアップしすぎですよ、少しばかりクールダウンを……」
「俺はただ『見守りたい』だけ、『枯らせたくない』だけだ、それ以外の理由はないんだ！！」
「で……キョーヤ、体の調子は問題ないんですね」

「あぁ、準は少しの間放置しておこう、うるさかったらユキが何とかしてくれる」
「で、葵くんたちは何でミイラ男の名を知っておるのじゃ？」
「不死川、実は新クラスオリエンテーションの時に髪の毛が抜けてな、それでＤＮＡを調べられたんだ」
「そうか、此方はどう呼べばよい、逢間（兄）と逢間（妹）か？」
「そこは小雪と逢間で分けてくれたほうがありがたい」
「ならそう呼ばせてもらおうかの、逢間」
「呼びにくいとは思うが我慢してくれ」
「むぅ……気を使割れるとやはりその外見ではむず痒いの、少し気味が悪い」
「それは言わないお約束な。トーマ、そういえば英雄は？」
「英雄はあずみさんと一緒に中東支部へ向かう為、ＨＲが終わってすぐに行きましたよ」
「相変わらず忙しい奴だな、あいつの診察は葵紋病院で時折やっているんだっけ？」
「ええ……私が専属でやっています、といっても英雄は肩こりとか精神面疲労から来る部分が多いので、相談に乗ったり按摩（あんま）などが主な治療ですよ」
「そうか、体を壊さないのが一番嬉しいんだけどな」
「それは私も一緒ですよ、キョーヤ」
「二人ともー、準が止まったよ」
「よくやってくれました、ユキ。準、お体は大丈夫ですか」
「若、すまねぇ、ちょっと暴走してたみたいだ」
「一応ユキからの制裁は飛ばなかったみたいだな、ユキ、有難う」
「二人とも、もっと褒めて、もっと褒めてー！！」
ユキは飛び跳ねて二人からの賛辞をねだる、といっても少し高いので撫でるのが難しいが。

――――――――――　Ｓ組は個性的に今日もまた慌しかった。

――――――――――　余談ではあるが２時間目が始まる前の職員室。

「逢間先生、分かっているのでおじゃるか！？」
「綾小路先生、私は確かに屋上にいましたが、私は書類などを前日に考えていたんです」
「しかし風間と一緒におるとは教師としての自覚が足りないのではないか、の」
「止めて止まるような奴なら小島先生が止めています、あいつは自由なものでね縛ったら縛ったで問題事になりますよ」
「じゃから一緒になって屋上で寝ていたというわけでおじゃるか、教師としておわっとる、の」
「終わっているとは……どういう意味でしょうか？」
「そのままの話でおじゃる、辞めた方が良いのでないでおじゃるか？」
「嫌ですといえば？」
「質問で返すとは学がないでおじゃる、の、断れば断るで……力ずくでやるという手もある、の」
「力ずくとはいえ綾小路先生では私に勝てませんよ、ガタイの差で分かるでしょう？」
「権力も『力』、暴力も『力』であろう？」
「御三家である綾小路の権力ですか……困りましたね」
「そうであろう、それが嫌なら頭を下げて心から変わりますと言ってみい！！」
「あの～、叫んでいて授業作成に集中できないんですがね、綾小路先生」
職員室には俺以外の３人目の先生、宇佐美先生が注意を促した。

「宇佐美先生、貴方も逢間先生に味方する気かの」
「いえ、味方とかじゃなくて……」
「問答無用、揃いも揃って家柄もなければ学もない様だの！！」
「家柄ねぇ……オジサンは孤児院だし」
「俺は勘当されたしな」
「そんな奴らが育てたりするのもろくでもない子供じゃ！！」
「綾小路先生、誰の事をいっているんですかね？」
「今の言葉は教師としてあるまじき発言ですよ、仮にも自分が受け持つ教科の生徒でしょう」
「黙りゃ！！、源忠勝、逢間香耶、逢間小雪という3人の孤児」
「だから何だって言うんですか？」
「源は治安の悪い場所におる不良！！」
「こりゃムカついちゃうなぁ……忠勝は俺の仕事を手伝いに来てんのによ」
「そして逢間香耶はミイラになった哀れな愚か者よ、なんじゃ、あの滑稽な姿！！」
「事故ですよ、滑稽って言われてもああしないと駄目なんですよ」
「極め付けは逢間小雪！！、母親が精神問題を抱えていて、虐めを受けて生死の境目まで追い詰められてたらしいの、逢間香耶はその際に暴力を振るっていたらしいの」
「だから何が言いたいんですかね……」
「（あらら……逢間先生相当ヤバイな、おじさんもだけど止めた方が良くない、これ？）」
「何……所詮家柄も学もない奴に育てられたら幸せにはなれんと言う事じゃ、の、香耶の方は犯罪者に近く、小雪の方は精神疾患の障害者などという家族揃っての人間として屑ができたという事じゃ、の」
「そうかい、……やまれよ…」
「えっ？」
「ユキと香耶に謝れって言ってんだよォ！！！」

「ストップだ、逢間先生」
踏み込んで一撃を放とうとした俺を宇佐美先生が羽交い絞めにして止める。
「なっ！？、宇佐美先生！！？」
「悪いが落ち着いてくれよ、綾小路の権力は洒落にならねぇ……あんただけじゃなくて一家全員路頭に迷う、だから抑えてくれ、なっ」
「くっ……」
「ほほう、さすがに宇佐美先生は大人じゃの」
「勘違いしないで下さいよ、綾小路先生」
「えっ？」
「ここでこいつが殴ったら面倒になるからですよ」
「どういう事でおじゃる？」
「人間学を全学年持つとか嫌なんでね、それでですよ」
「そうでおじゃるか、ともう2時間目が始まるでおじゃるな」
そういって綾小路先生は教室へと向かう。
「悪かったな、逢間先生、こうでもしなきゃマジで洒落にならなかったんでな」
「いえ、こちらこそ、そちらの事も考えずに」
「べつに良いんですよ、こっちも忠勝の事言われてかなり腹が立ってましたんで」
「おれだって不器用なりにあいつらの面倒を見てきたんですよ、それを否定されたと思うと……居ても立ってもいられなかった」
「私もそんな所ですな、こんな人間が全うに忠勝を育てられるか、当時はかなり手探りでやっていましたよ」
「それをあんな温室育ちに言われたらちょっと……」
「とさかに来るのも納得って訳ですな、正直どっちが綾小路先生に

手をあげてもおかしくはなかった」
「なのに俺をわざわざ羽交い絞めにして止めたんですか？」
「一撃ぐらい盾になっても良かったんですが、この年で若いものの攻撃はきついですからね」
「そこまでして俺の行動を止めたかったんですか？」
「逢間先生と俺は少しだけ似てる……ほんの少しだけどな」
「シンパシーを感じたから止めたんですか？」
「後は本当に授業の受け持ちが多くなるのが面倒だったって言うのもあるんだけど、それはちょっと内密にしといてくれませんかね？」
――――――　いつもは飄々としているが場を収めるにはそういった年長が体を張る、それを改めて知った長枝なのだった。

第8話　「登校風景」（後書き）

次回で１０話突破。
その次ぐらいにはまた山蘂さんみたいに武士道プランに2人ほど入れようかなとか思ってます。

第9話　「新たなる武士」（前書き）

今回で武士道プランのメンバーを2人ぐらい加えます、3年枠の予定に。

第9話　「新たなる武士」

昨日の苛立ちは霧散して川神学園へと向かう長枝、といっても先日の深道の考えが頭から離れない。

ストリートファイトの事を持ち出したと言う事は深道ランキングを復活させる気か？

出来なくはないだろうし、学校内でやって一部分の特別枠さえ設けて、九鬼揚羽を参加させたりして資金援助は可能だろう。

まぁ、あいつは直江より頭回るからな、その程度の手を打つのは予測しているが。

イレギュラーに近い川神百代を渺茫だとしてもまだ『集団』の中にしかいない。

そこから頭一つ抜き出ている程度では『究極』にはなっていない。

なぜならジョンス・リーが言うように『屈辱』も『敗北』もない奴が辿り着く地点は見えている、それらを？み込んで景色を変えなくてはならない、それがまだ無いが故に俺のような奴らに足を掬われるだろう。

ヒュームさんに比べて、川神鉄心は年相応だからね、カウントしないし、二人がライバルと言う事は、やっぱり集団の内に頭が抜き出ていた『だけ』というわけだ。

川神百代が相手ならジョンス・リーの『最大の勁の一撃』でも勝てるだろうよ、なんせ『現代最強の男』だからな。

それに俺はずっと鍛錬をしてきた、『現代最強』のバトンを貰わず『次世代最強』を今まで暖めてきた。

だからこそ自負ある、武神にも負けないと。
かたや『究極』になれなかった同率1位としてのナンバー1。
かたや『世代最強』を文字通り手に入れたオンリー1。

といってもそんな自覚無いけどな……深道が言ってた事だからあの時だけのプラシーボ効果を狙っただけかもしれないし。

ならなんで鍛錬積んできたの？と言われればこう答えよう。
だって格闘家だから、腕を鈍(なま)らせたくなかった。
それに執事になっても紋白様は揚羽様みたいに武闘派じゃないから守るために鍛えてたし、教師になっても問題児がいたら洒落にならないからきたえた結果……

彼女居ない暦＝年齢であり、４歳から始めた武術は２４年の研鑽を積み昇華されていった。

「だからこそ悪夢なんだよな……アレが」

１３年の努力が同じ八極拳士に微塵も残らぬほどの粉砕、アレから数日の間飯が喉を通らず何をするに置いても抜け殻のようだった。

「芽を摘み取るわけではないが俺がその慢心を打ち払ってやるか……それにただ一度の敗北などで芽が摘まれるならばその程度と言うわけだ」
「結構物騒な事を言っておりますな、長枝先生」
「学園長、お孫さんが負けたらどう思いますか？」

「一子は少し可哀相じゃがのぉ、モモについてはどうも思わんよ」
「何でですか？」
「いい加減あの鼻を圧し折ってやらんとの、難しいがの」
「何でですか、別に学園長なら勝てるでしょう？」
「わしは年じゃよ、長丁場になればなるほどモモに有利になるんじゃ」
「九鬼家従者部隊零番、ヒューム・ヘルシングなら？」
「あいつならいけるじゃろうのう、ワシよりも未だに鍛えておるからな」
「しかしあの人をわざわざ呼び寄せても……」
「赤子扱いして帰りそうじゃのう」
「困りましたな……」
「で、なぜ逢間先生はヒュームを知っておるのじゃ？」
「若い時分、武者修行していたときに風の噂で聞きましてね」
「ほほう、武術家だったかの、逢間先生」
「武神、川神鉄心に並ぶ西洋の者として語られていましたよ」
「よく見ればその目の奥、この老いぼれの血を騒がせる気血に満ち溢れておるの」
「やる気ですか……やめておいた方が良いかと」
「残念じゃが、遅いわ！！！」
「くっ！！！！」

空に浮かんだオーラが毘沙門天となり踏みつけてくる、しかし……

「……ふぅ、外したんですか？」
「何を言っておるか、おぬしが『外させた』んじゃろうが」
「えっ、できるわけ有りませんよ」
「何を戯けた事を……不意打ち気味で仕掛けたのに、化勁で逸らして、発勁で弾きそのあと硬気功の両手交差で防いだんじゃろう、芝居はそれほどにしておいた方がいいぞ」

「でもこれだけの強さを撒き散らすのは少し問題なんです、学園長」
「なるほど……釈迦堂と一緒になるか」
「戦いを欲するようになってしまう、それが怖い」
「その姿があまりにも問題があるからか？」
「血塗れになっても殴りたいとか、暴力的な思想に染まりますね」
「獣か……それを食い止めるための抑制、しっかりしているの、釈迦堂やモモとは違うわい」
「戦いは満たしてくれます、でもそれは対等な戦いでの事、本気を出せる相手である事、それ以外は……満たされないんです」
「満たされないが故に、飢えたとしても己が内に溜め込んで抑制する、見事じゃよ」
「それで……授業時間大丈夫ですかね」
「それもそうじゃな……ワシしか見ておらんよ、一回競争してみんか？」
「やるなら全力、それが俺の性分だ、無駄に火をつけたから言うぜ……」
「なんじゃ？」
「爺のでる幕じゃあねぇんだよ！！！！！」
「なっ、速いのう！！？」

速く、ただ速く走る、面白おかしく試そうとしてる爺さんと違うんだよ、俺は己の『戦』に負ける気はねぇんだ！！！

「負けたのう……」
「追走しておおよそ３０Ｍ開きましたね、学園長」

学園長との追いかけっこには勝った、試すつもりだったんだろうがこちとらいつでも真剣勝負なんだよ。

「では私は授業の方に行って来ます」

「爺と呼ぶほどに性格が豹変するとは、根っから戦闘が好きなようじゃのう」

3年生の教室へと行く、いやはや久々にヤバイと思える攻撃に出逢い、そしてそれを避けたよ。

ちなみに学園長はどこかへ向かっていった。

「お前ら、今日の授業始めるぞー！！」

「ハハッ、チョーさんじゃないか」

「先生としての人気は高いで候」

「お前ら、からかうなよー、授業の時は真剣に聞いとけー」

今日も今日とて長枝はいつもの平常運転で授業や世間話を行うのだった。

――――――――　一方その頃　同時刻　親不孝通りの喫茶店にて

「で…金ちゃんなんでこんな所を拠点に置いたんだ？」

「言い方は悪いが俺たちのようなはぐれ者はこういった場所が似合う」

「長枝の奴がここらへんに居たら頼れるんだけどな」

「また逢えるといって11年……出逢わずに過ぎていった」

「あいつの噂はなんやかんやで聞く様になったもんな、金ちゃん」

「格闘では無敗の王者、世界の九鬼財閥の執事、どれを取っても誇らしい実績だ」

「俺達から離れたあと、どこまで頑張ったんだろうな」

「とりあえず川神院に行くか、なんかルーとかいう先生から話が合ったんでな」

「あぁ……そうだな、金ちゃん」

そして出て行く男達、一人は黒い服……まぁ、平たく言えば学生服を改造したかのようなタイプの服装。
もう一人はジャケットルックに身を包んだヒゲを生やした巨人、傍目から見ても２Ｍをゆうに超すであろう身長である。

そんな姿を見れば不良は近づかない……馬鹿か獣でもない限りは。
ここでは前者の馬鹿だったようだが。

「よう、おじさん、金持ってるの？」
「なんだ、お前ら」
「金ちゃんからカツアゲしようと言うなら黙ってないぜ……」
「うるせぇよ、デカブツ」
「俺たちはこのおじさんに話があるの、このおじさんのお金だけがほしいの」

男達はうかつな言葉を吐く、このジャケットルックに身を包む男は十分に多摩大橋…変態の橋でトップクラスに認定される性癖を持っているのだ。

それは……

「金ちゃんが欲しいだと……おとといきやがれぇえええ！！！！！！！」
「ぐあぁあああ！！！？」
「金ちゃんは俺のものだ、お前らの思い通りにはさせない、俺は金ちゃんと愛し合うんだぁ！！！！！」

真性のゲイ、いやここまで一途ならばそんな次元を通り越した純愛ゆえに分別させるカテゴリがない。

「おぉおおおおお！！！！！！！」
「がぁあああ……」
２Ｍをゆうに越す巨体に備わった腕を振り回し、台風の様に相手をなぎ倒してゆく。
「長戸、もう良いぞ、十分だ」
「分かったよ、金ちゃん……後ろだ、金ちゃん！！」
「おお、オラァ！！！！！」
後ろを振り向く際に拳を振りぬいて最後の一人である不良を殴り倒した。
「ぐぅうう……」
「喧嘩売る相手間違えたな」
「……あんたら何者だ？」
「俺の名前は北枝金次郎」
「俺の名は長戸だ」
「どっかで聞いた事のある名前だな……」
そう言って不良は気絶をする。
「長戸、ジュネレーションギャップを感じるな」
「金ちゃん、きっと東京とか川神方面には『黒正義誠意連合』の名前は、あんまり浸透していなかったんだって」
「そう思っておくか、行くぜ！！」
そういって長戸と北枝金次郎は川神院へと向かっていた。

――――――　一方その頃　同時刻　親不孝通りのあるヤが付く人達の事務所

「くそっ、なんだ！？、お前は！！？」
「お前らのせいで任務が入ってきてな、面倒なんだよ」
「何言ってんだ！！」
「いきなり光り物をガキが出してんじゃねぇ……」
「匕首が拳一撃で割れた！！？」
「オラァ！！！」

床に踏み込み一撃を見舞う、その一撃たるや長枝を凌駕しているのではないのかと見まがうほどであった。

「ぐあぁあああ！！！」

その一撃によって窓が割れて喰らった男が落ちていく、そしてその床を見て他の男達が驚愕していた。

「かっ、陥没している！？」
「そんなもんじゃねぇ、これは……」
「蜘蛛の巣みたいだ、まさか！？」
「コイツがあの『蜘蛛の巣通り』の鬼！？」
「そんな風に呼ばれてんのか、悪いがそんな大層なものじゃあないぜ」
「撃て、もうこうなったら蜂の巣だ！！」

恐怖に駆られて銃撃で男を消そうとする……しかし、その銃弾のど真ん中を歩き、こんな言葉を心底呆れた様に言っていた。

「なんだ、コリャ……」

「ヒッ、ヒィイイイ！！！？」
「ナメてんのか……」
「銃弾が逸れてる！！？」
そうは言っても掠ってはいるのだ、それさえも意に介さずに突き進んでくる。
それからはその男の独壇場であった、短いとはいえ白銀の髪を振り乱すように一心不乱に暴れる。
それを見て恐怖するものはその暴風のような猛攻になすすべなくボロ布のようにされた。
「全員が一撃で……何でワシらを狙うのだ！？」
「ただウチのもんに良いとこ見せようと思ったのと、ここを修繕して住処にする為だ」
「そんな理由だけで！！」
「ユニークだろ？」
最後に報いようと匕首を振り上げるが、平然とユニークの一言でこの騒動を片付け、一番上の男を吹き飛ばした。
「全く……川神か、武神とか『現代最強』の女子高生、無粋な今日明日もまた面白ぇ、ホント生きてて良かったよ」
「師範、お久しぶりです」
「李（リ）・静初（ジンチュー）か…久しぶりだな、俺の目にかなった一番の弟子だろ」
「そう思って頂けていたとは光栄の極み！！」
「そしてそこにいる金髪の姉ちゃんは誰だ？、俺の知り合いにはいないぞ」
「ステイシーって言うんだ、宜しくな」
「宜しくな、俺は……悪い、どうやら来客のようだな」

そう言って白銀の髪を持つ男は外に出る、そこに居たのは川神院総代にして川神学園学園長、川神鉄心であった。

「川神鉄心か……俺になんのようだ？」

「話をするつもりだったんじゃがのう、なかなかどうして……おぬしもこの老いぼれを熱くさせよる、ほんの一撃で良い、付き合ってくれんか？」

「かまわねぇ……来い」

「はぁっ！！！」

「毘沙門天か、綺麗だが……」

空に浮かんだオーラが毘沙門天となり踏みつけてくる、しかし……

「……なっ、二人目じゃの」

「そうか、悪いが踏みつけてくる程度でこの俺を倒そうなんて虫が良すぎるぜ」

「そっちの気持ちを感じんですまんかったのう」

「いくらか言いたい事は有るんだよ……」

「何かの……化勁で逸らして発勁で弾きそのあと硬気功の両手交差で防いだんじゃろう、何で今日に限って同じ回避をするものに出会うのかの？」

「さっきのは不意打ちみたいなものだ、気を張ったらもっと簡単に返せる、まぁ、一言で言うと……」

睨みつけて、歯を食いしばり、手にも力が篭る、川神鉄心はこの男の心に…『現代最強の男』に火をつけたのだ。

「本気にさせたな！！」

「一撃といったじゃろう、お主の名前は知っておる」

「自分の用だけやったら、終わりだっていうのか？」
「怒りなさんな、ジョンス・リー、おぬしにはある職場を用意しておる」
「なんだと……」
「川神学園の副担任を受け持って欲しい」
「ふざけるな、俺は教師の免許は……」
「それはこちらで融通しておくからの、気が向いたら来てみるが良い」

そういって武神、川神鉄心は高笑いをして去っていった。

――――――――　その頃　同時刻　九鬼財閥系列のホテル

「どうですかな、お二人方、調子の方は？」
「そんなかしこまんじゃねぇよ、クラウディオ！！」
「クハハハハハ！！、その通りよ、畏まる必要などあるまい！！」
「二方のうち貴方には記憶障害があると診断されているのですよ、心配にもなりますし、なおかつ執事として敬う言葉で当然なのです」
「もはや治ったわ、敗北と再戦の強き思い、それが混ざっていただけ、先祖の無念であるならばこの世に転生したこの俺が雪辱を果たすのみ！！、そう思うだけで血が滾るわ」
「俺も強い奴が武士娘がいるならば戦いたいもんだぜ、転入が楽しみだ！！」
「お二人は似通っておりますね、戦いに生きております」
「当然この血が滾るのは戦いを欲するがゆえよ、別に無くても良いがやはり人生には紆余曲折が無くてはな、そのための戦いよ」
「俺もそういったところだ、だって絶対じゃないけど戦わないとよ、生きてるって感じがしねぇ！！」
「流石は戦いを愛す英雄、伝説の御子と二の撃ち要らずですな」
「本名でよびな、クラウディオ」

「俺もそれを望む」
「クー・フーリンと李書文、これで良いですかな？」
「やっぱこれで呼ばれんのが一番良い、『クランの猛犬』とかより肌になじむ」
「俺もな……」
「しかし学園生活が1年って言うのもなんかなー」
「少しばかり悲しいぞ、クラウディオ」
「お二人とも九鬼家の軍需鉄鋼部門や従者部隊の任務が濃くなる為、そうせねばならないのです」
「まぁ、そういう契約だしな」
「ごねてはいかんな、すまん、クラウディオ」
「分かってくだされば よいのです」

九鬼財閥系列のホテルで稀代の槍使いと八極拳士が高らかに笑い転入を楽しみにするのだった。

――――――――――　その頃　川神学園昼休みでのキョーヤ

「由紀江さーん、居ますかー？」
「あっ、キョーヤさん！！」
「あれ、この人どこかで見た事ある？」
「あんたは大和田伊予さんだな」
「えっ、大和田さんの名前知っているんですか？」
「当然、新入生の人の名前と顔は覚えたよ」
「凄いなー、先輩として把握しているのは尊敬しちゃうかも」
「いやいや、ただの暇人だからね、尊敬されても困る」
「でもこの姿どこかで…漫画だと思うんだけど…」
「きっと流浪に剣神の獅子雄真人だろ、よく知ってるね」
「でも剣使えませんよね、キョーヤさん？」
「剣は剣でも拳の方だね」

「面白い先輩だなぁ……」
「そんな君、俺と携帯の番号を交換しないか？」
「あの……赤外線じゃないんですか？」
「そんな機能は使わない、俺それのやり方知らないからね」
「キョーヤさんは機械の扱いが苦手なんですよ、大和田さん」
「有難う、黛さん、まさかそんな欠点が先輩にあったなんて」
「これで大和田さんと俺は携帯を通じて連絡できるって訳だね、有難う」
「良かったですね、キョーヤさん」
「由紀江さん、どうやら俺が居なくて寂しさのあまり再発すると思ったが、あの癖はやめたようだね、久々に見て確信したよ」
「あうあう、アレは恥ずかしいですし、そのあの一言で別れる決意が出来ました」
「どうかしたんですか、なんか変な癖が有ったんですか？」
「大和田さん、実はね由紀江さんは腹話術で寂しさを紛らわせていたんだよ、それである日いったんだ、『友達が欲しいならそれに大事な事は言わせるべきじゃあない』って」
「そうだったんだ、そんな所があるなんて面白いですね」
「（よし、面白い子だと思わせた、今チャンスだぞ、由紀江さん！！）」　※アイコンタクトです
「あっ、あの大和田さん！！」
「どうしたの、黛さん！？」
「突然ですが私と、私と友達になってくれませんか！！」
「別に良いよ、そんな大声出さなくても、友達になるのに大声よりも心だよ、黛さん」
「あうあう、キョーヤさん、これで友達が一人出来ました」
「泣くほど嬉しかったんだね、良かったね、由紀江さん」

その微笑ましい光景を見て俺は１－Ｃから退室した。

第９話　「新たなる武士」（後書き）

ｆａｔｅからランサー兄貴降臨というようにしました、李書文はｅｘｔｒａで出てきますがそれに先祖として八極拳使いの渺茫が負けた記憶があります。
今回は本元と違い聖杯に呼ばれるのとは別次元の為、二人とも宝具も無ければ神の次元というものでも有りません。
一応パロネタ使いました。

プロフィール紹介（前書き）

マジ恋風のプロフィールを用意しました
追記：まゆっちルートでのタロットのカードを各キャラに追加しました。
名前をク・フーリンからクー・フーリンとしました。
どちらも正式な名称です。
香耶の外見の説明を入れました。

プロフィール紹介

逢間（おうま）　香耶（きょうや）

身長　１７９Ｃｍ
血液型　Ｂ型
誕生日　６月１日　ふたご座
一人称　俺
あだ名　キョーヤ
武器　拳（正統派八極拳）
　　槍（六合大槍）※拳には劣る。
職業　川神学園　２－Ｓ所属
好きな食べ物　カレー　マシュマロ
好きな飲み物　緑茶
趣味　鍛錬　読書
特技　集中力で痛みを消す事　料理をはじめとする家事
大切なもの　孤児院の寄せ書き　軍服
苦手なもの　機械の扱い
尊敬できる人　逢間長枝　マルギッテ・エーベルバッハ
タロットカード　「星」

川神学園の２－Ｓ所属の高校２年生、交友関係は葵冬馬、九鬼英雄、井上準など。
それ以外にも人脈は着々と増やしていたり用意周到な奴。
実は一子や源のように孤児院から引き取られた子供である。
宇佐美代行センターでバイトをしている為貯蓄などは作っている。
小雪とは長枝が引き取った兄妹同士。
マルギッテ・エーベルバッハとは狩猟部隊での隊長と副隊長としての間柄。

見た目は包帯を巻くとるろうに剣心の志々雄真実みたいになる。
素顔の方は切れ長の目で目つきは多少悪いが十分イケメンの域。
黒髪のポニーテールを束ねている、一応切ろうとは思うが面倒なのでどうしようか考えている。

逢間（おうま）　長枝（ちょうし）

身長　１７１Ｃｍ
血液型　Ａ型
誕生日　９月１２日　おとめ座
一人称　俺
あだ名　チョーさん
武器　拳（正統派八極拳）
職業　元格闘家　元九鬼家執事　現在は川神学園常勤講師
好きな食べ物　ゆで卵
好きな飲み物　紅茶
趣味　鍛錬　生徒とのふれあい　屋上で寝る事
特技　料理をはじめとする家事全般
大切なもの　金次郎から受け取ったハチマキ　長戸から受け取ったジャケット　逢間香耶　逢間小雪
苦手なもの　酒　タバコ
苦手な人　皆口由紀　九鬼紋白
尊敬できる人　ジョンス・リー
タロットカード　「太陽」

前作から引き続き登場してきた『次世代最強の男』。
前作の２部最終話で格闘家となったのはいいが６年の間満足いく試合が出来ず退屈していて、香耶がドイツに軍へ行った際に九鬼家の執事になった。
引退というか３年間の契約が切れるまで、九鬼家従者部隊１番とい

う誇りの位置に居たが、契約が切れた際、若手である忍足あずみへとその地位を渡した。
契約が切れた後、川神鉄心からこの職場を紹介されて去年から川神学園の常勤講師となった。
結構教師として人気が高く生徒からは信頼されている、というか趣味が家事になったり身長が伸びたり１１年の間に様変わりしまくっている。
かつての主である九鬼紋白には強く言えないと言う面で苦手、皆口由紀には頭が上がらないという面で苦手。

逢間（おうま）　小雪（こゆき）

身長　１６５Ｃｍ　３サイズ　Ｂ　８８　Ｗ　５９　Ｈ　８７
血液型　Ａ型
誕生日　７月１日　かに座
一人称　僕
あだ名　ユキ
武器　拳法　（テコンドー　ルチャ・リブレ）
職業　川神学園　２－Ｓ所属
好きな食べ物　マシュマロ　長枝と香耶が作るものなら何でも美味しく食べる
好きな飲み物　紅茶　麦茶
趣味　空を見る事
特技　時間の有効活用
大切なもの　友達
苦手なもの　怒鳴り声（プロレスの応援や注意は問題ない）
尊敬できる人　逢間長枝　逢間香耶　葵冬馬　師岡卓也
タロットカード　「魔術師」

学校内をフラフラと漂う美少女、天然の枠に収まる時も有ればはみ

出す時もある不思議な子。
空を眺めて鳥を数えたり雲を数えたり傍から見ればほのぼのする光景を作っている、マシュマロの支給は長枝が買っているものかあずみから貰ったもの。
原作に比べて長枝や香耶の救いによって心は壊れずに、電波ではなく前述したように不思議ちゃんの枠でとどまっている。
タロットも塔のカードから変わって魔術師のカードとなった。
香耶は兄として、長枝は親としての尊敬。
トーマは患者として通っていた際に親身にしてくれた為に尊敬、モロに対してはいじめから助けられた為に特別懐いている、恋慕かも知れない。
ルチャの素質は折り紙つきで、サンパギータ・カイが絶賛するほどである。

師岡（もろおか）　卓也（たくや）

身長　１６６Ｃｍ
血液型　Ａ型
誕生日　３月２１日　おひつじ座
一人称　僕
あだ名　モロ
武器　拳法　（カポエイラ）
職業　川神学園　２－Ｆ所属　実家通い
好きな食べ物　照り焼きバーガー
好きな飲み物　シェイク
趣味　漫画　アニメ　ゲーム
特技　コンピュータなどに詳しい
大切なもの　ハードディスクの中身
苦手なもの　鳥のささ身　卵白　（修行の時に嫌というほど食わされたから）

尊敬できる人　ゲイツ
タロットカード　「教皇」

風間ファミリーのツッコミ＆ａｍｐ；驚き役をこなしている男。
割と個性豊かな人が集まる風間ファミリーにとってノーマルに近い為、どうしても突っ込み役になってしまう。
仲間内の思い入れは強くいつも皆に気遣っている優しい所もある。
漫画やアニメ、ゲームが好きで機械に詳しく、語ると止まらない。
ネットにも通じているため、仲間内でのエンターテイメント部門担当。
原作とは違い、香耶の強さを知った後、京のいじめをきっかけに強くなろうと長枝にカポエイラを教わる。
その時にユキに優しい態度を示したり話し相手になった為、原作とは違い女性への苦手意識はなくなった。
教わったカポエイラは喧嘩など、面白半分に使わずに長枝に組み手のためで訪れる以外は鍛錬に留めている。
嘗てのヘタレでシャイな自分から、変わる事は変わったがもう一つどこか物足りない感じを抱いている。

山蘂（さんずい）　芽荘（めしょう）

身長　２０３Ｃｍ
血液型　ＡＢ型
誕生日　５月２１日　おうし座
一人称　俺
あだ名　山蘂さん
武器　拳　（流派を持たず）
職業　武士道プランの一員
好きな食べ物　煎餅

好きな飲み物　番茶
趣味　薪割り
特技　力仕事全般
大切なもの　好敵手
苦手なもの　ドア
尊敬できる人　逢間長枝　マープル　九鬼揚羽
タロットカード　「力」

武士道プランの一環によって生まれた、ある男のクローン。
幽霊であった意識と融合した６００年前の戦士。
肉体とは即座になじんだ、今の所目的は２つ、１つはぼかすが、もう１つは義経達を全力で守る事。
山の仕事である薪割りや畑の耕作に汗を流す所を見ると、昔らしい古風な人間であると認識するだろう。

ここからはｆａｔｅ勢です。

クー・フーリン

身長　１８５Ｃｍ
血液型　ＡＢ型
誕生日　７月２３日　しし座
一人称　俺
あだ名　兄貴
武器　槍
職業　武士道プランの一員
好きな食べ物　ボクスティ　アイリッシュシチュー　（どちらもアイルランド料理）
好きな飲み物　紅茶
趣味　運動

特技　魚釣り、素潜り、山登り
大切なもの約束
苦手なもの　回りくどい方針、裏切り
尊敬できる人　九鬼揚羽
タロットカード　「戦車」

武士道プランの一環によって生まれた、クー・フーリンのクローン。主に自由な精神でその好奇心ゆえに体を動かしたがる、風間翔一に似通った部分はある。
根は実直な性格で、口は悪いが己の信念と忠義を重んじる。
そのためこの時代に己を再現してくれて、のちに携わるであろう軍需鉄鋼部門で、統括に当たる九鬼揚羽を尊敬している。
夢はただ心行く戦いをする事、生粋の戦闘好きで強い奴を見るとうずうずする。
ちなみに面倒見は良い、その為武士道プランのリーダー格である。
嘗ての誓いであるゲッシュも再現されている。
その為、年下である九鬼紋白の食事など近い未来、下級生になる香耶たちの食事を断る事はできない。

李（り）　書文（しょぶん）

身長　１７５Ｃｍ
血液型　Ａ型
誕生日　９月１５日　おとめ座
一人称　俺
あだ名　李さん
武器　拳（李氏八極拳）
職業　武士道プランの一員
好きな食べ物　シュウマイ　餃子　八宝菜
好きな飲み物　中国茶

趣味　鍛錬
特技　演技をする事
大切なもの己の誇り
苦手なもの　罠　病
尊敬できる人　九鬼揚羽
タロットカード　「運命の車輪」

武士道プランの一環によって生まれた、李書文のクローン。
その性格は饒舌で猛々しい。
武の真髄として八極拳を創造した武芸者である、それが現在に名高き李氏八極拳である。
もともと義理を通す善良な人物だが、悪もまた良しと考えており、非情に聞こえる判断さえも厭わない。
生前の死因や行動に無念や怨念はまったく持っていないので、転生してからは強者との戦いを望んでいる。
先祖の無念である、ジョンス・リーと逢間長枝への勝負はその中でも最優先にすべきものとして心の奥に秘めている。
一応、のちの軍需鉄鋼部門で担当に当たる九鬼揚羽を尊敬している。

プロフィール紹介（後書き）

一応何とか調べました。
クー・フーリンはＦａｔｅからの引用ですが李書文はオリジナルで考えました。
といってもクー・フーリンの細かな設定や背景はオリジナルとなりましたが。

第１０話「小春日和の終わり、それを彩るは獣の狂宴」（前書き）

次回で４月編は終わりです。

第１０話「小春日和の終わり、それを彩るは獣の狂宴」

今日は４月が終わる日。
包帯が取れるようにはなった、が……

「先輩、今日も包帯なんですか？」
「大和田さん……外すのが面倒なんだよ、場所がないし」
１－Ｃで談笑する、昼休みのご飯はＳ組の奴に馬鹿にされたから気がかりでないここで食べる。

「トイレは？」
「無駄に物捨てちゃ駄目だからできない」
「まゆっちに頼めば良いじゃないですか」
「君は親友にそんな役回りさせるのかい？」
「えっ？」
「傍から見たら包帯グルグル巻きの人の服を剥いでるんだよ、恩を持つ人にそんな真似はちょっと無理だね」
「そういえばそうですね、すいません」
「あれ、香耶さん、ここに居たんですか？」
「由紀江さん、どうしたの？」
「２－Ｓで九鬼先輩が怒ってましたよ、何かあったんですか？」
「あいつは……まぁ、この弁当を見てくれよ」
「お浸し、こんにゃくステーキ、鳥のささみとキュウリのサラダですか？」
「正解、食いますか？」
「一口貰いますね、先輩」
「香耶さん、では頂きます」

二人とも料理を口に入れる、って大和田さん、猫食いをやるのは良いけど一口で食ったほうが良いよ。

「おいしいですね、先輩！！」
「香耶さん、お料理上手なんですね……」
「でもさ……S組の食事って見た事ある？」
「聞いたくらいならありますよ、なんか豪勢なんですよね」
「そうなんだよ、でこれを見たらどうだい、地味だろ？」
「味は良いですよ」
「それが普通の反応なんだが味も見た目だけで決められてな」
「それで九鬼先輩は怒ってたんですね」
「そうなんだよ、別に質素でも構わんではないかと言っていたんじゃないか？」
「はい……予想通りです」
「じゃあ戻るか、あいつは俺やトーマの事に関しては怒るんだ」
「あの、香耶さんは九鬼先輩とどういう関係なんですか？」
「良くも悪くも頼れる友人……かな、あいつ自身は友達だといってくれている」
「先輩の交友関係ってどれ程ですか？」
「秘密だ…ね」

私が香耶先輩に聞いたら清清しいほどの笑顔？で返してきた、笑顔なのか分からない為、いい加減包帯を取ってもらいたい。

「そうですか、てっきり教えてもらえるかと」
「ハハッ、この俺が教えられるのは勉強と家事ぐらいのものさ、交友関係は教えられないな」

そう言って俺は１－Ｃから出て行って自分の教室に戻った。

「一体どこに行っていたのだ、キョーヤ！！」
帰ってきて早々出て行っていた俺を英雄が叱る、あずみさんはあずみさんで敵意を見せてるし……隠さずに言おうか。
「下級生と話をして居たんだ、親睦を深めないとな」
「なんだ、そういう訳か」
「英雄はいたたまれなくなり消えたと思ったそうですよ」
「トーマ、余計な事をいうでない！！」
「はいはい……英雄のしおらしいところが見れてよかったのですが」
「若、幾らなんでもからかいすぎだと思うぞ」
「あずみー、リラックス、リラックース」
「あぁっ、リラックスは出来るが葵の奴、英雄様を翻弄していやがると思うと怒りが込み上げてしまうぜ」
「流石の英雄も若には強く言えないからな」
「おい、トーマ、それ位にしておけ」
「おやおや、キョーヤがそう言うなら止めておきましょう、すいませんでした、英雄」
「とりあえずＳ組で悪口はいえないようにしておいた、全くＣ組の奴だからといって侮りすぎだ、知力が云々など、献立が云々など嘆かわしい！！」
「ウチで６９３点超えてるのって英雄の６９５と若の６９８だけだからな今の所」
「アレは私としたことが逆に深読みをしてしまいました」
「僕のＭＡＸは非公式で６６６なのだー」
「準、アレはまぐれだ、必死でやった所が出ただけだよ」
「そうは言ってもね……」
「とりあえず次は人間学ですよ、皆さん☆」
「そうですか……」

そう言って昼休みは終わった。
お弁当一つといえど真剣に怒ってくれる奴ら。
きっと俺は今が幸せなんだろう、そう思わずにはいられなかった。

授業が終わり、帰宅部のためのんびりと帰っていたら、河原で不良に絡まれる。
なんか奇異な目で見ているが、見た目のせいで絡まれるのは気に食わないよな。

「よう、兄ちゃん」
「俺達はな今腹が立ってんの」
「お金くれたらさ、見逃してあげるよ」
「嫌です、どいてください」

そう言ってど真ん中を歩いて抜けようとするが……

「無視して行くとか舐めてんの？」
「いやいや、金が無いからですよ、だったらね、どかないなら当たるけど抜けようって」
「ふざけんなよ、金ぐらいあんだろ、今の高校生はよ」

いやいや……あんたらも年近いじゃあないかと心の中で思いつつ言う。

「有りませんって、帰らせてくださいよ」
「ミイラのくせに生意気な言葉言ってんじゃねーぞ！！」
「ぶっ倒してそれ剥いでやんぜ！！」

もう我慢できなかったのか、拳を振り上げてこっちに攻撃をする。
こっちはやる気無かったけど相手が喧嘩売ってきたんだ、それ相応

に痛い目を見てもらうかな。

「遅い！！」
「なっ！？」
「『猛虎』！！」

遅い拳を平然と避けて大きく踏み込み掌底を放つ。
相手は自分が思っていた以上に早く放たれた一撃に気づく事ができずに昏倒する。

「えっ……」
「なっ、なんかコイツやべぇ！！」
「逃げろぉぉぉおおおお！！！！！」
「逃がさんよ……『蹴按』！！」

一撃で昏倒させた相手に恐怖したのか、逃げる相手にドロップキックを放つ。
と言ってもただのドロップキックではない、浸透勁を込めて放つ蹴りなのだ。

「えぼぉおおおおお！！！！！」

体液と言えば良いだろう、涙でも涎でも汗でも吐瀉物（としゃぶつ）でもないものを苦しそうに吐き出す。

「ヒィ！？」
「逃げても駄目と知れば、足が竦む……か」

蹴按で逃げた奴がやられてたのを目の前で見たんだ、そりゃあ逃げる気も失せるわな。

「ここまでやったけど俺と関わらないでくれますか？」
「はっ、はひ！！」
「もうやりません、許してください！！」

こっちは出来る限り優しい笑顔と声で話しかける。
まぁ、反応は想像通りだけれど。
連れの凄惨な状況を見ているためにどこか怯えた目で俺を見ている。

「こいつら連れて行ったら見逃しますから、お願いできますか？」

怯えたまま抱えて逃げる、良い判断だ。
ここでやられた恨みで逆上しても、よく考えたら自分達の立場と体が心配になる。
場をうまく収めるには自分の非を認め相手の要求を呑んでおく。
そうしなくてごねたら洒落にならない被害が起こる場合もあるもんね。

「さてと……こんなんじゃあ満足できない、少しは骨のある奴……あいつが居たな」

そして俺は喧嘩を売られたとはいえ、途中で戦意喪失されたために、不完全燃焼だった。
その為満足できなかった俺はある男に電話をする。
2回か3回ほど携帯でコールしたらその相手は出てくる、だるそうな声だ。

「おい竜兵、今夜は暇か？」

ある男とは竜兵の事だ、あいつと戦えば少しはこの物足りなさも無くなるだろう。

「香耶か……久しぶりだな」
「前回言ってただろう、電話をかけたって事は……分かるよな」
「俺と戦うって訳だ、どこでやる？」
「河原か親不孝通りで良いだろ」
「じゃあ待っているぜ」

夜……親不孝通り

「待たせたか？」
「あんまり待ってねぇ……」
「そうか……」
「包帯はどうするんだ？」
「外すさ、待ってくれ」

そういって包帯を外す、家以外の外気に当たるのはおおよそ1年ぶりだ、体は喜んで居る、開放される期待に脈打っている。

「始めようか……」
「良い面だ……お前は倒した後も楽しめる」

お互いが構える……といっても八極拳を使うなと本能が告げる。
まさかコイツには通用しないのか、それとも懐に入って接近戦が難しいのか。

ゴングは無く先に仕掛ければそれが始まりだ、まずは先に主導権を握る為に攻撃をする。
速い拳を突き出す、主導権を握ると言う訳ではなく、先に攻撃をし

ないとこちらとしてはむず痒くなってしまうのだ。
ガードをしてもそのガードが上手くないと上からでも十分ダメージになる。

「なかなか速いな、だが見えてる……」

しかし平然と左の拳を避けて右の拳でカウンターを放ってくる。
まぁ、出会い頭で喰らうようじゃ拍子抜けだがな。
腕が交差していくのが一瞬だが見えた、クロスカウンターである。
一気に決める気かよ、せっかちな奴だぜ。

「今のは良い反応だ…しかし、そのカウンターは甘い」

俺はそういって右のカウンターを避けてさらにそこへカウンターを叩き込む。
俗に聞く『カウンター返し（クリス・クロス）』という奴だ、タイミングはドンピシャである。
このまま竜兵を打ち抜けば終わるだろう。
そこを竜兵は叩きつける様に左腕の拳を打ち下ろしてくる、むちゃくちゃだろ、右腕が左腕を邪魔しているはずなのに。
お互いの拳が振りぬかれていく。
結果は驚きに包まれていた。

「ハッ」
「何だと……」

俺が壊すつもりで放った一撃を避けていた、同時に放ったというのに凄い反応だな。
どうやら体をそらして左の打ち下ろしを実現させたと同時に回避の判断をしたんだろう、勘か獣のような嗅覚か、どちらにせよこいつ

はそこらの不良に比べたらとても良い気分にさせてくれる。

「なかなかやるな」

「喋っている暇なんてあるのか、舌を噛むぞ」

竜兵が賛辞の言葉を投げかけてくるがお構いなく拳を放つ、コッチはしあいはしあいでも『死合い』の気持ちなんだぜ、勝負事での賛辞なんてものは勝敗が決まった後で良いんだ！！

「チッ！！」

不意打ちをヘッドスリップをして避ける竜兵。

コイツ、武術の心得が無いくせに無駄に良い動きをしてやがる、技術もあるじゃあないか。

「オラァ！！！」

今度はこちらは竜兵が攻撃してきた腕に、拳を当ててわずかに軌道を逸らして避ける。

お互いの攻撃は皮一枚を削るような戦いであった、八極拳ではないステゴロの勝負。

なんだ、コイツの獣のような気迫にあてられて、八極拳を使うなと、お前の何かを思い出せてくれると本能は言ったんだな。

今までこの１年の日常生活とは違う高揚感。

やっぱりお前と戦えて嬉しいな、俺の『優しさ』の皮をベロリと剥がしてくれそうでさ。

まだ始まったばかりの戦いにお互いが笑みを浮かべて構えなおした。

第１０話「小春日和の終わり、それを彩るは獣の狂宴」（後書き）

少しばかり遅くなっています、スイマセン。

第１１話「獣の棲家」（前書き）

八極拳を使えば良いだろという突っ込みは……その、すいません。

第１１話「獣の棲家」

喧嘩が始まってからの鍔迫り合い、普段ならクリーンヒットを望めるはずだが、なにしろ相手が相手。
武術などの総合的な物じゃあなく、ステゴロだけで見たらこの歓楽街を占めているだけの事はある。

「オラァ！！！」

最初は大振りだった攻撃も少しずつ修正してやがる。
避けられないように腰の回転を使い、脇をしめてコンパクトに振りぬく。

「フッ！！！」

拳を叩き落として反撃をする、避けてもフェイントなどという可能性もある。
こいつの引き出しの底が分からん、正直あのカウンターを避けるのは想像できてなかったしな。

「……もうやめだ」
「なにっ？」

なにやらボソボソ呟いている、何を言ってるんだ？

「こりゃ喧嘩なんだもんな……」
「ん……？」

息を大きく吸いこみ、そして……

「オオオオ！！！」
「ぐっ！？」

速度と力が段違いに跳ね上がる、コイツ……今まで俺の土俵に付き合っていただけか！？

「悪いけど死ぬんじゃねえぞ！！！！」

突進してくる竜兵、避けても無駄だろうな……

「ぐぅうううう！！！」

力同士をぶつけて突進を食い止める、成る程避ける、避けないとかいうのよりもシンプルな構図にしたわけか。

『強い方が勝って弱い方が負ける』、そこにルールは無い、ギブアップは自己宣告、すなわち殺す様なほど殴っている場合でも『聞こえない』と言い張れば良い。

突進を食い止めてそこから距離を取って再び拳を突き出す。
がテメェがそのつもりならこっちも土俵に誘い込むのはやめだ……

「はっ！！」

余裕の面で拳を避ける竜兵、でもこれはどうだ？
拳を横から縦にして顔面へ一撃。
さっきまでなんかボクシングみたいになっていたがこいつは喧嘩だ。
裏拳の一撃ぐらいどうって事はねぇだろ？
さらに間髪入れずに頭を下げて懐へと入った。

「ぐっ！！」

顔面へ良いのを貰って怯む竜兵、だが懐に入った俺は追撃をする。
屈んでいた頭を一気に上に上げて顎にぶち込む、ヘッドバットは効くだろ？

「がはっ！？」

よろめいて頭を下げた所へこめかみを爪先で蹴る、さらにヒザを顔面に。
完膚なきまでやってやる、やってやる、ヤッテヤル……

「オラァ！！」

顔面へさらにヘッドバット、これで終わるわけ無いよな？

「クソがぁあああああ！！」
「まだまだぁ！！！！」

立ち上がって来た所へ爪先蹴りを脛に叩き込む、さらに飛び上がってヒザから乗り上げて、顎へヒザをぶち込む、これでも足りないだろ？

「おらぁあああ！！」
「効かねぇよ！！！！」

拳を避けて距離を取る、こっちは完膚なきまでやるって決めたんだ。
悪いが1ヵ月～2ヶ月くらいは覚悟してもらうぜ。

「チッ！！」
「大振りだな！！」
右の拳を最小限の動きで避けて腹へと2発ぶち込む、さらに下がり際に脛とヒザに蹴りを叩き込んでおいた。
「この野郎……」
「ほうけている暇は無いってさっきも言っただろう？」
脳天直下に踵落としを決める、こっちは隙を見せない。
だって隙を見せたら戦場では死ぬからな、油断の果てに招くもの……それは隊長殿や部下を危険に晒す等あるまじき行為である。
「あぁ……ぐぐっ」
竜兵の奴は脳震盪を起こしているのか、立ち上がろうとするが足が震えている。
まだこっちの追撃は止まないけどな！！！！
「ハァッ！！」
腹に爪先蹴り、アバラにも蹴りを叩き込むが骨が折れたという手応えは無い。
「……掴んだぞ」
「チッ、全くしぶと……い！！？」
足に噛み付いてそれを支えに立ち上がる。
全く……死に体のくせにしぶといな……あいつの性格上開き直っているかもしれないし、こうなったらインファイトで勝負した方が良

いか？

「ガァッ！！！！」

「おおぶ……チッ！！」

脇腹を蹴ってきた。

無茶しやがって、もつれた足で蹴っても効く訳無いんだよ！！！

「ハッ！！！！」

「だから効く訳無いって……」

拳を突き出してくるが避けてカウンターで顎を打ち抜こうとする、

しかし……

「フェイントだ……」

「なっ……」

首筋に痛みが走る、マジかよ……よく見ると竜兵の顔が近い。

噛み付いてきていた、首筋に獣のような歯を突き立てている。

「……ギリギリだぜ、だがそれは愚策だ、竜兵」

噛み付いて離さないという事は『零距離』で受けるという事

こっちも踏み込むのは難しいが威力はアッパーでどうにかできる。

その威力を軽減する為の腕は、腰に回して離れないようにしがみつ

いている為、

ノーガードで受けなくてはならない。

「オラァ！！！！」

「ガッ！！」

まずは一撃、離れないなら離れるまでぶち込むだけだ。

「フン！！！」

「グゥ！！」

2撃目って相当深く噛み付いてやがるな、コイツは。

そのまま俺の首を食い飛ばす気かよ。

「ガアッ！！！！」

「ブハッ！！」

3撃目でようやく離れた、血が流れているが問題は無い。

「全く……深すぎだろ、噛み付くのがよ」

「が……ぐぐぐ」

急に離れたとかで歯が欠けたりとかは無いが、竜兵は今までの蓄積で顔の方は少し腫れているし腕や足には青痣だらけだ。

俺の方は首に噛み付かれたせいで肉が少し抉れた、あとは皮膚が切られたダメージが残っている。

しかし……今の今まで本気で殴って蹴ってこれとは本当に頑丈だな。

しかしもういい加減終わらせるか、殴ったり蹴るのには飽きたしな。

「行くぞ、竜兵！！」

「それはこっちの台詞だ！！」

「いや、おしめぇだぜぇ」

「「えっ？」」

「リアルで後頭部にチャー・シュー・メンだぜぇ！！！」
「ぐあっ！！！？」

チャー・シュー・メンって事はゴルフクラブで頭を打たれたのか？
後ろから接近してるのに気づかなかったのか？
隙を見せるとは俺もまだまだだな

「天！？」
「リュウの喧嘩に口挟んだり邪魔はしねぇけどな、遅いから亜巳姉が迎えに行けって言うので中断させてもらったぜ」

「くぁあああ、痛いじゃないかよ」

俺は頭を押さえて天ちゃんを見る、幾らなんでもこの乱入はきつい。

「お前、気絶しないのかよ……ってお前誰だよ？」
「香耶だ、包帯取ったんだよ」
「へぇ……そんな面だったのかよ、それにしても良く大丈夫だったな」
「天ちゃん、悪いが俺は頑丈だぞ」
「たっく、せっかく良い所だったのによ」
「負けかけてたじゃねーか」
「俺はああいった血にまみれてからエンジンが掛かるんだよ！！」
「竜兵、また今度やろうぜ、それで今日の所は良いだろ？」
「そうか、それなら良い、こんな不完全燃焼でお預けなんて辛いからな」
「お前も家に来るか、そう言えば亜巳姉には会った事無いだろ？」
「良いのか？」
「俺が許可する、来い、『イロイロ』と話をしようじゃないか」
「お前……その顔で笑顔はやめとけ」

「ちなみにリュウはガチホモだからな、あまり気を許すなよ」
「ガチホモは呼び方として駄目だ、ゲイの方が良いよ。それにそれでもコイツはコイツだからな、今更改めた接し方はしないよ」
「ウチの忠告聞いといた方が良いんだけどね、まぁ良いか」

そんな他愛も無い話を聞いて川神新町……工業地帯に向かう。

「おいおい、こっちだぞ、そっちは違うぜ」
「満月か…」
「その様だな」

思いはある……狼男が満月で狼になるように今日の俺たちは特別なまでに獣になったのだろう。
血が滾り、『仁』を失くし一方的に嬲った俺は、きっと他人から見ればこの竜兵以上に獣に見えただろう。

「こんなにも月が綺麗だと感じたのは、久々だ」
「あっ！？、何言ってんだよ、似合わないぜ！！」
「俺は……いや、そうだな、こんな事をいうのは似合わない」
「天、香耶、早く来いよ」
「この満月の光を少しでも見ていたい、それに少し電話する」
「そうか、早く来ないとどやされるぞ」
「わかってるさ、ちょっと待っててくれ」

そうだ、よくよく考えたら時間によっては出会い頭でタッちゃんや朝早く行動してる一子に会う可能性がある。
ちなみに一子の朝の行動が早いのを知っているのは、3年の先輩からの情報である、確か名前は矢場弓子（やばゆみこ）だったと思う。
早く切り上げてかつ顔を隠すように帰らないとな、気をつけようか。

「お邪魔します……」
「あれ～、梅屋で会った子だ～」
「おやおや、天と竜兵が連れてくるなんてあんた何もんだい？」
「紹介すんな、こっちが亜巳姉」
「タツ姉には前に会ってんだろ？」
「どうやら覚えてたみたいだな、竜兵」
「とりあえず仕事が有るし、ゴハンにしようか、タツって……」
「Ｚｚｚ……」
「ヤバイ、寝たら飯が！！」
「起きろ、タツ姉！！」
「仕方ないな……冷蔵庫借りるぞ」

そう言って冷蔵庫に近づきあける、招かれたんだから少しぐらい手伝うかね。

「何する気だよ！？」
「料理だ、料理……中身は卵とネギとハム……ご飯はあるな」
「あんた料理できるのかい？」
「一応出来ますよ、材料見たらチャーハン作れるんでやって良いですか？」
「タツが起きる間の時間が惜しいし頼むよ」

そう言って俺は中華鍋を出して油を引いたままから焼きをする、煙が出て来たので……卵を入れる、そして一気に振る、ご飯を入れる、刻みネギとハムも入れて一気に強火で炒める。
その間に卵スープを作っておいてと……

「ハイハイハイッ！！！」
「乗ってんなぁ、あいつ」
「って振るの速過ぎんだろ、ウチはタツ姉がチャーハンやる時見て

たけど、あいつより早くなかったぜ」
そしてチャーハンが出来上がる、焦げもなくパラパラだ。
スープの方も良い温度だ、さて持っていくか。

「出来たぞ～」
「速いな、3分とかカップラーメンだろ」
「ウチ、もうおなかペコペコだぁ～」
「気にせず食って良いさ、スープも持ってくるからな」
「辰、起きな、ご飯だよ」
「……ん～、良い匂いだぁ」
「頂きまーす」
「香耶の手料理か……食うのが勿体無い」
「作ったんだから食えや、コラ」

竜兵がふざけた事を抜かしたので怒る、天ちゃんとか食ってんのにお前は何が『勿体無い』だ、作った物は食えば良いんだよ、冷める前に食えよ、この野郎。

「ばくばく……」

亜巳さんの食い方は年長らしくそれなりに綺麗だ……まぁ、ワイルドな食い方と言えば聞こえは良いって感じの食い方だけどね。

「もぐもぐ」

マイペースに食べているのは辰子さん、綺麗だけど時間が掛かりそうだな。

「うめぇうめぇ、このチャーハンうめぇ！！」

天ちゃんは天ちゃんで美味しいと良いながらがっつく、喉に詰めるよ、そんな食い方していたら。

「喜んでもらえて何より……って竜兵、皿を空にするの速すぎだろ」
「…おかわりないのか？」
「ねぇよ！！」

そんな感じで料理を食い終わったあと俺は洗い物をやる。
ワイルドって言うか獣じみた食い方してるけど綺麗だな……皿。
ちなみに飯を食い終わって、竜兵は風呂に入っている。
天ちゃんはゲームをしていて辰子さんはそれを見ている。
亜巳さんは仕事だといってたから準備のようだけど、鞭を使うような仕事ってなんだよ？

「天ちゃん、もうそろそろ寝たらどうだ？」
「何言ってんだ、丁度良いところなんだぞ！！」

反論されたよ……成長する為の睡眠時間を削るのは関心できないな。

「あ～、私がやるよ～」

そんな事を思っていたら立ち上がって辰子さんが手伝うという。
しかし誘ってくれといてそれは嫌だからな。
毅然とした態度で示して座らせておこう。
さっきまで天ちゃんのゲームを見てて気づかなかったのか、天然なのかは分からないが、なんだかマイペースな人って感じがする。

「辰子さん、良いから座っててください、折角なんですからこれ位しますよ」

「男なのに家事が出来るとはな……女々しいのか？」
竜兵の奴が風呂から上がってそんな事を言ってくる。
良いからお前は前を隠す心ぐらい持て、少し見えてるじゃないか。
「竜兵……違う違う、ただ親父が教えてくれていただけだ」
「父親居るのかよ、ウチらより恵まれてんだな」
天ちゃんがそんな事を言ってくる、無論ゲームをしながらだ。
話を聞くときぐらい顔をこっちに向けてくれよ。
「天ちゃん誤解だぜ、父親といっても育てた方だ、産んだ母親と父親は俺を孤児院に預けてオサラバさ」
「へぇ……赤ん坊で捨てられるとはあんたもなかなかだね」
亜巳さんがそんな事を言ってくる。
鞭の次は着替えを用意しているけど本当に何の仕事だよ。
それに仕事前に飯食ってたけど大丈夫かな？
「亜巳さん、その育てた親父も親父で家から見放されていたそうですよ」
「ハハハッ、何をやらかしたんだよ、そのオヤジ」
「５０人近い不良を一度にとか、プロボクサーボコったりとか、喧嘩三昧だったせいで手に負えず、帰ってくんなって言われたらしいです」
いきなり爆笑された、仕方ないよな。
人育てる立場である男が実は自分達と同じ過去抱えてたってわけだ。
「結局どうなったんだよ、その喧嘩三昧の日々は？」

「竜兵、それがある男との戦いで両手両足折れたんだってよ」
「どんな相手なんだよ、それ？」
「天ちゃん、なんか幽霊が乗り移ってたらしい、『死んでも戦いたい』って気持ちがあったんだってさ」
「親父さん、見えるのか？」
「かなりな、１４人ぐらい見えてたってさ」

そんな感じで談笑を終えて時間を考える。
どうやら亜巳さんも仕事みたいだし丁度良い頃合だな。

「もう帰ります、すいませんね、突然来て」
「そうかい、なかなかあんたの料理美味しかったよ」
「それにしてもここは親不孝通りより治安悪いですね」
「その代わり家賃は安いのさ、確か４万５千円だよ」
「俺の住んでる所なんて１万５千円ですよ」
「安いね、電波は通ってるかい？」
「はい、通っていますよ」
「じゃあ住んでる人たちはどうだい？」
「なかなか気前良い人たちですよ」
「なかなか良さそうだね。今度見に行こうか、案内頼むよ」

案内を頼まれた事と賛辞の言葉を貰って俺はカラスが支配する前に家路へと向かった。

その頃……深夜の月雄荘で

「電話はありがたいのですがね……どちら様ですか？」
「君が逢間長枝か、深道という男から聞いているが君は血気盛んだな、声で分かるよ」
「名前は深道から聞きましたか、そして貴方は深道と一体どういう

仲ですかね？」
「ギブ　アンド　テイクを超えている友人だ、私は有能な人間が好きでね」
「そんな人が何で俺に？、残念ながら俺は深道に比べれば無能ですよ」
「馬鹿なことは言うものではない、世界の九鬼財閥と日本でも有数の大病院である葵紋病院とつながりを持ち、自分は世界中の格闘界で神話として語られているというのに」
「そこまでばれているんですか……深道が貴方に教えましたか？」
「あぁ、彼の情報と私の頭脳、そして君の武力があれば楽しい事ができると思ってね」
「楽しい事…ですか？」
「深道が教えてくれたかつてのストリートファイトランキングを復刻させる事さ」
「『深道ランキング』を？、でもあれは……」
「世界で中継をするんだ、ワールドワイドでね」
「それで俺に電話って事は、場所は武士が集まる川神を基点にする気ですか。深道の奴が、俺にその話を持ちかけた時は近々と言っていましたがね、あいつの行動力にはいつも舌を巻く」
「正解だ、学生有志のランキング、川神学園を舞台に世界へ配信、中継、ブックメーカーぐるみで賭博もさせる」
「儲ける算段がないと成り立たない……勝算はアリですか？」
「当然だよ、私の頭脳でそれらを成り立たせて、エンターテイナーとして深道が良い戦いを取り付け、不正や八百長を君が日本で取り締まる、これで十分なんだよ」
「アレから１１年、成功したら熱狂する人が来るかもしれない……楽しい祭りの始まりですね」
「その通りだ、計画の名前は……『ランキング・オブ・リヴァイヴァル』、和訳すると『復活のランキング』…ありきたりだがこれが良いかもな」

「確かにそれ位シンプルな方が良い、で、貴方の名前はまだ聞いていないんですけど」
「私の名前は直江と言う、直江大和の父親だ」
「成る程、確かに知略は強い、親の影響ですかね」
「そういったところだ……では切らせてもらうよ、また話をしようか」

そう言って切られた電話ってどうやら国際電話だったようだ、気にも留めなかったけど。
面白そうだが……どうせお前の事だ、なにかしら裏の目的でもあるんだろ、深道。
俺は少しばかり疑いながら寝る事にした。

第１１話「獣の棲家」（後書き）

喧嘩商売の石橋さんでもないと痛みを力とか無理です。
Ｍの境地とはあれなのかもしれません。
サイトを調べたら大和の両親が出ていましたので出しました。

第１２話「五月晴れの決闘」（前書き）

今回から5月、そして旅行後の設定なので5月6日になっています。

第１２話「五月晴れの決闘」

竜兵との喧嘩から1週間も経った事である。

「お前、いい加減包帯外せよ」

「準、別に外さなくたって良いじゃあないか」

包帯の事について今日も準と論議。

準もだんだん外せよと思ってきたようだ、トーマと英雄は別にいいみたいだけど。

そんな時着物を着た女の子…まぁ、ぶっちゃけ不死川さんだが教室に入っていきなりトーマに頼みごとをする、正直トーマは人選ミスだよ、英雄の方が良いよ。

「葵くん、どうにかしてやりたいのじゃ！！」

「おやおや、不死川さん、どうしたんですか？」

この顔からして勝負事だ、そして昼休みって事は賭場だな。

「賭場で負けたって所じゃあないのか、トーマ」

「逢間、鋭いのう、その通りじゃ！！」

「いかさまされたかもね、ざんねーん」

ユキがそんな実も蓋も無い事を言う、まぁ正直警戒心も出さずにやっていたら食い物にされるのは確実だろうね。

「というかそういう時に限って、直江が居るだろうに。その状況で勝負するのは間違いだろ……」

準が言うように頭の回る軍師がいたら危ない、俺だって万が一勝負なんてあったら少しの備えはするつもりだ。

「黙れ、ハゲ、此方が山猿相手に逃げるなど恥じゃ！！」
「その結果まけてちゃダメだよー」
「うるさいわ！！」

ユキが再び実も蓋も無い事を。
しかし正論ではある、引いた方が良いのに引かずに負けたら格好がつかない。

「で……不死川さんは具体的にどうして欲しいんですか？」
「あの島津とか言う奴に一泡吹かせてやりたいのじゃ！！」

ガクトか……まぁ、八極拳使えばあっという間なんだけどね。

「いや、だから具体的にどうする気だよ？」
「戦闘による決闘じゃ！！」
「直江の策に島津の力……結構めんどいな」

準がいうようにガクトの力だけならまだ戦えても、大和の策が加われば勝算は低くなる。

「そうですね、準。キョーヤ……この願い引き受けられますか？」
「残念だが無理だ、今日なんだろ？」
「そうじゃ、速くやっておかねばＦ組の奴らが増長するからの」
「今日じゃあ無理なんだよね、俺丁度その時間に決闘あるんだよ」
「なぬっ！？」
「実は昼休みの時また１－Ｃにいってな、そこで……」

回想シーン始まり……

「キョーヤさん今日もお弁当ですか？」
「そうだよ、由紀江さんのお弁当も美味しそうだね」
「私のなんてまだまだです、男でここまで出来るキョーヤさんが凄いです！！」
「まゆっちはキョーヤ先輩によくなんか言ってるよね～」
「伊予ちゃん、だってそれは年上ですし……」
「どちらかといえば俺が尊敬した方が良いんだけど、どうも低くなられてそれが出来ない」
「そう言えば先輩はまゆっちとどういった関係なんですか？」
「それは……その、えっと」
「命の恩人……かな」
「えっ！？」

そして俺は過去を話し始めていく。

「アレは忘れもしない去年、桜が満開の3月だった…新しく高校生となるために川神へと戻る俺は、3年前から滞在していたドイツからの帰国途中」
「ドイツに行ってたんですか、先輩！？」
「少年兵士でドンパチしてたんだ、で続きな……いきなり飛行機が高度を失い墜落してしまったのさ、その時に生き残ったのはただ俺一人」
「それで体がこうなったんですか？」
「その通り、爆発や炎が燃え盛る中で俺は這いずりながらも命からがらであったが抜け出した」
「先輩、それはそうとまゆっちいつ出て来るんですか？」
「丁度今だよ、幸い北陸地方での墜落であった為、近くの林で鍛錬をしていた由紀江さんが速く、俺を見つけて保護してくれたんだ」

「それで先輩はまゆっちと顔見知りに……まゆっち、怖くなかった？」
「大丈夫でした、それに放っていたら死にそうでしたし」
「この人のおかげで今の俺があるわけだよ」
「そうですか……まゆっち凄いね」
「伊予ちゃん、別に凄くありませんよ、当然の事です…いてっ！？」
俺は謙遜する由紀江さんの頭を小突いた。
「先輩！？」
「全く……いい加減謙遜はやめろよ、由紀江さん」
そう言って胸倉を掴んで持ち上げたまま一喝。
「あんたが救ってくれなかったら今俺は此処にいない、あんたがいたから俺は生きてる、あんたにとって普通の事や些細な事でも俺からすれば十分な事なんだよ！！」
「キョーヤさん……」
「だから…礼ぐらい言わせてくれ……お願いだから」
「先輩、降ろしてあげたほうが良いと思います」
「あっ、あぁ……すまない」
「その、気持ちが分からなくてすいません……」
「落ち込まないでくれ、そんなつもりじゃなかったんだ、俺が言いたいのはな、つまりは……だから胸を張ってりゃ良いんだこんな風に！！！」
そう言って腰に両手当ててふんぞり返るようにたつ、いやはやここまで張る必要も無いんだけどね。
「ははは……ちょっと頑張ってみます」

「先輩はまゆっちの事を気にかけているんですね」
「そりゃあね、俺はどうして良いか分からないけどこの人に恩を返したいんだ」
そう言って席に座るときに由紀江さんの肩をたたく。
その時扉が開いて入ってきたのは……
「1－Sの武蔵小杉か……」
「知っているんですか、先輩？」
「前も言ったけど全員把握しているんだって、名前も顔も」
「初めまして、逢間先輩」
「どうも……何かただ事じゃあないようだね、その目を見ると」
「貴方は恥ずかしくないんですか？」
「何がだい」
「S組という特別なクラスなのに、普通極まりないC組に出入りして誇りは無いんですか？」
「逆に聞くが、誇りなんてもので人との繋がりをどうにかできるのかい？」
「それでも守るべき一線はあるでしょう」
「それはなんなんだ？」
「劣等とまじわらないって事ですよ、先輩」
「お前……人を貶めるのはどうこういっても仕方ないが言うに事欠いて劣等だと？」
「そうです、貴方と友達でいようとする九鬼先輩や葵先輩の頭を疑いますよ」
「テメェ……」
「端的に言うと貴方1人がS組の恥をさらしているんですよ、先輩」
そう言ってワッペンを叩き付ける、川神名物『決闘』か。

「どうせやる勇気も無いんですよね、せんぱ……」

間髪入れずに叩き付ける。

「あとでごちゃごちゃ抜かすなよ、お前は俺を怒らせたんだからな」
「キョーヤさん！！」
「香耶先輩！！」
「ふふ……威圧しようたってこのプレミアムな私には通用しないわ」
「ルールはどうするんだよ、何がご希望だ？」
「『戦闘』による決闘でいかせて貰いますよ、先輩」
「OK、ルールは先生方に伝えとけ」
「はい、S組に相応しくないって事、無様にも這い蹲らせてやりますよ、先輩」

そういって武蔵が出て行く……おっと、包帯で見えてないけど凄い顔になっていたかもしれないな。

「先輩、幾らなんでも頭に血上らせすぎなんじゃ……」
「大和田さん、俺はね……自分の悪口は許せても友人の悪口は許せない口なんだよ」
「でも一年生をしめているんですよ、それに先輩って強いんですか？」
「黙秘するよ、時間取らせるしね」
「キョーヤさん、それで勝算は？」
「由紀江さん……無くたってやる、売られた喧嘩を買った以上、腰抜けの決断はしないさ」
「でもその体ではまともに戦えないんじゃないですか？」
「心配無用さ、それに相手が売ってきといて断ってもまたなんか流布されそうだしね」

「だからってやるんですか？」
「そりゃね、それに断ったらここで飛び火するかもしれない。そうなったら由紀江さんと大和田さんにも迷惑だろ？」
「それで自分がやるなんて……」
「一応どうにかなるでしょ、止めてもダメだよ、受けちゃったし。仮に止めたとしても止まらないけどさ」
「それなら止めませんけど、くれぐれも気をつけて」
「大丈夫、大丈夫」

そう言われたあと、俺は軽く返して１－Ｃから出て行った。

回想シーン終わり……

「という訳だよ、分かってくれたかな、不死川さん？」
「分かったのじゃ、しかし勝てるのか？」
「トーマがいる前だから言う、勝つよ」
「おやおや、私の前ではとは嬉しいですね、特別扱いですか？」
「そう考えて構わない」
「武器有りかよ……使うかわからねーし卓越してたらしてたで、厄介なんだから武器無しが良いのにな」
「使わないと踏んでいるんだろ、それか自分が使うためだな。そりゃ何かしら嗜んでいる奴が多いこの学校で武器使うのなんざ一握りだろ、それに俺も川神一子ぐらいしか有名な奴知らないぞ」
「で……目下、不死川の代わりに決闘やる奴か、俺かユキなんだがな」
「僕は嫌だよ、準がやったほうが良いんじゃない？」
「俺も今回はパス、正直忙しいんだよ、今日は」
「なんじゃなんじゃ、此方の頼みを聞く事はないのか！？」
「そうだな……仕方ねぇ、俺がＷヘッダーで出てやるよ」
「キョーヤ……病み上がりで良いんですか？」

「なーに、1年相手に時間かけなきゃ十分さ」
「待てよ、キョーヤ……今丁度手を上げた奴が居る」
「えっ、誰？」
「そういやS組と面識無いから分からないか、あそこで本呼んでいる奴さ」
「アレは確か……港って奴じゃないのか？」

そう、俺は面識はないが名前は覚えている。
1年生の時からのS組でガタイも悪くない、空手をやっていた過去を持っていて現在は小西さんから教えてもらっている奴だ。
そんな港君の前に座り一言。

「急な話だけど引き受けて良い訳？」
「何がだい、僕は井上と違って今日用事は無いよ」
「そうか、別に無理はしなくて良いんだぜ」
「別に無理でもないよ、なんでそう思うんだい？」
「この一ヶ月あんまり見ては無かったけどこういうのに乗るタイプではないからな」
「羽目を外す時もあるさ」
「そうか、クラスメイトである不死川さんの頼みだ、どうにかしてくれ」
「当然。君にいわれなくてもやるよ」

「お前ら何二人でいい気になっているんだよ」

そんな風に話していた俺たちに後ろから話しかけてくる、テニス部の仲村君か。

「何でってそりゃ俺の代わりに不死川の試合をやってくれるって言ってるんだぜ」

「港がやるくらいなら俺がやってやるよ」
「黙れ、アホ、君が島津に勝てるとか思ってるのか？」
出来るだけやさしく、しかし侮蔑の意味をありったけ込めて言ってやる、多少トーンが変になったが問題はない。
「なっ、テメェ！」
「俺は港君に頼んだんだ、お前のような奴に頼んだんじゃない、お前じゃ島津を倒せない」
「お前、ナメてんのか！！」
わざわざ回るのをめんどくさがって机から乗り上げるようにして殴ってくる、馬鹿だな。
そんなぬるい攻撃じゃ俺を倒せない、ガクトなんてもってのほかだ。
その拳を受け止めて引っ張って顔を殴る、人中に最速で拳を叩き込む。
竜兵と比べても雑すぎる攻撃だ、防御面なんざ紙のよう、回避できないならできないなりにガードしたら良いのに、今の一撃でもうグラグラしてるしトドメさしますか。
こめかみに机を経由して机をヒザに例えてシャイニング・ウィザードを叩き込んだ。
仲村君はその一撃でうつ伏せに倒れこんだ、全然本気じゃあないのにね。
「悪いな、港君、見苦しい所を見せた」
「あっさりと倒しちゃったね、残念だよ」
「偶然だよ、それともそっちも羽目を外す前哨戦をやっておきたかったか？」
「いやいや構わないさ、あと僕のことを君付けで呼ぶのやめてくれる、港で良いよ」

「放課後で多分そっちの試合が先だと思う」
「先ってことは、君もグラウンドで戦うって事かい？」
「派手に勝った所を見せたいんだろう、負けたら赤っ恥なのに」
「ハハッ、有り得る話だね、そう言えば時間の方は、どうなってるのかな？」
「放課後ですよ、港君」
「トーマ、気配を消して近づくな」
「葵、どうもありがとうな」

それだけ伝えてトーマは席に戻る、お前は一体何がしたいんだ。
時計見たら……あぁ、５時間目が始まる前に自分の角度から見えるように話しかけたのか、さすがだなトーマ、だがそういうことは素直に言え、『女心をくすぐる方法ですよ』とかの返答はいらないから。

「とりあえず、先に島津の試合は頼んだ」
「分かったから戻らないと、人間学の授業が始まるよ」

宇佐美先生の授業は今日は税務署関係の話であった、父さんからも抜け道はあるんだと教えてもらっていたから良く分かった。
副業で２０万以上か……可能性はあるな。
宇佐美代行センターは今日の所は休業らしい、どうやら年配が中心の仕事が多いようだ。

そんな事を帰宅準備をしながら考えていて、俺は5時間目終了時に今回の決闘担当であるルー先生に武器のレプリカの使用を許可してもらった。

拳を使うのは奥の手だ、幾らなんでも井の中の蛙に本気でやる必要はない。

モロでも流して勝てる、ユキなら凄惨な状態にされる。
その事を考えたらできるだけ良心的に事を済ませようとしているわけだ。

そしてグラウンドで決闘の用意がされていた、俺は2戦目だけどどうもこの熱狂が俺は慣れない。
ユキの様にプロレスの試合とかやっていたら良いんだろうけどね、基本マンツーマンだったから歓声は聞こえなかったし。
そんな事を思いながら俺は俺でグラウンドの後ろの方で観戦する。
いやー、こうしてみたらやっぱりガクトはでかいな、１８８だったか身長、筋肉の搭載も考えたら体重は１００キロオーバーってところだな。

一応ルールはこんな感じだ。

2分3ラウンドの、判定なしで時間切れは引き分けとなる。
オープンフィンガーグローブの着用と、武器になる道具の使用の禁止。
目潰し、喉突き、金的蹴り、噛み付き、脊椎への攻撃の禁止。
ダウン後にカウント5で立ち上がれない、戦闘続行不可と審判が判断したら敗北。
ギブアップもアリで、明らかに戦意を喪失している場合などはＴＫＯ扱いで敗北。

以上が本決闘でのルールだ。

俺の決闘はここに変更が加えられている。
時間は無制限勝負で武器とオープンフィンガーグローブありというルールである。

うん、なんてルールだ、最高じゃあないか。

目潰し、喉突き、金的蹴り、噛み付き、脊椎への攻撃はダメでも『首を絞める』のはＯＫだろ、脳天直下への攻撃ありだろ、女だから金的蹴り無いから正中線を思い切り蹴り抜ける訳だしね。

さて……お手並み拝見なわけさ、港。
空手していて柔術をしている、どれ程の腕前なのかな？

リーチはガクトに分があるがガクトは多分柔術使いという事まで頭が回っていない、なぜなら名前負けしているから。
打たれ強くても関節は鍛えられないしね、まぁ打撃だけでもどうにかしようとするその構えだけは良いと思うよ、何の対処もなくやるよりかはね。

「両者、前へ！」

学園長、いつも思うんだろうけど大丈夫なのかなぁ。
こんなに力んで声上げると体に障るんじゃあないだろうか。。
いや、いかんいかん。
集中集中、観戦しなくては、観戦する事に集中だ。

「２－Ｆ、島津（しまづ）　岳人（がくと）！」

「２－Ｓ、港三千尋（みなとみちひろ）」

元気だなー、あいつ。
対照的に港は自然体だ、それともガクト位じゃあ本気を出さなくても勝てるという自信の表れか？

「では、始めぃ！！」

開始早々俺は信じられない光景を目の当たりにする。

待っている？、あのガクトが？、先手必勝とか言ってガツガツ攻め込む気性のあいつが？

ファイティングポーズの構えをして顔面をガードしている、秒殺とかそういう壮言大語をはいていても勝ちに行っている。

フルコン空手の攻撃を防ぐ為に大和が入れ知恵したか？

フルコン空手は近接の間合いからの攻撃とコンビネーションはすさまじく発達している。

港は港で待っている状態からあからさまに体勢を低くした、成る程ね、迷いを誘ってその隙をって訳か。

その方法はガクトには通用するが、それが通用しない奴がこの学園に何人いることやら。

俺はそんな事をされたらされたで成功するかは分からないが一気に踏み込んで一撃で仕留めに掛かる。

踏み込む動作に要する時間はその低くする間の時間で十分だからだ。

正直港の方は引き出しはまだあるだろうけど、俺の方もまだ本気をこの決闘で見せる気はない。

いつか戦うかもしれない敵に見せたくはない、『あの人』に出会うまで『本気』で戦いたくはない。

タックルじゃなく相手の懐にスライディング気味に入ってポジションが変わる。

港が下、ガクトが上。

更に言えば、ガクトの右腕には、もう港の左足がフックされてる。

あとは、ほら、そのまま引き込めば……

「あだだだだだ！、ギブ！、ギブアップ！」

ほら、関節が極まってしまった。
ガクトが上、港が下。
お互いうつ伏せになった状態で、港はガクトの右腕に十字固めを極めている。
俺は関節技をあまり知らないが『引き込み裏十字固め』って言えばいいのか？
ま、そんなよく分からん感じの技が、完璧に極まった。
今日帰ったら小西さんと快気祝いに組み手しようかな、不意に関節技使いとやりたくなってしまった。

「そこまで！」

その声を聞いて、港はガクトの右腕への拘束を解いてやった。
元から怪我させるつもりもなかったようだし、ちょうどいい頃合だ。
無理に粘ったら、そのままへし折るつもりだったかもな、俺ならばそうする、誰だってそうする。

「勝者、港三千尋！！」

学園長が、先ほどよりも一層大きな声で宣言した。
……あ～、これで次は俺か。

「先輩、吠え面かかせて上げますよ」
「お前みたいにそんなこと言ってるやつが負けたら一番恥ずかしいんだ、根拠も無い事は言うなよ」
そう言って俺はレプリカを持つ、いやー、この学校なんでもあるも

んだな。

「先輩は武器使うんですか、情けない……」

「別に良いだろ、武器使うのは悪い事か？」

「そんな事有りませんけど勝っても武器があるから勝ったって言われますよ」

「禁止してないルールが悪い」

試合前から武器の有り無しで情けないといってくる武蔵。

いやいや拳を使えば一撃で終わるだろう、今は見せたくないんだよ。

「両者、前へ！！」

「２－Ｓ、逢間香耶（おうまきょうや）！！」

ガクトが驚愕する、無理もないか、世間の上では死んでる人間だもんな。

「１－Ｓ、武蔵小杉（むさしこすぎ）！！」

「キョーヤは武器を使っているガ武蔵は要らないのかイ？」

「要りません」

「そうか、では始め！！」

「タンマだ」

始めと言った瞬間、俺は手を前に突き出し『待て』の仕草をする。

「なっ！？」

「包帯外させてくれよ、良いだろう？」
「くっ、ふざけないで下さい！！」
「良いのか、包帯は動きを鈍くさせる、お前が勝っても包帯のおかげで勝ったと言われるぞ」
「ムムム……」
「それとも了承した後騙しうちで倒そうって腹か？……情けない」
「分かりましたよ、先輩、外せば良いじゃないですか、それでもプレミアムな私が負けるとは思いませんけど」

さっき言われた事を嫌みたらしく返す、了承しているんだし外させてもらおうかな。
俺はスルスルと取っていく、力任せに引きちぎっていったりして取った。

「待たせたな……武蔵」

そう言って振り向く、いやはや1週間ぶりの外気だぜ。

「先輩……そんな見た目だったんですか？」
「まぁね」

黒いポニーテールに切れ長の目。
イケメンかといわれたら自覚がないのでなんとも言えず。
ただ他人はそう思っているようだが。

「さて、八極拳の槍術…六合大槍でやらせてもらおうか！！」

「では、再び始め！！」

一気に駆けて突きを出す、最速で最短距離での攻撃。

その狙いは腹と人中。
喉が突けるならラクなのだが反則の為それはできない。

「くっ！？」

武蔵の奴は避けているがこの長い射程に対応し切れていない、さて…速度上げるか。

「シェイヤァアア！！！」

吼えて再びの突き、縦横無尽に隙あらば反則でない場所を貫くであろう怒涛の攻撃が放たれる。

「くっ！！」

腕だけでは防ぎきれずに転がって避ける武蔵。
どうやらコイツに有効なのは質より量なようで霰（あられ）のような突きには反撃が出来ないらしい。
転がっている武蔵の顔を突き刺すように振り下ろす、まぁ当てて反則負けなんて事はしない、只のこけおどしだ。

「ヒィ！？」
「おいおい、どうやら俺じゃなくてお前の方が這い蹲ってしまったな」

動きを止めて地面で静止した武蔵に向かって、意地の悪い笑みを浮かべて言葉をかける。
いやぁ自分がやられる立場とは思ってなかったんだね、愉快すぎるよ、全く。

その頃グラウンドでは風間ファミリーが思い思い呟いていた。

「あれ、キョーヤじゃねぇか！？」
「キャップ、見間違いかもしれないよ」
「モロロ、だけど足元に包帯があるぞ」
「じゃああそこに居るのは本物で、もしかしてミイラの正体は香耶だったって訳！？」
「そのようだな、モモ先輩、なんか笑ってないか？」
「ガクト、そりゃああの槍捌きみていたら少しは興味がわくだろう」

グラウンドでの決闘は続くが一方的である、避けられないから遠い距離を取ろうとする武蔵。
それを必要以上に追わずに突きを繰り出す香耶。
この戦いに格と言うものがあったなら誰の眼から見ても一目瞭然だっただろう。
格上は香耶である、格下は武蔵。
回る様に遠ざかりちまちま攻撃を仕掛けるが……

「はっ、やっ、ていっ」
「また、いとも簡単に……」

捌くぐらいはできる、悪いが2流とは言え1年に負けるほどやわじゃあないんだぜ。

「さて…と観客も揃ったしそろそろ……」
「えっ？」
「やりますかねェ！！」
「なっ！？」

その瞬間、グラウンドに一陣の風が吹く、俺は疾風のごとく接近す

る、そして……

「蜂の巣にしてやる！！！」

今までと比にならない速度と多さの突きの前に武蔵はなす術がない、転がって避ける隙も与えられなかった。

「きゃあああああっ！！！」

何発目か分からないがモロに突きを食らって吹っ飛ぶ、さてダウンだけれど戦意はどうなのかな？

「無理ダネ！」

そう言ってルー先生が両手を交差する、ＴＫＯの様だ。

「脳が揺れて立てそうにもナイよ」

「そうですか……あっけない終わり方ですね」

どうやら武蔵の奴は脳震盪を起こしてしまったようだ、反則箇所以外に攻撃したが頭にも衝撃いったか。

「勝者、逢間香耶！！」

立てない武蔵を尻目に勝者の宣告を受ける、さて帰るか。

「キョーヤさん、お疲れ様です！！」

帰ろうとする俺に由紀江さんが話しかけてきた。

「由紀江さん、見に来たんだね」
「いえ、私はガクトさんの決闘を応援に……」
「そうか、残念だったね、でどういう関係なんだい、ガクトと？」
「風間ファミリーの一員になりましたから、それでですよ」
「何だと！？」

風間ファミリーだと、なんでだ、大和はあの言葉を破ったのか！！

「ヒッ！！？」
「大和はどこに居る！！！」
「あっ、あの……」
「話さないといけない事ができたじゃあないか！！」
「お兄ちゃん？」
「ユキ、俺についてきてくれ！！」
「そっ、その……」
「まゆっちが驚いてるだろうが、キョーヤ」
「キャップ……大和はどこに居る？」
「今頃寮に帰っているだろ」
「だから寮はどこなんだよ！？」
「怒りすぎだよ、ちょっとクールダウンして」
「モロ……」
「その様子だと飛行機の墜落事故から助かったようだね、良かったよ」
「悪かったな、姿を見せても信じてもらえるような見た目じゃあないから会えなかった」
「私も居るぞ、キョーヤ」
「モモ先輩まで……観戦ですか？」
「まぁ、そんな所だ。キョーヤ、お前が槍を使えるとは驚いたぞ、少し戦ってみたくなるな」
「モモ先輩、変わらないですね」

「とりあえずは家に帰ろうぜ、俺様は腹が減った」
「ガクト、相変わらずマイペースだな」
「キャップ、クリスとワン子は？」
「確か京と一緒に勉強させられてるぞ、ワン子は」
「クリスは寮に帰っているしな」
「凄い形相になって怖かったです、あうあう」
「すまなかったです、はい」
「とりあえず大和に話があるって事で良いんだな？」
「スマン、キャップ」
「でもなんでなの、大和に話って？」
「それは追々話すから案内頼むよ」
「俺様が案内してやるから着いて来いよ」
「私はユッキーを案内してやろう」
「わーい、僕にもお姉さんができたよ、おにいちゃん！！」
「良かったな、お姉ちゃん欲しいっていってたもんな、ユキは」
「うんうん、素直で可愛いなー」

とりあえず大和への重要な話のため、俺はガクトの案内で目的地へと向かっていった。

第１２話「五月晴れの決闘」（後書き）

今回から本遍に『真剣でアイツに恋してる！』の港君が出るようになりました。
コラボを引き受けてくださったモーディスさんへは多大な感謝を申し上げます。
どうもありがとうございます！！

第１３話「怒号の拳士」（前書き）

今回で一応怒りとか鬱憤的な気持ちを吐き出させました。
当事者だけが知ってるから黙っておけば罪にはならないなんてことは有りません。

第１３話「怒号の拳士」

俺は怒った気持ちのままガクトの案内で大和の居る場所へと向かっていた。

「ごめんなさい、モモ先輩」

しかし俺はなぜか謝っている、その理由はと言うと……

「えへへー」

「別に気にするな、ワン子や京も居ないから良いさ、それにしてもユッキーがこんなに甘えてくるとは知らなかった、カワユイなー」

モモ先輩の背中にべったりとユキが張り付いていた、それはもう一昔前にあった垂れた動物の様に。

「それにしてもキョーヤ、ユキはすごく社交的だね」

「まぁな、それもこれもお前のおかげさ、モロ」

「僕の？」

「お前が頑張ってくれたからあいつは他人へ心を多少開けるようになった、それに友達を作るようにトーマが言ったのも効いたんだろうな」

「そうなんだ、何でモモ先輩に面倒見させたのさ？」

「お前にべったり張り付いたらガクトやモモ先輩が誤解するからだよ、お前気をつけないと、あいつに好かれているんだぞ」

「えっ！？」

突然のカミングアウトに顔を赤くするモロ、お前は自覚ないだろうが真剣にユキはお前にターゲットロックオンしてんだよ、トーマ以

上に好かれているしな。
気をつけないと両手両足で軟禁とか傷つける事＝愛とかって言う猟奇的な恋をする羽目になるぜ。

「モロさんとキョーヤさんって仲良いんですね、ガクトさん、キャップさん」
「まぁな、あいつとモロはシンパシーを感じるところがある」
「俺様のようなタイプと違う部分で仲が良いんだよな」
「一体どういう間柄なんですか？」
「大方察しがついていると思うけどな、まゆっち」
「えっ？」
「とりあえず寮に着いたし大和と話すんだろ、俺様もカーチャンにいわれるが入らせてもらうか」
「待ってくれ、ガクト」
「どうしたんだ？」
「大和って何か生き物とか飼ってる？」
「ヤドカリ飼っているぜ、それがどうかしたのか？」
「悪いが大和の部屋じゃなくてリビング借りれないか、俺、生物にストレス与えるからさ」
「別に良いけどよ、そりゃあ大和切れるわな、入れたら次の日死んでましたじゃ」
「俺が麗子さんに聞いてくるから2階でワン子達呼んできてくれね？」

そんな事を話し合って俺は島津寮…ガクトの家の隣にある寮へと足を踏み入れた、しかし意外にも最初にエンカウントしたのは…

「香耶じゃねぇか、なんの用だ？」
「タッちゃん！？」
「大方お前の事だ、2階に上がるんだろ、話しつけて来てやる」

さすがは面倒見に定評のあるタッちゃんだ。
俺の行動を先読みして2階へ上がるように話にいってくれた、どうやら許可が必要だったようだな、危なかったぜ。

「マイスター、今の人は誰なんだい？」

上に上がっていった時に丁度ロボットがでてきた。
香耶はみてないから分からないがこれは九鬼財閥が作ったご奉仕ロボット『クッキー』である。
一応戦闘機能もついている万能ロボなのだ、怒りっぽいのが玉(たま)に瑕(きず)だけど……

「俺達の知り合いだ、クッキー」
「はじめて見るよ」
「今回重要な話って事でお前は大和の部屋でヤドカリの面倒を頼む」
「マイスター……とても地味な作業だね」
「ご奉仕ロボの真価が問われる時だ！！、頑張れ、クッキー！！！」
「調子が良いよ、マイスターは……全く……」

小言を言いながらも大和の部屋へと向かうクッキー、嫌な事でも全力でやるのはある意味ご奉仕ロボの鑑かもしれない。

「ここか……」

俺は部屋の前でノックをする、女性の部屋の訪問なんぞ、任務の際の隊長の部屋以来だ。

「誰だ、大和か？」
「いや、違います」

「キャップ？」
「でもありません」
「タッちゃん？」
「近いけど遠い」

そんな問答を繰り返していたらドアが開いた、まぁ、ここにいるメンバーとは違う人が来たんだから気にはなるよね。

「キョウちゃん！？」
「一子、相変わらず泣きやがって、本当にお前は泣き虫だな」
「誰？」
「一子の幼馴染、であんたは大和のこれか？」

そういって小指を立てる、だってなんか俺の後に入ったって事は特別扱いしたんだろ？

「その通り、よく見抜いたね」
「そんな事言って…大和には断られているだろ、京」
「下手な鉄砲数撃ちゃ当たる、石の上にも三年、頑張れば実るものさ、ククク」
「で、何で来たの、キョウちゃん？」
「大和に話があるからだ、リビングに風間ファミリーは下りてきてくれ」

その事を伝えて俺はリビングに降りる、大和も居るけど風間ファミリーに関係ないタッちゃんまでいるのか、ユキは俺の横で京を大和の横に座らせる。

「悪いな、7年ぶりに会ったのに不躾な話で」

なるべく苛立ちを見せないように謝罪をする、こちらとしてはあの言葉を破って2人も入っているのが許せないのだ。
京は俺が抜けてから入ったからまだギリギリセーフだとしても由紀江さんとクリスは別物である。

「ヤドカリに危険が及ぶらしいからリビングなんだよな」
「そうだ、ストレスを感じさせやすいんでな、ストレスに弱い奴ならいちころだ」
「さてと本題に入ってもらおうか、キョーヤ……風間ファミリーを抜けた男」

その言葉を聞いた瞬間由紀江さんとクリス、そして京が驚く。
無理もないよな、自分達だけが知らない真実、風間ファミリーが足し算で生まれた「9」だったと思ったら「10－1」の引き算が含まれていたんだから。

「まぁ、そうだな、カッとしたのと冷静な分析が出来なかったせいで抜けた訳だよ」
「待ってよ、キョーヤ、大和との喧嘩が理由じゃなかったの！？」
「大和との口喧嘩で抜けたと俺様も聞いていたぞ」
「舎弟に負けたわけじゃあないみたいだな、その口ぶりは」
「そうだな、今だから言えるんだよ、語ろうか、丁度此処に被害者(ユキ)も居るんだしな……」

そして俺は語る事にしよう……7年前のあの日を一言一句違わず伝えてやるからな、ユキの紙芝居のように、昔話のようにしてな。

「昔の事です、ある日少年が二人いました、少年達は仲の良い友達です、少年達はある仲良しグループに入っていました」
「おいおい、昔話みたいに語り始めたな」

「聞いてみようよ、モモ先輩、重要そうだし」
「その仲良しグループは面白い仲間でいっぱいでした、ニヒルな軍師と風の様なリーダー、強いお姉さん、泣き虫で純真な女の子、筋肉自慢の大きな男、ブレーキ役のシャイな男の子、そしてそれらに優しい男の子と個性豊かな仲間が居ました」
「一人だけ個性見つけれてないじゃん！！」

モロには誰が誰の事を指しているのかが分かったらしい、仕方ないだろ、俺だって考えられなかったんだから。

「そんなある日の事です、風のようなリーダーはどこかへ旅に行っていました、ニヒルな軍師と優しい少年が話していたのです」

ここからユキとモロが関係するパートだな。

「そんな時お姉さんが少年達を呼びました、軍師はお姉さんの方へと行きます、しかし一人の少年は気配を感じたのですぐには行かずその気配のする方へと振り向きました」

「あの日か、そういえばあの日に抜けたんだよな」
「その理由の真実ってわけだね」

相槌打つのは良いけど、中断するから気をつけてくれ2人とも。

「その気配の正体は黒髪の少女でした、服は汚れ痩せ衰えて幽鬼のような見た目さらにはどこか遠くを見るような目線でユラユラとしていました、マシュマロを持って」

「結局マシュマロはその時からのトレードマークなんだね」

モロの奴は気づいているな、一子とかは気づいてないようだけど。
「少年は少女に近寄ります、少女は驚き後ろに下がります、少年は追いかけるように近寄りました」
「今で言えばストーカーだな」
モモ先輩、心にもない誹謗中傷はやめてくれ。
「少女には友達が居ませんでした、少年は少女がマシュマロを持っていた理由を問います、マシュマロ自体が好きだというのもあるが、このマシュマロを渡して仲間に入れて欲しいと頼んだらいけるかもしれない、だからもって来たんだと言いました」
さてここから大和が出てくるわけだよな……無言で頑張っているが大丈夫かな？
まぁ、せいぜい罪悪感ぐらいは感じても良いとおもうよ。
「それを聞いた少年は仲間に入れてあげようと思いお姉さんの方に駆け出しました、すると軍師はその場所で待っていたのです」
「待ち伏せされてたんだね」
「少年は少女を仲間に入れて欲しいと頼みましたしかし軍師は無情にもこう答えました……」
「なんて答えたんだよ、俺様には分からないぜ」
「『定員オーバーだ』とね……なぁもうこの昔話風に言うのに飽きてきたんだけど、普通に話して良い？」
「最初からそうしなよ！！！」
モロナイスツッコミだな、さてと、まぁ普通に語らせてもらおうか

「俺はそんな決まりはないといったんだ、風間ファミリーに定員なんて決めていなかったからな」
「そうだぜ、風間ファミリーにそんな決まりはねぇ」
「次に大和はこういった、ユキは隣の小学校の奴だ、関係ない奴を仲間に入れれば俺たちにも飛び火するって」
「かぶれていた時期だからな、かなり面倒だろうな」
「さらにここからが秀逸だ、大和覚えているか？、その次に言った言葉を」

なんだかんだで怒気を収めて喋っている、モモ先輩が俺の後ろに回ったのは敏感に察知したからだろう。

「『俺にとって人生は死ぬまでの暇つぶし、それまで幾ら暇つぶしでも無駄なものを持ち込みたくは無い』とお前は言ったんだ、覚えているか？」
「グッ……」
「そして俺が反論をしようとするとこう返してきたわけだ…『和を乱すな、それ以上言うなら、お前が風間ファミリーから抜けないといけなくなるぞ』ってな」
「それで抜けたって訳か」
「そうだ、普通なら俺が抜けた代わりに入れれば良かったが、大和が只でさえ拒絶したのでやめておいた方が良かった、それに一人ぼっちの辛さを知っている俺からすれば、ここでユキを一人にする方がよっぽど悪い気がした」
「それもそうだな、なんせお前が居たのは俺や一子より早かったんだからな」
「その日から俺はユキと一緒に遊ぶようになった、それまで一人で頑張っていた修行に新しく入った奴が居たおかげで、ユキは独りぼっちにはならなかった」
「修行に新しく入った奴？」

「僕はあの日にキョーヤが本当に抜けたのか確かめにいったんだ、それで僕は長枝さんに強くなりたいって言ったんだよ、ガクト」
「モロロが……修行だと」
「それから2ヵ月後事件は起こった、モロが助けを求めてユキのいじめを止めるのを手伝ってくれていた、しかし本当の敵は学校なんかじゃあなかったんだ」
「どういう事？」
「親だったって訳か、香耶」
「タッちゃん、正解だ、ユキの母親はひどくてね、着の身着のままどころか風呂に入れず満足な食事もなかった、しかしユキはそれでも愛してもらおうと頑張っていた」
「それでどうなったの？」
「一子……ユキはなその日遊ぶはずだった、しかし来ない、俺は何かあったのかと思ってユキの家に向かった、幸い事前に足を使っていたからユキの家は知っていた、そういうのはキャップから学んだ」
「どういう教えだったんですか？」
「『教えてもらえないなら、自分の体や頭を最大限に使え』だよ、由紀江さん」
「それでどうなったんだ、キョーヤ」
「モモ先輩……その時目の前にあったのは悪夢の形だった、ユキが母親に首を絞められていてユキの黒い髪はショックや恐怖で白くなってしまっていた」
「ユッキーは元から白ではなかったのか」
「そうです、俺は助ける為に踏み込んでガラスに一撃を加え侵入できる状態を作ったわけ」
「その時ユキは逃げて俺とモロに偶然にも会ったんだ」
「それでその後俺は警察に捕まってしまったんだ過剰防衛だったせいでね」
「ユッキーの母親を必要以上にやってしまったんだな」
「そういう事です、殺してないけど」

「それで確か聞いた以上は親の監視の元、２年の間外出および、他者との接触を禁じるだったよね」
「正解だ、モロ」
「そのせいで風間ファミリーから疎遠になったんだな」
「そうだ、しかしその後大和はその俺へ言った言葉を平然と破って他者への干渉をやったわけだ」
「京を助けた事だな、しかし仕方ないだろ？」
「仕方ないだと、ガクト？」

ガクトは知らないからな、怒りをぶつけてはいけないが語気を荒げてしまう。

「ユキは救わなかったくせに自分と趣味が合った奴を助けるのはどうなんだよ！！」
「コラコラ、大声は出すな」
「俺に言っただろうが、飛び火だの暇つぶし云々って！！！」
「自分の言葉に責任を持ったらどうなんだ、お前を許せないのはもう一つあるんだぞ！！！！！」
「完全に怒っているな、舎弟の方が今回は悪いと思うけど、止めないとな」
「定員オーバーなら２人抜けよ、９－７＝２だろう、２人余っているじゃあないか！！！！！」
「くっ……」
「大和……」
「人一人の心が壊れるのは素通りしておいて、卑怯だろ、罪悪感もなく天真爛漫に笑いやがって！！！！！！」
「でも今更…キョウちゃん…」
「それを人は差別と言うんだ」
「ヤドカリはやめておけよ、直江が面倒だからな」
「タッちゃん、俺の怒りをヤドカリで晴らす気はないよ」

「キャップ、これはヤバイな、俺様は出動できるけど」
「だから大和、俺はお前が憎い……だけどね、俺が悲しいのは差別して助けなかった事、嘘でユキを壊す要因を作った事でもない」
「えっ？」
「断られて悲しい思いをして傷つき壊れそうになったというのに……それでもユキは大和の事を恨んでないんだからな」
「うん、べっつにー」
「ユッキーが恨んでないだと……」
「そうだよー、僕に優しくしてくれたのは父さん、お兄ちゃん、トーマにモロ、それに準だもん」
「モロがランクインしてるだと？」
「それ以外はどうでも良いんだよねー」
「お前はどう弁解するんだ？、定員オーバーの嘘を、京を助けたことを？」
「……」
「黙秘してやり過ごすのか……」
「大和逃げて！！」
「やり過ごすのかぁあああああ！！！！！」

俺は吼えて立ち上がる、遂に切れてしまった、違うだろ、恨んでなくても謝罪をしろよ！！！
黙秘していたら怒りが収まるとでも思っているのかよ！！！！

「やめて下さい！！！！！」
「くっ！？」
「まゆっちの言う事を聞いただと……」
「その拳は誰かを殴るためではないです、キョーヤさん！！！！」
「分かった……座るよ」

俺はしぶしぶ座る、せっかく由紀江さんが大声を出したんだ、それ

に恩義があるからな、素直に言う事は聞くさ。

「だが舎弟……今回はひどいな」

「キョウちゃんが怒るのも無理ないわ、大和……」

モモ先輩と一子は大和を非難する、普通の神経なら憤りとか驚きを感じるだろう。

しかし風は自由である、そんな雰囲気、怒っていた事などどこ吹く風のように後ろにまで近づいていた。

「リーダーである俺にそこまで黙っていた2人は許さないぜ、そらっ」

キャップが俺の頭を叩く、幾らなんでもみんな驚いているぞ。

「俺に黙って抜けて……挙句の果てにはどっかに姿を晦まして、そんな悩みなんて皆に相談したらよかっただろ！！！」

「キャップ……すまない」

「大和に勝手な事されたってのも嫌だけどな、定員オーバーなんて言って仲間に入れないなんて虐めと一緒だぜ」

キャップも定員オーバーには少しばかり怒りを感じているようだ、恋は盲目で気づかない人も居たけど。

「何でキャップやワン子達は大和をそんなに悪く言うの！？、所詮部外者じゃないか！！」

京が大和を擁護する、壊れる前に助けてもらった奴とヒビとはいえ壊れた奴、そんな奴にユキや俺達の気持ちなんぞ分かるまい。

「京、大和を擁護するのは分かるが今回は私は香耶の味方だ」
「なんでモモ先輩まで……大和は舎弟でしょ！！」
「それとこれとは別だ、香耶が抜けた裏が分かれば如何に今回大和が自分勝手か分かるだろ？」
「抜ける方が自分勝手だ、コイツは大和を妬んでいるんだ！！！」
大和を心酔しているからそう思えるんだ、俺は妬んでもいない。
「京……」
「クリスさんと私は京さんの言う気持ちが分かります、モモ先輩。今回はキョーヤさんは良い人ですが例外です、抜けたのにわざわざ大和さんの粗探しをして、それを暴露しているだけじゃあないですか」
由紀江さんの言葉はきつく刺さる、痛いな、確かに粗探しと言われたらそれまでだよ。
「まゆっちとクリスの気持ちは分かるわ、でも今回のはユキが可哀相じゃない、見捨てられて、嘘つかれて、首絞められて」
「ワン子の言う事は分かるが俺様は大和だな、どう考えても抜けたって事は無関係だからよ」
ガクトは、抜けた＝無関係か、一子はユキの事を純粋に可哀相だと思っている。
「大和に付くとかキョーヤに付くとかそんな事はやるなよ、俺たちは……『風間ファミリー』だろ？」
キャップの一言は議論を繰り広げる全員の頭を冷ました、流石に京は怒りの目で俺を見ているけどな。

「スマン、キャップ、少し感情的になりすぎた」
「モモ先輩は言葉に責任を取れない奴が苦手だもんな」
「キョウちゃんがこれじゃあ報われないわ」
「ワン子も頭冷やせ、ホラよ、アイスだ」

そう言って全員を宥める、さすがだな、キャップ。

「今回は大和とキョーヤの問題だがどうするんだ？」

「俺は……」

大和は動揺していてあまり言葉に出来ていない、そこで京がいう。

「些細な事をいつまで引っ張っているんだ！！！」
「些細な事だと……？」
「京、薮蛇だぞ」
「確かに大和やお前に比べたら些細な事だろうさ、でもユキにとっては初めて友達が出来るかどうかの一大決心だったんだよ！！！」
「でも！！」
「でもも何もあるか！！、お前は助けてもらったからそんな風に些細だと言えるんだ、虐めを受けて髪の毛が白くなるわけでもないだろう、精神疾患を患っても居ないだろう！！！！」
「キョーヤさん、落ち着いてください！！」
「由紀江さん……落ち着けるわけないだろう！！、京…お前がユキの何が分かる、助けてもらって今の今まで楽にいられたお前に！！、夜に悪夢を見て腕を掻き毟る痛々しい姿を見た事があるか！！！、恐怖の余り目を見開いたままゴメンなさいと呟き涙を流す姿を！！！、いきなり狂乱する様な叫び声をあげてうわ言でやめてという姿を！！！、お前は見た事があるというのか！！！！！」

「……」

一気に怒りの言葉をまくし立てたから肩が上下する、少し熱くなりすぎたか。

「正直な所キョーヤの言葉に嘘はないよ、僕も最後に言った症状は見た事があるしね」

「モロロ、修行の際にも有ったのか？」

「その時はチョーさんが宥めていたけど、本当に酷かったよ」

「だそうだ、そんな事になっていて京、まだ些細だといえるか？」

「それは……でも私のような事は！！」

「京、自殺させる会も一応有ったよ、中学校の時にね」

「それをエアメールでモロが壊滅させたというのが報告されたぞ、証拠もある」

「そんな……」

「で、大和、なんか言う事は無いのか？

「俺はない……」

「何でだ、軍師、ここで策ぐらいはあるだろう？、『人生は死ぬまでの暇つぶし』なら暇つぶしの最中なんだ、この程度、余裕でどうにかできるだろ」

「全てが真実だというのに……反論の余地がないだろ、キョーヤ」

「まぁ、迷いを断ち切って反論しても俺は被せて行くけどな、罪悪感を」

「くっ……」

「それ位にしてください、キョーヤさん、大和さんが困っています」

「ムムム……由紀江さんが言うなら仕方ないな」

「俺様は思うんだがなぜまゆっちの言う事を聞くんだ？」

「それは命の恩人だからだな、ガクト」

「なにっ！？」

そして俺は過去を話し始めていく、って昨日もこの事言ったよな。
「アレは忘れもしない去年、桜が満開の3月だった…新しく高校生となるために川神へと戻る俺は、１２の時から滞在していたドイツからの帰国途中」
「ドイツに行って立って、確かドイツって言えばクリスの故郷だよな」
「そうなのか、それはともかく俺は１２で入隊して3年間、少年兵士でドンパチしてたんだ、で……帰国便がいきなり飛行機が高度を失い墜落してしまったのさ、その時ニュースで生存者無しといわれたが実際の所生き残ったのはただ俺一人」
「それでミイラになっていたって訳か」
「その通りだよモモ先輩、爆発や炎が燃え盛る中で俺は這いずりながらも命からがらであったが抜け出した」
「で、いつ位になったらまゆっち出て来るんだ？」
「丁度今だよ、幸い北陸地方での墜落であった為、近くの林で鍛錬をしていた由紀江さんが速く、俺を見つけて保護してくれたんだ」
「それでキョーヤはまゆっちと顔見知りに……まゆっち、怖くなかったのか？」
「大丈夫でしたよ、それに放っていたら死にそうでしたし、そんなの見捨てていけませんよ」
「この人のおかげで今の俺があるわけだよ、ガクト」
「そうなのか……まゆっち凄いな」
「ガクトさん、偶然とはいえ良かったですよ、命を助けれたんですから！！！」
昨日とは違ってエッヘンというように誇らしげだ、と脱線したな。
「とりあえず今回は大和にこれ以上の言及はしないし、悪くは言わない」

「大和が悪いのか！？、本当に大和だけに非があるのか？」
「それはそう一概に言えないだろ、俺だって冷静にさえなったら良かったわけだ」
「しかしお互い相容れない部分が有ったのも事実だぞ、京」
「だからどういっても１０の部分大和が悪いとは思わないし、同時に俺も１０悪いとは思わない」
「結局キョーヤはどうしたかったんだ？」
「キャップ、俺はもう一度風間ファミリーに戻れるものなら戻りたかった……ユキを入れて欲しかったんだ」
「そうか……でも今回で判ったと思うが今は入れれそうにもないぜ」
「それは分かっている、ただ閉鎖的になりすぎてユキみたいな子を作るのはやめてくれ……」
「また心の整理が全員付いていけるようなら言うからな、忘れるなよ、普通に話しかけて来い、俺とお前は親友だからな！！！」
「有難う、キャップ、俺は帰るよ、ユキ帰ろう」
「え～っ？、僕まだ携帯電話の番号交換するのに～」
「分かった分かった、して良いから」

ユキはこの後モモ先輩とモロ、ガクトに由紀江さんと結構な人数の人と交換していた、俺はクリスとモロ、モモ先輩に一子と、俺も４人ほどか。
ちなみにタッちゃんの携帯番号は宇佐美代行センターでのバイトの際に交換している。
俺は帰って行った、さて……こんなに荒れたけど入れたら良いな、無理っぽいけど。

「あの今まで聞きませんでしたけどキョーヤさんとキャップさんってどういう間柄なんですか？」
「なんやかんやで風間ファミリーに初めて追加された男だぜ」
「意外に舎弟が２番目じゃあないんだよな」

帰って行った後、島津寮は少しだけ話をしていた。
余談ではあるがクッキーはちゃんとヤドカリの手入れなどを完璧にこなした後キャップの部屋へと戻って行った。

第１３話「怒号の拳士」（後書き）

長くしすぎました、というか大和を貶める気はなかったのですがやはりユキの場合は大和＝悪者になりますね

第１４話「仲間でなくても協力はするさ」（前書き）

一応モロの戦闘力把握、さらにＳの部分導入。
ご都合主義発動というかＳでは６月７日に転入であるマルさんがその前にはいましたのでそこらへんの設定を改変しました。

第１４話「仲間でなくても協力はするさ」

今体育館で俺とモロが並んでいる、決闘だ。
別に前日の事が理由ではない。
かといって俺とモロが戦うわけでもない。
俺とモロが『組んで』戦うのだ、タッグマッチである。

経緯はこうだった……

「逢間香耶！！、師岡卓也！！」
「「何ですか？」」

俺とモロは屋上でご飯を食べていた、別に大和のことで喧嘩したからといって友達じゃなくなったわけではない、そう言ってモロが誘ってくれたのだ。
そこで先輩が２人居て声をかけてきた。

「お前ら、２－Ｓの小雪ちゃんと仲が良いらしいな！！！」
「そうですね」
「何でいきなりそんな事大声で言うんですか？」
「どういった関係だ！！？」
「上の名前知らないんですか？、逢間小雪ですよ」
「僕は確かに好かれているんですけど理由が…」
「師岡ぁ！！」
「逢間香耶は兄だったから良くても、憎いぞ！！！、師岡ぁ！！！」
「嫉妬されても困りますよ、僕は僕で好かれる下心無く頑張った積み重ねでこうなったんですからね！！！！」
「そうですよ、先輩、モロは妹であるユキの為に頑張ってくれた、その結果が好かれているんです」

「納得できるか、力づくで好かれてやる！！！！」
そう言ってワッペンを取り出す先輩、しかしモロをやったらやったでユキの制裁による嫌悪が待ってますけどね。
……経緯終わり
「幾らなんでも情けないよな、力づくって……」
「本当だよ……やらなきゃいけないしね」
そういって俺とモロは構える、俺は八極拳、モロはカポエイラ、昼休みの終了５分前までに決着がつかなければ引き分け。
それ以外は前回の港の決闘ルールと一緒。
まぁ、知らなかったら困るからもう一回説明する。
オープンフィンガーグローブの着用と、武器になる道具の使用の禁止。
目潰し、喉突き、金的蹴り、噛み付き、脊椎への攻撃の禁止。
ダウン後にカウント５で立ち上がれない、戦闘続行不可と審判が判断したら敗北。
ギブアップもアリで、明らかに戦意を喪失している場合などはＴＫＯ扱いで敗北。
そしてタッグルールの為タッチによる交代が採用される。
はっきり言って昼休み終了５分前まであと５分もある、すぐに終わらせたら俺達の実力なんて誰にも知られない。
今回の立会人は２－Ｆの小島先生である。
「全員、前へ！！」

「２ーS、逢間香耶（おうまきょうや）！！」
「２ーF、師岡卓也（もろおかたくや）」

俺は気合を入れるがモロはいたって普通に名乗る、まぁ、別に大声出すようなものでもないしな。

「３ーC、杉村正敏（すぎむらまさとし）！！」
「３ーD、東海林元鞘（しょうじもとさや）！！」

相手さんは気合と嫉妬が入り混じった目で見ているね、全く良い迷惑だよ。
魍魎（もうりょう）の宴（うたげ）の参加資格があるんじゃないのか？
どのようなものかは知らないが父さんいわくなんか、負のオーラが見える奴に参加資格があるらしい。
参加したことはないけど父さんは父さんで返り血浴びて帰ってきたことあったし、モロを遠目でみた時爪先に血が付いていた。
もしかしたら格闘系の祭りなのかもしれない、男限定だろうけど。
※魍魎（もうりょう）の宴（うたげ）は香耶の想像と全然違うものです、勘違いしないで下さい。

「では、始め！！」

小島先生の号令で始まる、相手は柔道部か？
掴む為にじりじりと近寄る、俺は構えたまま動かない……なぜなら見定めているからだ。

「掴んで、投げて、折ってやる！！！」

見定め完了。

結果……

筋力　下
気力　下の下
敏捷　下の上
耐久　中の下
幸運　下

評価……弱い

「フッ！！！」

一気に踏み込む、腕を掴もうとしているが遅い遅い、蚊が止まるぞ。

「なっ！！？」

掴もうとした腕をやめて足払いを試みる、まぁ……終わりだけどな！！！！

「カッ……ハッ」

１０秒掛からず一人がアウト、最短で腹に裡門頂肘（りもんちょうちゅう）を喰らう。
おいおい、この程度なのか弱すぎるぞ。

「杉村、ダウン！！！」

小島先生が戦闘続行不可の判定をする、俺はモロにタッチした、って次はテコンドー部かよ。

「後、頼んだぞ」

「うん、やってくる」

代わりにモロが行く、さてとアレからどれ位強くなったのかな？

「カァッ！！」

ティミョ・アプチャ・プシギというテコンドーの技、簡単に言えば飛び前蹴りだ。
一気に決めたいとはいえ、もやしのような見た目だからとはいえモロを舐めすぎだろう。

「効かないよ……」

相手に近寄ってエスキーヴァという回避方法を使うモロ、技自体は片足のひざを曲げてその膝に頭をつけ、さらにその上に腕をかざすといったものである。
避けるという動作が多いカポエイラだがちゃんとガードも入っている。

そしてそんな隙の多い技を使っていたら幾らなんでもカウンターの餌食だ、もう終わったな……

「ヒッ！！？」

相手は驚いている、どんな顔をしているのは分からないがカポエイラは基本動作として相手の顔を見ている、フェイントや大技でもしっかり見られているのだ。
切れたモロの顔が気づけば目の前……ホラーですね、先輩、お疲れ様です。

「うぉおおおお！！！？」

先輩は恐怖で支離滅裂なのか、それとも吹っ切ったか？

ネリョ・チャギというかかと落としの技を繰り出すがジンガのステップを刻んでいるモロには通用しない。

ホエーという側転の動作まで使って避ける。

そしてモロは一気に自分のリズムへ、間合いへと相手を引きずりこんだ。

「シッ！！！」

もうモロ自体もこの先輩の攻撃には飽きたのか……技を出す。

それも結構な技だ、飛んだ状態でのメイア・ルーア・ジ・コンパッソ。

名前は長いが、日本語っぽく言うとコンパス蹴りである。

速度は相当落とした流すような一撃だがそれでも並みの奴ならばノックアウトである。

それにアクロバットな避け技とか考えたらまだ実力の半分も出ていないだろう。

「グハッ！！！」

相手の先輩は踵落としなどの大技とモロの目に威圧されて碌に防御する力も無かった。

顎に直撃してしまい脳震盪と気絶によるＫＯ、試合の所要時間はおよそ４８秒。

「勝者、逢間・師岡ペア！！！」

「いやー、楽だった、楽だった」
「本気出さなくて良かったよ、やってたら先輩の歯がやばかったね」
「お前ら強いな、知らなかったぞ、特に師岡！！」
「はい、有難うございます」
「後、食券での依頼は風間が競り落としたらしいからな」
「はい、また聞いておきます」

そういってモロは先に２－Ｆ教室に戻った、そういえば今日父さんは京都に出張だっけ、どうしたんだろう。

その頃京都……

「ねーばり強く生きてゆくーんだ♪」

多くの視線が集まるなか、少女は体をほぐしている。

「で、なんでお前らの代わりに俺な訳だ、ゲイルにゲイツ」
「それは1時間前に君が兄さんをやってしまったからだよ、チョウシ」
「お前らが因縁吹っかけてきたのが悪いんじゃないか」
「結局7年前と同じ一撃ＫＯだったしね」

結局俺が勝ったのが悪かったみたいだな、これ。

「いちにちいっしょく、なっトウッ！トウッ！」
「それにしても何の歌だか、まぁ、あいつ相手なら……1分掛からないな」

後に四天王に名を連ねる事になるであろう少女を目の前に平然と勝利宣言をする。

その根拠はヒューム・ヘルシングや渺茫やジョンス・リーといったトップクラスとの戦いである。
あいつら以上の覇気も無い、あいつらのような強さが見えない、それゆえに勝てる。

「どう、燕ちゃん、キテる？」
「準備オッケーよん、おとん」
「相手は燕ちゃん相手に勝てるって宣言しちゃってるよ」
「へぇ～」

話しているがこっちはそっちを川神の生徒として、カラカル兄弟と教師をして迎え入れる為に交渉するんだよ、早くしてくれ。

「オイ、まだかよ、待たせるなよ」
「本来の対戦相手はカラカル・ゲイルだったんだけど、この人が一撃で倒しちゃってね、名前が分からないんだよ……まぁそれでも『平蜘蛛』は使わないでね、燕ちゃん」

このおとんと呼ばれる男の忠告はこの男に関しては間違いである。
武器を使う忍者や未来予知を使うアイドルとかがいた世界で戦った男にとって全力を尽くさねばならない。

「あいあい、やってみますか」
「準備は出来たか、来いよ」

その言葉を聞いてある男が前に出る、といっても俺はこいつの顔を知っている。

「それでは九鬼家従者部隊序列４２番、桐山鯉（きりやまこい）」

あれ、結構上がったな、俺が最後に聞いたときは５７番だったはずだぜ。

「この対決、見届けさせていただきます、松永様」
「ああ、しっかり見て、しっかり報告してくれ」
「あとこれは忠告ですが全力を出させた方がよろしいですよ」
「何を…ただのおっさんじゃあないか」
「おとんといい勝負だよ」
「後悔なさると思いますよ」

しかし松永燕はその忠告を聞かず素手のまま行った。

「お待たせしました」
「あれ、松永といえば武器だろう、使わないのか？」
「お気遣いどうも、でも私は素手で良いんで」
「そうか、その自信が沸く理由が分からないが舐めてたら容赦しないぜ、俺は女相手でも手加減しないんでね」
「服装には突っ込まないんですね」
「女子学生で売り込もうって腹だろ、エンターテイメントってわけだ」
「正解、燕ちゃん、始めちゃってー」
「宜しくお願いしまーす」

そう行って駆ける燕、しかし食物連鎖の因果のようでもある。

『燕』は、虫を食べる、蛙や魚を食べる。
ゲイツたちは魚だろう、しかし……今戦う相手は大型の肉食獣である。
そして小型の鳥が大型肉食獣に勝てる見込みは……０である。

「弱いな、従者部隊序列１１番のレベルでは俺に遠く及ばん！！！」
半回転させて蹴りを見舞ってくるが長枝はそれを紙一重で避ける、そして２４年欠かさず撃ってきた、渺茫戦でも活躍したあの技を腹めがけて打ち込んだ。
「『猛虎』！！！」
「なっ！？」

しかし着弾する事は無かった、桐山が間に入ったからだ。

「そこまでです」
「油断したから、こうなるんだぜ、嬢ちゃん」
「本気を出せといったのは何故か分かりますか？」
「分からない……」
「俺が九鬼財閥の従者部隊でどれ位やばいか言ったら分かるかな？」
「あと６年前に引退を惜しまれた格闘家を知っていますかね、松永様」
「たしか逢間長枝だったと思うけど、そんな…まさか……」
「ええ、予想通りですよ、九鬼家従者部隊元１番にして格闘界の神話、逢間長枝、その人です」
「だから、本気を出せって言ったんだよ、まぁ、川神に来てくれないかって言う交渉役だったんだけどね」
「ゴメンね、燕ちゃん、『平蜘蛛』使用させたらよかったかな」
「無理よ、おとん、あの人、まだ本気じゃない」
「そんな……」
「底が見えてない相手に出会ったのは初めてよ」
「さて……と来てくれるのか、松永さん？」
「行くよ……今回の対決は相手が悪いって、観客は口々に言ってるから印象は悪くないし、せっかくのチャンスだ、行かせて貰うよ、

川神へ！！！」

一応この後カラカル兄弟の迎え入れも成功していた、その事を伝えると学園長から一旦川神へ戻ってくるように言われた。
俺は桐山に頼んでヘリで川神学園へ向かっていった。

……その頃川神では

「何で俺が手伝うんだよ？」
「おじさんの助手としてだ、頼むぞ」

そういって宇佐美先生が俺を法って車へと乗った。

「いや、キャップが一人つけるように言ったら、タッちゃんじゃなくてキョウちゃんなんてね」
「あんまり手伝う所ねーだろ、これ」
「そんな事気にしなくて良いわよ」
「一子、で囮がモロなのは何でだ？」
「女の子っぽく見えるからよ」
「そうか……」

一応あいつ筋肉質なのにな……
どうにか、足があまり見なければ問題ないか。

「さて……と電話しとくか」

そういって大和に電話をする、幾ら昨日怒ったとしても公私混同はしてはいけない、冷静に話せば良いんだ。

「大和、モロに男が接触、移動を開始した」

「OK、意外と目が良いんだな」
「大方椎名からも電話が来るだろうな、俺はどう動けば良い？」
「そのままワン子と一緒に行動してくれ」
「分かった、切るぞ」

そう言って電話を切る、一子の役割を補佐すれば良いんだからな、頑張るさ。
大方警察がガサ入れる前にやっといて川神学園の女子が居たらもみ消さなきゃいけないからこんな事してんだけどな。

「一子、どうやら相手さんは本町に出て行くが用意できてるか？」
「OKよ、先回りすれば良いのよね」
「宇佐美先生に電話しておくから先行っとけ、あくまで尾行リレーだから遅くのんびりで構わん」
「ビコウリレー？」
「素人なら騙せるレベルだ、うかつに動いたら相手さんが携帯で連絡取り合ってるからばれる」

そこまで行って俺は宇佐美先生に連絡する。

「一網打尽にする策はあるみたいですね、あっ、今車に乗り込みました2重尾行していた相手もそれに、ナンバーは……」
「迅速対応に小賢しさに武力、3拍子揃ってて嬉しいねぇ、忠勝よりまだ手際は悪いけどな」
「冗談はやめて下さいよ、源に比べたら手際が悪いのは認めますけどね。大方乗り込んだ車に風間がバイクで追跡でしょう、ある程度になると先生の出番でしょうけど頑張ってくださいよ」

そう言って電話を切った。

「ハハッ、読みは的中だな、手順が分かられているぜ、もう追跡の準備しているけどな」
「あいつ凄いんですね、本当『サトリ』じゃないんですか？」
「あいつに惚れた理由は先読みの力さ、『先見の明』ってやつだな」

「次はどこに行くの、キョウちゃん？」
「親不孝通りだ、ならず者の溜まり場だからな」

そして俺は一子と親不孝通りへと向かっていった。

「あのビルがどうやら本拠地のようだな」
「その様だな売春斡旋所のオーナーが今入って行ったぞ」
「根城に廃ビルを使うって発想は一緒なのかね」
「で、これで配置パターンは大和……多分Ｂだろうな、なんか読めてくるぜ、相手の出方が」
「相手さんがデカイの居るからそいつが関係者以外を追い払っているんだろうな」
「モモ先輩、あいつは俺がやっておこうか？」
「いや、キョーヤ、ここは私がやるから気にするな」
「モロからワン切り連絡が来たぜ！！」
「キャップ、多分２０人かそこらだな、気配がそれくらいだ」
「キョーヤ、良い情報だな、目を見ても嘘ではなさそうだ、姉さんが褒めてやろう」
「敵がそれだけ揃えているなら武力制圧だな、指揮はキャップに頼んだ！！」
「分かったぜ、大和！、よし、俺とモモ先輩とクリスは正面から行くぞぅ！！」
「悪の組織に踏み込みか、正義の血が騒ぐぞ」

モモ先輩がステップを踏みつつガードマンに近づく、いやいや嬉々

として近づくものじゃあないだろ。

「楽しくなってきたなぁ、こーんにちはっ」

「……？、なんだお前らは帰れ、ここはお前らの来る所じゃないぞ」

「女が女を買っても良いじゃないか」

「！！、貴様どこでそれを…こっちへ来い！！」

そう相手が言った直後モモ先輩がボディガードの骨を外した、いやいや殴れば良いでしょ。

「うごぐぼはっ！？」

「なぁに、死にはしないさ、そのまま悶えてろ」

モモ先輩はあっけらかんと言ってのける、死ななくても警察沙汰になるんだぜ、経験者だから良く分かる。

「ようし、突入だ、行くぜオラーーーー！！！」

その号令とともにキャップたちは中へ踏み込んだ。

俺の任務自体は後誰がいるか洗うのと一子の手伝いだけだ、さて……と外で待機かな

暫くして組織の奴らが窓から飛び降りるが平然と迎撃をしていく。

一子は一子で逃げている相手を捕まえていた。

椎名の奴はコソコソ逃げる相手を狙撃している、その矢は服を破り相手の体を壁に縫い付けていた、それを一子が倒していく。

「てめえら、動くなよ、リアルで！！」

最後に残った組織の1人が人質にしたモロへ拳銃を突きつけている。
……よし、痛い目見させてやるか。

「俺に撃てよ、人質にしか撃てないチキンか？」
「舐めてんじゃねぇ……撃ってやるよ！！」
「そうか、さらにそっちに近づいてやる」

相手が撃ってくるが怒っていたら十中八九当たらない……、銃口と引き金の具合でどこに飛ぶかは見えるのだ。

戦場で培ったものは伊達じゃあないぜ……そして俺は遂に相手へと近づききっていた。

「化け物め！！」
「最後のチャンスをやろう、ゼロ距離でここに撃ってみろ」
「なっ！！？」
「キョーヤさん！！」

額に銃を押し当てる、モロと由紀江さんは心配しているが、本当に自分が死なない体なのかを知る良い機会なのだ。

「さぁ……やってみろよ」
「ヒ、ヒィ！！！？」

相手も本気でそれを望んでいると知って怖気づき始めた、下らないぜ。

「お前、期待はずれだからさ……消えろよ」

俺は肩透かしを食らった気分で体重を乗せた拳を振り下ろした。
全く舐めてんじゃねぇよ、せっかくのチャンスだったのにさ。

「全く、モロ……大丈夫か、怪我してないか？」
「うん、大丈夫だけど、なんだかいつもより優しいね」
「全く……こっちをからかうんじゃねえよ、立てるのか？」
「有難う、手を貸してくれるかな？」
「お安い御用だって、ホラ」

そういって俺はモロの手を引き上げる、するとそれを見ていた椎名は……

「素晴らしい友情だ！！」
「いや、お前、ボーイズラブ的なところで喜んでいるだろう」

モモ先輩もナイスツッコミだ、さて……と一旦離れるかな。

「お前はあの輪の中に入らないわけ？」

ビルで証拠を探していたら宇佐美先生が話しかけてきた。

「入れるものなら入りたいですよ、でも今更ですよ」
「そんなもんじゃあないんだろうけどな、小難しく考えても良いことねぇぞ」
「そうですね……で証拠は当たりだ、見つけましたよ」
「有難うよ、名簿チェック頼むぜ」
「はい、でも電話きてるんでちょっとすいません、出ます」

そういって電話を取る、どうやら国際電話だが……

「はい、こちらは逢間香耶ですがどちらさまでしょうか？」
「私だ……どうやらデマだったようだな、日本での墜落事故はドイツでも聞こえていたよ」
「フランク・フリードリヒ中将、お久しぶりです、デマでは無くあの墜落では私1人だけが生き残ったんですよ」
「成る程……クリスは元気かね？」
「クラスが違う為なんともいえませんが元気ですね、友達も出来て楽しそうですよ」
「そうか……本題があるのだが聞いてくれるかね、准尉？」
「どう言った用件ですか？」
「目付け役としてマルギッテをそっちに送ろうと思う、その際、案内や訪問を君に頼みたい」
「別に構いませんが案内するのはいつ頃ですか？」
「3日～5日って所だろう、その間クリスの事も頼んだぞ」

そういって一方的に用件を言われて切られた。
しかし嬉しいといえば嬉しいものだ、なんせあの人が川神に来るのだから。
俺は名簿に意識を戻し目を通しながらも少し胸が高鳴っていた。

第１４話「仲間でなくても協力はするさ」（後書き）

本遍ではガクトが心配した後、風間ファミリーの名乗りをキャップが上げます。
風間ファミリーではない為キョーヤは隠れました、次回ぐらいにマルさんを出そうと思います。

第１５話「逢引のようでそうでない」（前書き）

妄想発動サーセン。
プライベートの呼び方、マルギッテさん。
任務や中将たちの前では隊長殿。

第１５話「逢引のようでそうでない」

中将殿の電話から４日ほど経った土曜日の事……早朝から香耶はあるところへ向かっていた、ちなみに現在の時刻は午前４時である。鍛錬を速く済ませるために２時に起きていつもの朝のノルマをこなした後、そのまま着替えて向かったのであった。

「で……何でお前らもいるんだよ、お嬢様の護衛とはいえ多くないか？」

「……」

「あぁ、スマンスマン、隊長と中将殿しか日本語分からないからな、今からドイツ語で話すよ」

※今からドイツ語になります、表記は日本語ですがそう思ってください。

「で、なんで狩猟部隊の大半がここに居るわけ？」

「お久しぶりです、副隊長殿！！」

「生きていて何よりです、副隊長殿！！」

「お前ら……質問に答えろよ、なんで狩猟部隊の大半がここに居るのかな？」

「それは隊長殿が教えてくれます」

「あー、無理無理、あの人４時３０分きっかりに起きるもん、別に戦場じゃなかったらそんな感じだよ、生活リズムの規則性は凄い正しいけどね」

「という事は２分前の今に起こそうとしたら……」

「隊長の寝起きしだいで俺達……」

「全くこっちは重要な任務だって言われたんだからな、ちょっと強引にでも起こしてみるか、腰抜けども…俺が起こす手本を見せてや

る！！」
「そんな副隊長、死にますよ、絶対無理、地雷を踏むとかいう問題じゃありませんよ」
※ここでドイツ語を解除します。
その言葉を無視して俺は隊長……マルギッテ・エーベルバッハの寝室へと赴く。
正直な所、其処まで恐ろしいわけではない。
しかし死地に赴くよりは数倍も緊張するのは間違いないのだが。
戦場では『猟犬』と恐れられたあの人も立派な一人の女性であり人間だ。
あの人だって、食事をし、ちゃんと寝るのだ。
超人のようなスペックから想像もつかないが一度４時３０分より速く起こしに行った事で、見た事のある寝顔はそう、綺麗と言うか……可愛いというか……とりあえず美しかった。
当然そんな事を面と向かって言った日にはトンファーキックを見舞われる事になるだろうが。
事実過去に一回その経験がある。
それに正直そんな事を言うのは俺自身恥ずかしいのだ。
さて……とノックすれば問題ない。
「と……そんな風に思ってた時期が俺にも有りました……」
「何を言ってるのですか、速く紅茶を入れなさい」
顔にはトンファーによる攻撃の跡が有ります。
理由の回想開始……

はいはい、ノックしたのに無反応だったから開けたんですよ、一大事だと思って。
４時３０分、時計でぴったりだったから。
そしたら設定で1分速いと言う罠、せっかちなミスをしてしまったぜ、畜生！！

そしたら2回目の寝顔拝見。
そして面と向かって言わなければ言える……それ故に呟く。

「可愛いし、綺麗だ……」

そこで３０分より2、３秒時間が過ぎている＝４時３０分きっかりに起きる＝起きている＝聞かれている。

その結果目の前には赤面した隊長が……俺の第一声は。

「お早うございます……マルギッテさん」

腰が引けていて、なおかつ言っていたのが聞こえていたせいで赤面していた為にこのような言葉である。
なんともしまらない朝の挨拶であった。

理由の回想終了……

「どうぞ」

目の前に紅茶を差し出す、２年ぶりだが淹れるのはあの時よりうまくなったんだぜ。

「この匂いはキーマン…良い選択です、味は…」

そういって一口飲む、さてと……俺も座って飲むかね。

「素晴らしい、褒めてあげましょう、誇りなさい」

そういって満足げな笑みを浮かべる、喜んだ顔もまた美しい……しかし2回目のトンファー攻撃は危ない為黙秘する。

「それで隊長殿、今回は何故狩猟部隊がこれだけ集まっているんですか？」

なんか凄い目で見てるよ、怖いね、命日になったりしないかな？

「クリスお嬢様の護衛と思いなさい、あと貴方は今日私の案内です、早く用意をするので待っておきなさい」

「はい？」

「私も四六時中同じ軍服では居ません、察しなさい」

「成る程…出て行きます」

「着替えるというのがワンクッション必要とは鈍感ですね、反省しておきなさい」

そう言われて部屋を追われた…紅茶まだ残ってるけどね。

数分後、隊長から声が掛かった。

「着替えが終わりましたから入ってきなさい、そして残っている紅茶を飲みなさい」

「はい、でも…」

「どうかしたのですか？」

「やっぱり軍服がマルギッテさんには似合う、きれ……」

言い切る前にトンファーの突き、ヤバイな、天然ジゴロって訳じゃあないんだけど…黙っておこうと思うんだけど、感想が意思とは逆に口から出るよ。

「からかうのもいい加減にしなさい、紅茶が冷める」

再び言った俺も言われたマルギッテさんも赤面。
初めて出会った時もそういえばいきなり『綺麗だ』といってトンファーキックを見舞われたんだよね。

「飲み終わったんですけど、どういった案内ですか？」
「転入先である川神学園を中心に回ります、できるだけ詳しく説明しなさい」
「分かりました、ただ時間の都合上案内できない所も有りますが良いですね？」
「構いません、行きましょう」

そう言われて七浜の駐屯地から川神へと向かう。
電車一本でいけるのだが時間の都合上、まだ始発電車がないため多少歩いて時間を潰す。

「何故こんな場所に来ているのですか？」
「何って言われてもここで暇を潰すわけだよ、マルギッテさん」

中華街へと行く、もっぱら目的は美味しい店の発掘と腹ごしらえだ。

「肉まんどうアルカ、綺麗なお嬢さん？」
「要りません、私が綺麗など……冗談は止めて頂きたい」
「さて……とここははじめて見るな」

屋台は早朝から開く所もあるが味を知っているため無視、まぁ、マルギッテさんを綺麗といったのは褒めておくかな、心の中で。

「それで……時間的には問題ないと思うのですが、キョーヤ？」
「えぇ、もう少しで６時だから行きますか、移動するのは電車なんですけど大丈夫ですか？」
「問題ない、ドイツにも電車は通っている」
「そうですか…でもはぐれないで下さいよ」
「広くなければ問題ありません、気にせず案内しなさい」

そう言って川神駅で降りる、意外と広いので驚いたか、少し眼を見開いている。
まぁ、３年も補佐的な立場してたら感情の機微程度は読めるさ。

「少し驚きましたね、こんなに大きいとは……」
「マルギッテさん、はい」

そう言って手を差し出す、ダメ元で。

「どういう了見ですか、これは？」
「はぐれない為に手を繋ごうと……その」

言ってる最中に顔が赤くなっていくのを感じる、クソ！！、なんでなんだよ、普通は言われた側が赤くなるだろ！！！

「その……一人で大丈夫です、その手を引っ込めなさい」

赤面したマルギッテさんがトンファーを使う事も無く俺に手を引っ込めるように言った。

「全く服や寝顔の時はお世辞かと思いましたが……こうされては完全に女性扱いではないですか」

その様な事を顔を真っ赤にしながら香耶に聞こえないように呟くのだった。

そのままお互いが後ろや横を歩きながら案内をする。

川神でも美味しい甘味処が揃っているというので仲見世通りを見せたり、金柳商店街に行ったりもした。

川神の裏側だといって親不孝通りを見せにいったり。

まぁ、そこで意外な人を見たわけだけど。

「アレは……誰ですか？」

「父さんだと思いますけど、なんであんなビルに、話し合いですかね？」

その見立ては間違っては居なかった。

その男は間違いなく逢間長枝で入っていったのはビルであり話し合いであった。

ただもし大人が相手でなく、抑止できる人が居なければ戦争に発展していただろう。

……これは逢間長枝がカラカル兄弟を迎えいれてからさかのぼる事2日前の話。

逢間長枝、教師としての迎え入れ準備（1）

2日前に次に迎え入れる予定の先生の場所へと赴いた、意外すぎて笑ったり泣いたりしたけれどさ。

「ここか……表札も無いのが気になるな」

俺が居たのは親不孝通りの一角のマンションの一室の前である。
ここに教師に出来る人物が居るらしく迎え入れてくれといわれていた。

「さて……と、誰か居ますかー？」

そう言ってインターホンを押す、そしてその後ノックをして不在かどうかを確かめる。

「はい、居ますよっと……」

返答は思ったより早かった、そして扉を開けたのは２Ｍを超える長身でヒゲでジャケットルックでゲイな俺のもう一人の親友。
まさかこんな所で逢えるとは思わなかった、そう思うと自然に涙が流れてきた。

「久しぶりだな、ながど……」

ちくしょう、涙のせいで上手く名前が呼べないじゃねぇかよ。

「長枝なのか？」
「そうだぜ…元気ぞうじゃあねぇがよ」
「金ちゃん！！、長枝が来たぞ！！！！」
「何ぃ！！！！！！？」
「金ちゃんもいるのが？」

その答えはあっという間に出て来た、俺の親友で最高に熱い男、北

枝金次郎が俺の前に立っていた。
「お前、久しぶりじゃないか、元気だったか？」
「うん……元気だったぜ」
「泣き止んだみたいだし、家にあがりな」
そう言われて俺は家に上がった、間取りは２ＬＤＫか、良いじゃないか。
「それでどういうお話なんだ？」
「川神学園の教師に……北枝金次郎、お前が欲しい」
「俺が川神学園の教師に？」
「そうだ」
そう説明すればこの男が怒らないわけが無い、一途という言葉を体現した同性愛者にして最強のゲイ、愛の戦士、長門の逆鱗に触れたのは言うまでも無い。
「お前、長枝、なんて言った、金ちゃんが欲しいだって？」
「長戸、お前は金ちゃんの手伝いで川神学園に来てくれ」
「何？」
「一応二人一組で頼むって言うのが条件なんだよ、いけるかい？」
「長戸が良いなら良いが……どうする、長戸、俺と一緒に仕事しないか？」
「俺が金ちゃんと一緒に仕事、一緒……」
長戸にとってこれほど甘美な響きがあっただろうか。
愛するものと一緒の職場、一緒にする仕事、言い方を変えれば『共同作業』だ。
この言葉に長戸は二の足を踏まずに平然と次の言葉を言った。

「俺は川神学園で一緒に金ちゃんと仕事するぜ！！」
「そうか、金ちゃんはそれで良いんだな？」
「あぁ……これで青空闘技場や、アルバイト無く仕事が出来るなら、それ以上の環境は望まないさ」
「困ったら少しは援助できるんだから気にするなよ、俺たちは親友なんだからな」
「分かっているさ、でもそういう時にだけ頼ろうとするのは本当の友達じゃあないだろう」
「そうか、一応始めに働く日は6月8日だから、その前の日に川神学園で説明あるからさ、その事でまた電話するからな」
「ああ、また来いよ」

そう言われて俺は親友に送り出された、さて……次の先生は。

これは逢間長枝が最後の先生を迎え入れる現在の話。

逢間長枝、教師としての迎え入れ準備（2）

「さて、これで終わりか」

俺の目の前にあるビルは一ヶ月前までヤクザの事務所だったわけだ。
それが組織ごと壊滅して、今はある男が根城にしているらしい。
そんな物騒な奴がね……まぁ、逢えばわかるでしょ逢えば。

そしてドアの前に行こうとすると意外な客が。

「おいおい、李（リ）・静初（ジンチュー）かよ、なんでこんな所にいる？」
「十分仕事は終えてここに居る、この向こうに居るのは師範だ、生半可な奴に渡らせられんな」

「李・静初、悪いが俺はいさかいの為に来たんじゃない、話し合いのために来たんだ」

そう言って俺はドアを開ける。
しかし目の前に居る男を相手に俺は心の昂りを抑える事はできなかった。
なぜならそれは１１年前から続く悪夢の主にして『現代最強』の八極拳士である。
そしてその男、ジョンス・リーは平然と椅子に座って俺を見ていた。

「久しぶりだな、ジョンス・リー……」
「あぁ、香耶、１１年ぶりだな」
「お前に逢えて本当に嬉しいよ……俺は」
「お互いが武を持つであるが故に巡り会ったな」
「もう、腹の中が熱くてたまらないぜ……パンパンだ」
「やる気がか？」
「あぁ……ヤりたくてヤりたくてたまらねぇ！！！」
「そうか、しかし悪いがここでやる訳にはいかねぇんだよ……」

ジョンス・リーが俺を諌めるように言う、それもそうだ。
見た瞬間に戦いたい気持ちが溢れそうになったけれど、今回俺は教師として迎え入れなければいけないんだ。
そして俺は伝えた、３－Ｓで俺の副担任兼部活動顧問で川神学園が迎え入れるという事を。

「ちなみに何部だ？」
「将棋部だ」
「そうか、前向きに考えたらここで師範ばかりやっていてもダメだからな、川神学園の教師も悪くねぇ」
「それなら来てくれるのか？」

「まぁな、ほかならぬお前の頼みとあったら聞くしかないな、それに武神に『現代最強』の高校生の可能性が４人も……これを聞いたら疼くよな、無粋な今日明日がまた１１年前のように面白くなるんだろうぜ、本当に生きてて良かったよ」
「初仕事は６月８日だ、その前日に説明があるから川神学園に来てくれ」
「あぁ、分かったよ」

その言葉だけ残して俺はビルから降りて行った、せっかく１１年前の雪辱のチャンスが……仕事を真剣（マジ）で投げ出したいと思ったのはこれが初めてだよ。

……逢間長枝の迎え入れの仕事、完了。

「帰って行きましたね、どう言った用件なのでしょうか？」
「多分新任教師の勧誘じゃないですかね、転入生が多いですし」
「成る程…良い予想です、さすがは私の副官なだけはある、誇りなさい」

さっきまでの赤面したマルギッテさんは居なくて今はもう凛とした態度で歩いていた。

「それじゃあ七浜まで歩きますか、もう案内するのは川上院とかぐらいですよ」
「そうですか、私も川神百代に遭遇するのは面倒です、帰る案内をしなさい」
「はいはい、その前に何か食べていきませんか、もう7時です、軍に所属していたら朝食のお時間ですよ、マルギッテさん」
「そうですね、しかし駐屯地で食事は作れますから、そのまま帰り

道へ向かいましょう」
「成る程、では向かいますか、マルギッテさん」
そう言って七浜への駐屯地に帰っていくことにした、食事を作る事ができるなら代わりに俺が作れば良いしね。
「待ちなさい、あの橋の向こうで誰かが絡まれています」
「アレは……」
「クリスお嬢様か、急ぎます、来なさい！！！」
「はい！！」
マルギッテさんの言葉に応じて即座に駆ける、しかし白髪の女……ユキまでいるということは……
「テメェラ……何人の娘ナンパしてんだ！！！」
「ヒッ！！！」
「冥府魔道で反省しとけ、コラァァァァァ！！！！」
父さんが降臨、なんか鬱憤晴らすみたいな勢いでナンパしてた男達を退けた、流石だね。
「で……何でこんな朝早く此処に居るんだ、ユキ？」
「散歩ー」
「自分はただ涼みに来ただけだ」
「２－Ｆのクリスティアーネか、ん？」
「父さん、なんか嫌な事でもあったのか、暴れているようだったぞ」
「クリスお嬢様への狼藉者の撤退、感謝します」
「お前ら……何、逢引でもしたわけ？」
「オヤジ、なんだと思っているんだい？」
「立派なデートかと……って眉間にトンファーはやめろ、お嬢さん」

「全く…行きます、香耶、着いてきなさい！！！」
「はっ、はい！！」

父さんの不意打ちの言葉にマルギッテさんは顔を赤くして大きく歩幅を変えたまま走る、そりゃあ俺だって顔は赤いさ。
幾ら天然とはいえ爆弾発言も良い所だろ、今回のはさ。
嫌われたらどうするんだよ、良い関係を築きたいのにさ。

好きかどうかと言われれば好きなんだろう。
3年間同じ戦場で戦い、信頼してきた人だから。
特別な異性として見てもなんら不思議ではないだろう。
ユキは長く居ても兄妹だからそんな気は起こらないが。
花に例えたらあの薔薇（ばら）より鋭い棘（とげ）を持ち、芍薬（しゃくやく）よりも凜と立ち、金（きん）木犀（もくせい）よりも気高く香る、とても素晴らしいこの人を。
そのように賛辞や愛を素直に言葉に出来たらどれだけ嬉しいだろう。
もしその言葉を話す力を神様が持っているのならその神様を殴り倒してでも欲しい、その力が金で売っているなら買いたい、それほどまでにそれを話す力が欲しい。

「あの、怒ってます？」
「貴方の父親はいつもああなのですか、香耶？」
「一応あれでも父親の行動はしてますよ、十分にね」
「幾らなんでもあんな事をいきなり言うとは……予想外です」
「天然ですし、すいません」
「貴方は悪くありません、顔を上げなさい……」

そうは言っているがこっちも顔が赤いのであげられない、マルギッテさんだって強がっているがきっと俺と同じはずだ。

「ふぅ……、ようやく落ち着きましたが、香耶？」

「なんですか？」
「何故まだ俯いているのですか？」
「それには深い理由が……」
「そうですか、電柱にぶつかります、気をつけなさい」
「えっ、うわ！！」

電柱が目の前にあったので避ける、いかんな、赤面しているのを見られないようにしたらミスをして結局は駄目になる。

「全く…注意力散漫です、気を引き締めなさい」
「はい……」

『貴方が原因なんです』など言ってはいけない、その理由を聞かれて正直に答えてトンファーキックされる図が思い浮かぶ。

そんな調子で七浜へ帰る。
上の空というわけではないが、まだ少し緊張と赤面でどうも反応が鈍っている。
久しぶりに出会ってそして朝の爆弾発言のせいかは知れないが、『特別な異性』を意識するとどうしても恥ずかしさがでてくる。
恋愛対象としてみているのかもしれない。
『愛』は『愛』でも『親愛』ではなく真剣(マジ)でこの人に今俺は恋をしているのかもしれない。
今言うのではなくいつの日かもっともっとこの思いが大きくなった時に言おう、早ければ良いというのは間違いなのかもしれない。
しかし先に取られると言うのもそれが理由である、俺はとりあえずこの思いを心に押し込んでおいた。

七浜の駐屯地へと着いた俺はマルギッテさんに料理を作る。

白いソーセージと卵の炒め物、根菜の味噌汁、納豆に白ゴマとじゃこを振りかけたもの。
栄養バランスも味も満足してもらう為に腕を振るった。
一応竜兵たちと全然料理が違う理由は材料の問題だぞ、ひいきじゃあないぞ。

「食べて下さい、マルギッテさん」
「フム、紅茶同様見た目も良い、頂きましょう」

顔も赤くなっていない為、初歩的なミスも無く上手に出来た。
味が良ければ良いんだけどな、上司に先に食わせたり飲ませたりするのは礼儀だ、毒見させているわけじゃあないぞ。

「美味しいですね、思っていた以上の腕です、誇りなさい」
「それはどうも、良かったですよ、喜んでいただいて」

食事をほのぼのとした空気の中微笑みながらしていた。
そしてその様子を見た狩猟部隊の隊員たちは声を聞くために扉の向こうに聞き耳を立てる。

「隊長と副隊長殿、良い雰囲気だな」※ドイツ語です
「あの二人、やっぱり出来てるって」※ドイツ語です

といった風に根も葉もない噂の様な事をからかいを含みながら言う。
しかしその声はしっかりと聞こえていて……
そのドアの向こうに居た香耶は気配も感じていたためドアを開ける。
そしてその顔は赤いが、後で隊員達は『久々に戦場での副隊長を見た』という。
隊長であるマルギッテの顔も同じく赤い。
からかった厳罰として2人で残りの狩猟部隊の隊員を痛い目に合わ

せる事にした。

「ヒィイイ、悪かったからやめてください、隊長！！！」※ドイツ語です

「こちらも反省しているのでやめて下さいよ、副隊長！！」※ドイツ語です

逃げながら隊員達は香耶とマルギッテに許して貰おうと言葉をかけていた。

「許さん、上官をからかった罰だ！！」

「その通りです、自業自得と知りなさい！！！」

しかし2人は聞く耳を持たず追いかけていく。

「「Ｈａｓｅｎ……Ｊａｇｄ！！」」

そして5分後……。

狩り終えて厳罰に処した後、マルギッテは香耶にいつごろ川神学園に転入するのかを伝えた。

「私は明後日の月曜日に川神学園へ転入する予定です、覚えなさい」

「はい、明後日の月曜日ですね、覚えました」

「その日私に川神学園を案内しなさい、一応貴方に言っておきますが拒否権はありません、素直に引き受けなさい」

「はい、引き受けさせてもらいます」

「良い返事です、褒めてあげましょう」

そう言って笑顔を向ける。

といってもいつもの任務と同じ笑顔、そのはずなのにむちゃくちゃ

顔が赤くなる。
今日一日俺は赤くなってばっかりだ。
意識一つで変わるし、理由が『愛』か何かを考えればドツボに嵌まった様に抜け出せない。
今日は来ない方が良かったのかもしれない。
もしこれが『恋をしてるかもしれない』じゃなくて『恋をしてる』のならば俺は今まで気づけなかった鈍感な馬鹿野郎に認定されちまう。

近いうちに誰かにこの気持ちを相談した方が良いな、男のクラスメイトで。

トーマ……悪く言うと女たらしだしあいつほどイケメンじゃないから無理。
英雄……一子一筋の為、参考点が少ない、何より多忙である。
準……ロリコンだから論外。それに年下どころか年上なので無理。

港ぐらいかよ、俺が一度でも話してる奴で相談できそうな奴。
うん、こうなったら港に相談しよう、絶対に。
そう思って俺は月雄荘に帰っていった。

第１５話「逢引のようでそうでない」（後書き）

ポエマーというか変な例え出してスイマセン
次回、３話ぶりに港君が出ます、今の所は戦闘メインじゃないから
出す話に間が開きます、すいません。

第１６話「恋愛の相談は計画的に」（前書き）

トーマの会話パートが面倒だった。
そして『爆殺シューター』降臨。
史上最強≠夢でもやばい戦闘力を誇っています、負け率が高いけど
そこはそれ。
普通に考えたら靭帯切れた足で立つとか十分異常の域ですけどね。

第１６話「恋愛の相談は計画的に」

マルギッテさんを案内した翌日の日曜日、俺は年長者にこの今の気持ちを相談した。

小西さんとコニオさん……

「無理だ、無理無理、女の気持ちなんてわからねぇ、まだ肉の声聞いてるほうが簡単だ」

あんたはプロの焼き手か。

「俺に聞くな、弟に聞け」

いや、聞いてもまたループするじゃないですか。

麗一さん……

「叶わないものもあるんだぜ…やめときな」

なんか遠い目をして呟く、この人昔に失恋したからあまり語りたくないんだな。

駒田さんと月雄さんは仕事。
カイさんとトミ子さんはトレーニング。
浦木さんは学校、山木田さんは寝てる。
戸叶さんは道場に行ってる。
スナイパー空手の布教みたいだけどあの人、俺より弱いんだよね。
カシオさんは哲学っぽく言われるので没。

「こうなったらトーマか準だな……港はドコだ？」※同じ月雄荘に居ます、気づいてません。

そう思って葵紋病院へ向かう、今日は研修みたいな事してないかな？徘徊して看護師の人に研修室での様子を聞く。

「今日、研修室は開いているでしょうか？」
「いいえ、どういった用件でしょうか？」
「葵冬馬と井上準はいらっしゃるでしょうか？」
「ご子息と副院長の息子を呼び捨てとは貴方は何者なんですか？」
「おやおや、キョーヤではないですか」
「ああ、トーマと準に話があってな、悩みだ」
「冬馬さん、この方はどちらなのですか！？」
「私の友達ですが…無礼な真似はしてませんよね、榊原さん？」
「トーマ、ただお前と準の場所を聞いていただけだ、何も悪い事はされていない」
「そうですか、キョーヤがそういうなら信じましょう」
「後、準はどこに居るんだ？」
「私と同じ部屋ですよ、今は勉強を終えてゲームをしているでしょう」
「スマンな、突然で。電話を入れても良かったんだが」
「良いんですよ、英雄やキョーヤなら突然の訪問でも気にしません」
「嬉しいね、そう言ってくれるのは」
「さて、入ってください」

そう言って部屋に入る、綺麗に片付いた部屋だ。
トーマ達は豪華なものを置く気質ではないから綺麗な中に装飾があるなら花か。

「これ、シンビジウムの花か、トーマ？」
「その通りです、キョーヤや英雄を迎えるには最高の花でしょう？」
「花言葉は『飾らない心』、あの時とは違ってお互いが頼りあえて、親友同士だからこそ余計に美しい」
「棕櫚（しゅろ）という選択肢も有りましたがね」
「花言葉は『不変の友情』だが『勝利』があるから全員というよりは英雄向きだよな」
「そういう事です、話は飛びますが、今年の期末に向けて勉強の方は進んでいますか、キョーヤ？」
「一応小テストや今まで出て来た所で出るだろうって所に狙いをつけて、テストみたいにして自己採点したりしている」
「私が出すテストに挑戦してみませんか？」
「トーマのテストか、面白いな」

そんな事を言っていたら準から言葉が飛んでくる、お前はアマカミやる前に俺の顔を見ろ、ハゲが。

「やめとけ、若の奴はマジで面倒だから、難しくて順位一桁の俺でも７００点中５４０取れたぐらいだから」
「平均７５ぐらい点か、やってみるかな」

そう言ってトーマテストを始める。
確かに難しいが着々と進めて最後の科目の数学、最終問題。配点５点

（問題）

３以上の自然数　ｎ　について、ｘのｎ乗＋ｙのｎ乗＝　ｚのｎ乗
　となる０でない自然数（ｘ，ｙ，ｚ）　の組み合わせが無い。
これを証明せよ。

ってこれは……

「トーマ、なんでフェルマーの最終定理をちゃっかり問題に入れてんだよ！！！」

「すいません、それは悪戯問題ですね、正しくはこちらです」

「流石にこれは答えられないぜ」

「私は勉学を覚える際にこれを学びました、独学で解くのに7年は掛かりましたよ」

「詰め込み教育の賜物だな……嫌な思い出だろうけど」

「心配させてすいません、あの時の事は気にせず最後の問題を答えてください」

結果……

「７００点中６２３点、平均８９点ですか」

「凄いな、お前……」

「これでトーマの見立てでは何位には食い込める？」

「今までなら大和君が5位なので、3位か4位は固いですね」

「ちなみに1位は若で2位は英雄だぜ」

「上位3人を友人同士ってのも良いな」

そんな事を言いながら俺はトーマに話すべき事があったのを思い出す。

「トーマに準、そういえば話があったんだ、今まで忘れていたけどさ」

「おっと勉学やゲームなどで忘れていましたが、そういえば悩みがあるんでしたね」

「なんだよ、滅多に悩みなんて言わないから凄いものだとは思うんだが……」

「一応念のため聞くけど、笑わない？」
「笑いませんよ、キョーヤを笑う真似は私はしません」
「そうか……言うぞ」

そう言って息を吸う。
他人に言うとなるとここまで緊張するんだな、心にとどめておけば良いのに。

「実はこの逢間香耶……生まれて初めて恋をした」
「ほう……」
「真剣（マジ）かよ…」
「あぁ、準…大真面目だ」
「それで香耶、お相手の女性は？」
「年上か年下で俺は対応が変わるぜ」
「準、年上だ」
「なんだ、じゃあ俺の管轄外だな、若、あとは頼んだ……」
「この薄情者が……年下だったら殴る気だったくせに」
「当然だ！！、手折る者は駆逐する、それが俺！！！！」
「準は無理なので私が相談に乗りましょう、座ってください、キョーヤ」
「あぁ…こんな相談なんて面倒だろうが頼むよ」
「それにしてもあの日拳を振るった乱暴者が恋とは驚きです……」

からかわれながらも相談が始まった。

「成る程、年上の女性への恋を成就させるコツは強引さです」
「強引さ？」
「相手が自分より長く生きている分、手練手管でその行為から潜り抜けられる場合があります」
「だから多少強引にいかないとチャンスを引き寄せられないって訳

か」
「そういう事です、手の掴むのも、肩を抱くのも、そしてキスを交わすのも、その強引さでチャンスを掴むのが重要です」
「ちなみに聞くけど強引は力づくって訳じゃあないよな、暴力による恋は俺としても望む所じゃあないぞ」
「当然です、相手がその……マゾでもない限り加虐的な恋は控えるべきです」
「なるほどね、良く分かる。優しく接するだけでは無理なんだな、恋ってものは」
「そういうものです、変わりやすく、それでいて鉄の様に硬いと思えば雪のように儚い、そんな神秘的なものを持った人たちと連れ添うのが目標ですからね、あと優しいのも度が過ぎれば臆病の裏返しですよ」

そんな風に恋に関しては臆病になって優しいだけでは効果がないのを知った。
準の奴はアマカミをやっていた、年下のヒロインだけ攻略してんじゃねーよ！！！

「若の恋愛相談はためになったか？」
「なったけど……お前は何で年下のヒロインだけ攻略してるんだよ？」
「だって年上とか同級生とか『女として終わってる』じゃん」
「現実だけじゃなくてゲームにまでその理論は持ち込むな」
「悪いけど後戻りする気は無いぜ」
「そうか、トーマ、もう帰るからさ」
「そうですか、進展があったらまた相談してください、いつでも待っていますよ」

トーマはそんな事をいって手を振り俺を見送る、俺も手を振り返し一番頼りにならないであろう人達に相談する事にした。

「で、来たのかよ、恋云々の相談のために？」

「すんません……」

ゴルフクラブもって仁王立ちをする天ちゃん。

家に入れてくれたのは仕事に行く亜巳さんだが、天ちゃんが腹出して寝てたから服戻そうとしたら起きて、怒られて現在来た理由を話してセクハラ疑惑を解く途中です。

「ウチの服になんで触ったんだ？」

「腹出して寝てたからです」

「それで服戻そうとしたのか？」

「はい」

「最初の疑惑だから、無罪放免だ、楽に座っときなよ」

「あの、恋愛の相談は？」

「ウチがんな事出来る訳ねえだろ、香耶、おめぇ思ったより馬鹿だろ！！！」

「それもそうだね、なんかそういう事に縁無さそうだし、こんな所にいたらね……」

「そうそう、それに他人に聞くのも良いけど結局自分が必死でやらないと、女は靡（なび）かねえぜぇ」

「凄い正論だな…ありがとう」

「礼言うなら飯作ってくれー、タツ姉が仕事行くついでに作ってないから腹減ってきたー」

「はいはい…ってまた冷蔵庫の残り少ないじゃん！！！」

とりあえずある物で作るか…豚肉にキャベツが少々、卵が４つ、竜兵込みで考えたら結構きついな。

「じゃあ、やるけどゲームでもしといて待っててくれ」

そう言って１０分後……。

出来たのは豚肉の甘辛炒め、目玉焼き、にら玉ならぬキャベツ玉。

幸い調味料が多かった為味付けには困らなかった。

それらの料理が食卓に並ぶ、すると丁度竜兵が帰ってきた。

「良い匂いがすんな……って香耶じゃねえか！！！」

めちゃくちゃ嬉しそうな顔をする竜兵、料理ではなく『俺を見て』

確かに笑いやがった。

群れるのが嫌いそうな奴なのに俺には心を開いてるのか？

まぁ、友人として良い奴だと俺は思っているよ、竜兵が俺の事をどう思っているのかは知らんけど。

「今丁度飯作った所だ、お前も食えよ」

そう促す前に喰らいつく、良い食いっぷりだよ、俺の分まで食ってるけど別に構わんさ。

結局恋についての相談結果はトーマは強引さが必要とと言い、天ちゃんは自分が

行動して成し遂げるものだといった。

こうなったら港しかいないな、正論でなおかつ相談できる奴なんて。

「もう自棄になるかなぁ……七浜に行こうか…」

昨日の今日だと言うのに七浜へ向かう俺、一体何がしたいんだろう、

代行業はちゃんとこなしてるけど何やってんのかな？

「…って居るじゃん、港の奴」

七浜の繁華街で近くに不死川が居るのを見かけた俺は、なんかこの状況で相談するものではないなと思い離れる。
ってなんかチンピラが不死川と港に絡もうとしている、あいつら殴ったらちょっとはこの混乱気味の頭なおんじゃね？
後ろから近寄って話しかける、とりあえず顔見られたら良いとこ取られたって思われるだろうしな。

「馬鹿３匹が豚みたいな話し声出してんじゃないよ、全くさ」
「なんだテメェ！！」
「ふざけてんじゃねぇぞ！！」
「ふざけてないと思うんだけどね、少なからず何を相手に言ったかは顔見て分かるんだよ」
「はぁ！？」
「大方釣り合ってないとか言ったんだろ、何で釣り合わないといけない訳？」
「そんなの世界の常識だろ、ブ男と美女が付き合ってるとかわけわかんねーし！！」
「それはもしかして自分は自称イケメンなのに綺麗な人ひっかけられません、だから妬んでますって訳？、顔が悪けりゃ心も醜いね」
「オメェ、チョウシノッテンジャネエヨ！！」
「黙れ、ラリラリ野郎」

大振りな攻撃にカウンターで蹴りを入れる、不良相手に本気はなし、竜兵の時は自分から吹っかけた為例外。
といっても圧倒的に打ちのめせるわけだ、こんな奴ら小西さん達に比べれば弱い弱い、赤子の手をひねるようなもんだ。

「さて……お終いお終い、かーえろ帰ろ」
「待つのじゃ、逢間！！」
「なんだよ、不死川」
「何で今のチンピラを倒した？」
「頭の混乱を止める為だよ、それになんかむかついたから、単純だろ？」
「此方たちと一緒にあるかんか？」
「嫌だね、丁重にお断りする、俺はちょっと考え事の為別の場所に行くんだから」

そう言って俺は不死川の言葉を断り、消えるように走って行った。
決してその…港のデートの時間を引き延ばす手助けしようとか思ったわけじゃあないんだぜ、恩を売るとか人脈とか考えたわけじゃあないんだぜ。

結局夜の公園で落ち着かせてその雰囲気のままベンチに座る。

「それにしても難しいな…」

今回の相談での収穫は気をつける事と行動力の大事さを言われた。
そういうのじゃあなかったんだけどね、まだタッちゃんとかで良かったな。
トーマ達が悪いわけではないけど今回は流石に人選ミスだ。

「何がだい？」
「んっ？」
「そんな深刻そうな顔して何が難しいんだい？」
「港……」

ベンチの隣に港が座る、もうとっくに帰ってると思ったんだけどな。

「悩みがあるんだよ、港に相談しようと思ってたところだ」
「僕に、君が？」
「そうだよ、どこにいるか知らんから他の奴らに相談していたんだ」
「他の奴って？」
「トーマと準だ、一応言葉はタメにはなったが普通に考えたら『エレガンテ・クアットロ』とロリコンに聞いてそう簡単にその行動を実践できるもんじゃあない」
「その呼び名って事は、恋かい？」
「そうだよ、まぁ、お前みたいに不死川と一緒にいた奴なら分かると思ってな」
「いやいや、待て待て、君は何を勘違いしているんだ？」
「えっ、そういった関係じゃあないのか、てっきりそういうものだと…」
「そりゃあ僕だって不死川とは将来そうなりたいとは思っている、しかし手を早くすれば良いわけじゃないさ」
「早ければ他に邪魔されずその人との親密さに差をつけれると思うんだけどね」
「その考えは理想論だよ、優しく接していかないと」
「そういうのは程々にした方が良いんだってさ……って言うかあれ２－Ｆの委員長と小笠原さんだな」
「２－Ｆの奴知ってるの？」
「委員長は準が見守っているって言うのと、小笠原さんは行きつけのお店の看板娘って言うのでね」
「なるほど、あのヤマンバは？」
「知らない」
「そうか、流石に全員は分からないか」
「でも朝から相談相手を探して、こう同じタイプの悩みもちの方がやっぱり収穫は無いが良いものだな」
「誰に相談したんだい？」

「小西さんと麗一さんだよ、2人とも碌な答えじゃなかったけど」
「あの人達、何って返したのか気になるね」
「知ってるのか？」
「一応ね……話してくれないか？」
「分かった、小西さんが『無理だ、無理無理、女の気持ちなんてわからねぇ、まだ肉の声聞いてるほうが簡単だ』ってさ」
「焼肉の凄い焼き手が言う理屈じゃないのか、それ？」
「麗一さんは遠い目で『叶わないものもあるんだぜ…やめときな』ってさ、そんな事でやめる恋は恋じゃあないよ」
「それもそうだよね」
「そういうものだと思うよ、俺は絶対に諦めたくないしな」
「僕も諦める気は無いよ」
「お互いが意中の女性に振り向いてもらえたら良いな」
「それが最善だけど、不死川はお堅いからさ、君も火傷しないように気をつけて、じゃあね」

そう簡単に纏められたように言われて俺と港は別れた。
収穫は無いだろうが有意義な話は出来た、お互いが進展したいものだな。
同じ様な恋の境遇を持つ身としては応援するぜ。

「あの、どちら様ですか？」
「逢間長枝に会ったことは無いか？」
「ちょっとちょっとイケメンじゃない？」
「本当喰いたい系ー」
「イケメンは褒め言葉ではあるが、1人が下品な奴だ、飛べ……」

振り向いたら長髪の男の人が足を振り上げようとしている。
委員長、甘粕真与の返答を待たずに少しの好奇心で話そうとした2人。

小笠原さんは外見に対してなので問題は無い。
ヤマンバは全くもって別だが…
その男はヤマンバと小笠原さんと纏めて蹴り『飛ばそう』としていた。

「おぉおおおお！！！！！」

しかしすんでの所で割り込んで俺は防ぐ、だが防いでもその蹴りはとんでもないものだった。

「ぐあっ！！」
「香耶ちゃん！！？」

防いだはずだというのに飛ばされる、その距離は軽く数えて７ｍか８ｍほど。

「嘘だろ……」

帰り際で見ていた港も振り向いて驚く、だって幾らなんでもこんな威力の蹴りなんて見た事が無い。
掴めて折れたら話は別だろうが。

「いたたたた……着地も一苦労だよ」

どうにか着地をして男の方へと向かう、しかし男の人は別に俺を見ては居なかった。

「お前ら…死ぬ前にに教えておいてやる、俺は妻一筋だ、話しかける内容によっちゃ３０ｍも蹴り飛ばされるんだ、もし生きてたら悔い改めろ……」

いかれてやがる……この人どれだけやばいんだよ、無表情でこんな事いうか？
妻一筋は良いことだけど、３０ｍ蹴り飛ばすとか、生きてたら悔い改めろとか、明らかに今から『殺しますよ』宣言してるじゃないか。

「言っていろ」
「フン……」

ノーモーションであの威力だって言うのか、どおりで蹴りのタイミングが分からない訳だ。

「グッ！！！」

後ろに下がって硬気功で腕を強化して、さらにその腕を交差して防ぐけれどそれでも３ｍは後退させられた。

「お前、中々だな」
「そちらこそ……」

言いたくは無いが…正直な所、この人もしかしたら蹴りの威力だけならモモ先輩以上じゃないのか？
しかも硬気功で足に触れた際に感じた違和感はきっと『気』を使っている。
しかも無意識に体内で爆発させるように。
父さんは鍛錬をしなければこうなると昔に教えてくれていたが、あの一撃を見てこの人が膨大な量を溜め込んでいるのは承知できた。
その上で考えれば普通はありえない。
いろいろな応用の動作をしているそぶりも、コントロールの動作も無ければ、正直１つの『気』が全てその機能を満たしているのであ

る。
こんな事父さんでも出来ない……この人は紛れも無い『天才』だ。
「お前の名前を聞いておくか……」
「逢間……香耶」
「あいつの息子か？」
「逢間長枝の事か、それなら確かに俺の父親ですが」
「そうか……」
父さんの事を言ったら先程までの殺気というか何か空気の緊張が萎んでいく。
男の人が消したんだろう、一体なんでだ？
「あいつの怒りだけは買うべきじゃあないんでな」
「どうしたんですか？」
「今回は見逃すぞ……女達」
そう言って去っていくが最後に俺は質問をする。
「あんたの名前はなんなんだ、俺の名前を聞いておいて自分は名乗らないなんておかしいだろう？」
「答えておいてやる…俺の名前は坂本、坂本ジュリエッタだ」
その言葉だけを言って夜の公園から消えていった。
委員長達も呆然としていたようだ、まぁ目の前で人が５m以上蹴り飛ばされる衝撃映像を見たんだからな。
「委員長達、大丈夫？」
「香耶ちゃんこそ大丈夫ですか！？」

「問題ないよ、かなり痺れてるけど」
問題ないとは言っているがはっきり言って、幾らなんでもここまで痺れる蹴りは初めてだ。
マルギッテさんのトンファーキックも蹴り飛ばすことは出来るが、あの蹴りはそれをさらに凌駕している。
気のコーティングとガタイの大きさがあの威力を作るのだろう、ガクトより背が高い奴なんて月雄荘以外で久々に見たしな。

「あの人誰な訳？」
「父さんの知り合いだね、小笠原さん」
「父さんって長枝先生？」
「そうだよ、あの人とどういう経緯で知り合ったかは知らんけどね」
「マジでー、もしかしてコネでSに入った系ー？」
「羽黒！！、幾らなんでも公私混同はしないと思うよ」
「そうだぜ、一応こう見えてもS組への転科試験は平均点９９でOK貰ってんだから」
「香耶ちゃんは頭良いんですね」
「委員長、あとS組に入ったのは理由としてFだとミイラの格好でもばれるんだよ」
「どういう事？」
「小笠原さん、ミイラでも風間とかには勘でばれちゃうんだよね」
「ばらしたくないからS組に入ったって訳？」
「そういう事、あと結構知り合い居るしね」
「知り合い？」
「英雄とトーマ、準さ」
「あれっ、ユキって子は？」
「上の名前に注目、同じ『逢間』なんだぜ、妹だよ」
「あり得ねー、ＤＮＡ単位で違う系だし！！」

このヤマンバの言動には少しむかついたので殺気を出して牽制しておく。

「そりゃそうだよ、あいつも俺も孤児だぜ、見た目が一緒な訳あるかよ、人の事情が分かりません、知りませんで貶めるのはやめろよ、分かってんのか、ヤマンバ」

「えっ、ワン子と一緒なの？」

「一子ね、あいつは川神院に引き取られたが、俺はある日父さんが俺の子になれよって提案してきた、それも１７、今の俺と同じ年の時にな」

「えっ、長枝先生って今何歳よ！？」

「２８です……詐欺ってませんよ、真剣（マジ）でこの年齢です」

「驚きですね、千花ちゃん」

「うん」

「それでユキの時は２１」

「えっ、一緒の時期に引きとらなかったって、一体それってどういう経緯？」

「黙秘します、刺激が強いんで、またユキ自身に聞くか、風間には話しているから聞いてくれ、俺は帰るんで、また明日」

「さようならです、香耶ちゃん」

「またお店来てねー」

小笠原さんと委員長は快く帰るときに声をかけてくれた、ヤマンバはなんか睨むような視線を送ってきていたけど全然怖くない、だってタッちゃんとか竜兵の方がまだよっぽどだもんな。

一応診療時間が空いていたから、帰る途中で葵紋病院で腕の診察をしてもらったが骨にヒビは入ってなかったようだ、あの重さだからありえるかもしれないと思ったんだが。

「私は別にいつ来ても良いといいましたが、できれば患者になるかもしれないような無茶はやめてください、キョーヤ」
「スマン、しかし準の逆鱗に触れるだろう、『小さな子を見捨てた』なんて」
「割り込まなくてはいけなかった、それは仕方ない事ですが、心配させないで下さい、本当に」

トーマが診察代行をしてくれていたが軽く説教を貰った、帰る際の玄関前で。
こいつは真剣に俺のことを心配してくれているからな、できれば心配の種にはならないようにしたいが……。
こういった人助けになるとどうもな、俺はそう思って苦笑いしながらトーマにお休みといって再びの帰路へと着いた。

月雄荘の前でとても意外な人が居たけどね。

「あれ、港じゃないか」
「あれ、香耶君、どうしたんだい？」
「どうしたもこうしたも俺、ここの住人だよ」
「なっ、本当かい！？」
「本当だ、ここだここ、１０４号室」
「僕、その真上の２０４号室だよ」
「そうか、だから小西さんの事も知ってたのか？」
「そういう事だよ」
「明日に備えて寝るから玄関前の話はこれくらいに切り上げて……お休み」
「あぁ、僕も速く行かないとね、お休み」

そう言って俺は家のドアをあけて、港は階段を登っていった。

第１６話「恋愛の相談は計画的に」（後書き）

男の友好度では現在こんな感じです。

モロ　キャップ　竜兵　港

意外にも竜兵が上位な件については気にしないで下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1657x/

真剣で猟犬に恋しなさい!!

2011年10月28日10時04分発行